

第53回 日米学生会議

The 53rd Japan-America Student Conference

日本側報告書

相互理解と「力」の獲得

Mutual Understanding and Empowerment



1934 ~ 2001

グローバル化社会における日米双方の可能性の探求

~ Exploring Japan-U.S. Relations in a Globalizing Society ~

第4章 本会議報告 - 分科会の成果

➤ 異文化間問題.....	94
➤ 情報技術.....	98
➤ 人間の安全保障.....	103
➤ ビジネス.....	108
➤ マスメディア.....	114
➤ 通商政策.....	118
➤ 民族問題.....	122

第5章 本会議報告 - スペシャルトピックの成果

➤ 食文化.....	126
➤ 映画とアニメ.....	127
➤ 教育制度.....	128
➤ ナショナリズム.....	129
➤ スポーツと文化.....	130
➤ 安全保障.....	131
➤ 反体制思想とサブカルチャー.....	132

第6章 会議を終えて

➤ 第53回日米学生会議参加者の感想.....	134
➤ 米国同時多発テロ事件に寄せて.....	161

第7章 第54回日米学生会議

➤ 第54回日米学生会議の概要.....	164
----------------------	-----

第8章 第53回日米学生会議開催にご協力くださった方々

➤ 協力者.....	168
➤ 賛助者・団体・企業.....	172

第53回日米学生会議 日本側報告書

—目次—

序章

➤ 日本側実行委員長の挨拶.....	2
➤ アメリカ側実行委員長の挨拶.....	3
➤ 内閣総理大臣からのメッセージ.....	4

第1章 第53回日米学生会議の概要

➤ 第53回日米学生会議理念.....	6
➤ 第53回日米学生会議テーマ.....	7
➤ 第53回日米学生会議 活動の概要.....	8
➤ 第53回日米学生会議参加者.....	10
➤ 本会議の行程.....	12

第2章 事前活動報告

➤ 第53回日米学生会議実行委員会主催 公開講演会.....	14
➤ 春合宿.....	17
➤ 防衛大学校訪問.....	18
➤ 事前勉強会.....	19

第3章 本会議報告 - サイト活動の成果

➤ 京都サイト.....	24
➤ 広島サイト.....	31
➤ 沖縄サイト.....	48
➤ 東京サイト.....	77

序章

日本側実行委員長挨拶

アメリカ側実行委員長挨拶

内閣総理大臣からのメッセージ



日本側実行委員長の挨拶

第53回日米学生会議実行委員会

日本側実行委員長 森下麻衣子

今までは深く知らずにいた社会における諸問題の複雑さ、今までにはなかった新たな視点、そして今までは向き合うことのなかった自分の弱さ、もしくは今までは気付くことのなかった自分の強さ。

第53回日米学生会議の活動を通じて63名の参加者は、様々な人、そして考えや思いに遭遇したに違いありません。これらを見出すことにより参加者は、それぞれに何かを得、もしくは得るきっかけを掴んだことでしょう。私たちの中の可能性は確実に広がりました。日米学生会議における試みは、その活動を通じて、参加者の、そして社会の中のあらゆる可能性を追求し、広げることにあつたといえます。

日米学生会議の素晴らしさは、その「非日常性」にあると思います。我々は、1ヶ月の間、63人の仲間とともに寝食を共にしながら、様々な事柄について議論をし、様々な経験を共有するのです。そこにあるのは、決して逃げ場のない空間です。普段ならすぐに忘れることのできる社会問題もしくは自分の弱さ。1ヶ月も続く会議の中では、そんなごまかしは利かないのです。1ヶ月の会議を通じて参加者は、自分、そして社会に向き合うことを要求されるのです。そして、そこから見えてくるものは、日常の中では見ることのできないものたちなのです。

もちろん、私たちは、必ずしも社会における、様々な問題を解決する万能薬を見出すことはできなかったかもしれません。しかし、私たちの議論、そして経験の中に答えの一部、もしくは、その手がかりがあるでしょう。私たちは、必ずしも自分たちの弱さを克服するには至らなかったかもしれません。しかし、これらに気付くことのなかった頃、これらに向きあふことのなかった頃の自分よりは確実に成長しているでしょう。私たちは、全ての参加者と真の相互理解に到達することはできなかったかもしれません。しかし、ここで重要なのは、自分たちの力が許す限り、多くの場合は、それぞれの体力的、精神的限界と戦いつつ、こうしたことに取り組んだことにあります。

第53回会議は終わりました。しかし私たちには、第53回会議を通じて得た可能性を追求し、広げる責務があります。第53回会議は、私たちに終わることのない取り組みを課したのです。重要なのは、会議を通じて私たちの中に灯った小さな火を消させないこと、差し込んできた一筋の光を追い求めることです。それは、私たちの「日常」という生活の中で決して易しいことではないでしょう。しかし、第53回本会議の成功を今祝うことができたとしても、第53回会議の本当の成功が判断されるのは、まだ先のことです。今は、私たちそれぞれの未来、そして私たちが創り上げる社会の未来に思いを託したいと思います。

最後になりましたが、第53回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆さま、ご賛助賜りました財団・企業の皆さま、準備段階並びに本会議でご協力賜りました講師の皆さま、立命館を始め各開催地でご支援賜りました皆さま、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、並びにJASC Incの皆さま、そして数多くの場面で温かく見守って頂いた日米学生会議OBの皆さま、その他様々な形でご支援、ご協力頂いた全ての皆さまにこの場をお借りして心より厚く御礼申し上げます。皆さまのご協力なくして第53回日米学生会議が成功することはできなかったと感じています。ありがとうございました。

アメリカ側実行委員長の挨拶

The 53rd Japan-American Student Conference Executive Committee
American Executive Committee Chair Jaime Hulse-Barker

Hello, and thank you for your interest in the Japan America Student Conference. These are words that I have said many times over the past year, to a surprising number of people. For all of the repetition, these words still carry a great amount of meaning. For without the continuing interest of educators, professionals, and students in the United States and in Japan, there would simply not be a Japan America Student Conference. As JASC is a valuable and life-changing experience for everyone who is involved, this would be depriving young leaders of an irreplaceable opportunity.

The 52nd Japan America Student Conference was an experience unlike anything else in my academic career. The intensity of living and working with such a group of people for an entire month, through the tough schedule, culture shock, traveling, and countless other little things; being a part of this so much surpassed anything anyone could have told or taught me in a classroom about cross-cultural communication or interpersonal relations. This had such an effect on me that when it came time to commit ourselves to the planning of the 53rd Conference, I could not do otherwise than to volunteer my time and efforts for the next year. The experience of the 52nd JASC was such that I felt so compelled to share it with others, namely, the participants of the 53rd JASC.

The initial planning meetings of the 53rd Conference were an exciting and emotional time. Laying the groundwork for the next JASC was intimidating and exhilarating all at once. Our theme “Exploring Japan-America Relations in a Globalizing Society” was meant to embody, in some way, every aspect of the issues we would be confronting at the next conference. The process of molding our conference to this vision was long and painstaking, but has been the motivation behind my colleagues tireless efforts throughout this past year in the organization of the 53rd JASC.

These efforts I have seen rewarded during the 53rd Japan America Student Conference. Our delegation was full of promising and idealistic students who had something to share with each other, and an eagerness to be exposed to new ideas and ways of thought. This fact gave life to the plans we as the Executive Committee had laid. The delegates of the 53rd JASC rose to the tasks we set before them, coming together as a group to begin to confront the major issues which challenge our world today. The delegates realized their own potential, finding a voice and active commitment within themselves to pursue the ideals of the Japan America Student Conference- mutual understanding, friendship, and empowerment. As we concluded the conference, I could see the familiar intensity of this commitment within the delegates, and the members of the 54th JASC Executive Committee. For these reasons, I want to sincerely thank all of those who have made the Japan America Student Conference possible, those who supported us in the 53rd JASC, and those who will continue to make this experience a reality for a group of Japanese and American students next summer. Thank you for providing all of us with this special opportunity.



内閣総理大臣からのメッセージ

「第 53 回日米学生会議」の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

日米両国の学生有志の発意に基づき 1934 年に開始された日米学生会議が、本年で 53 回目の開催を数えるに至ったことを喜ばしく思います。この間、長年に亘り、日米学生会議は政治、経済、文化等、幅広い分野における両国間の協力関係の進展を反映しながら、自由闊達かつ有意義な意見交換を重ね、参加者同士の友情を深めてきました。かつてこの会議への参加者が両国の各界で活躍されているのを見るにつけ、次世代を担う若者の交流の重要性を強く認識させられる次第です。

21 世紀の国際社会ではグローバル化が更に進展し、人々の生活に恩恵が与えられる一方、解決を要する様々な問題が新たに出てくるものと思われまます。日米両国が共通の課題に対し、協力して取り組んでいくことが世界の平和と安定のために不可欠であります。このような認識の下、私は 6 月に訪米し、ブッシュ大統領との間で、日米間の共通の価値観、相互信頼、そして友情に基づくパートナーシップを再確認したところです。

本年の日米学生会議が、「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」というテーマを掲げ、これからの日米関係のあり方について創造的な議論を展開されることは大変意義のあることと考えます。皆さんがこの会議の成果を生かして今後の日米関係の発展に力を寄せてくれることを期待します。

この会議の開催が 21 世紀の幕開けを飾るに相応しい、実り多い会議となることをお祈り致します。

内閣総理大臣

小泉純一郎

第1章

第53回日米学生会議の概要

第53回日米学生会議理念

第53回日米学生会議テーマ

第53回日米学生会議活動の概要

第53回日米学生会議参加者

本会議の行程



第 53 回日米学生会議理念

Mutual Understanding and Empowerment

相互理解、そして「力」の獲得

人間は一人一人が社会に対して何らかの作用を及ぼしている。作用の対象となるコミュニティは実に多様である。国際社会、国内社会、地域社会、家族、あるいはサイバースペースなどさまざまなコミュニティの中に我々は生きている。それぞれのコミュニティには、多様で複雑な問題が顕在、または潜在している。21 世紀社会を向上させていくためには、これら諸問題の改善、解決を図っていく人間の営為、すなわち問題解決へ向けた継続的な努力を欠かすことができない。その際、行動の主体となる個人に必要なのは、問題を発見、認識する力であり、問題の改善、解決を進める力であろう。そうした「力」は各個人、各問題に応じて多様なものであり、必ずしも均一な何かではない。

1934 年に 4 人の日本人学生が、「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある」という信念のもとアメリカに渡った時から日米学生会議の歴史は始まった。彼らが作用の対象としたのは、急速に悪化しつつあった日米関係であった。第 53 回会議を向かえる今、日米関係が安定している一方で世界には様々な問題が散在している。我々は、それらの問題の何に、どのように取り組んでいくべきなのだろうか。

次世代社会を創り上げていく仲間とともに、そのような問題を模索し、時には価値観を受容し、時には衝突していく中で異文化間、個人間の相互理解を深める。そうした試みを通じて各人が人格的にも文化的にも自らを相対化し、自己の枠を乗り越え、さらなる可能性を見出していく。それは次代の社会を担う個々人がそれぞれに「力」を養っていく過程であり、第 53 回日米学生会議の理念である。さらに、会議の成果を社会と共有せんと発信していくことにより、21 世紀社会の向上を実現していく「力」を、一つでも多く社会の中に呼び起こしていくことを本会議は目指す。

第53回日米学生会議テーマ

Exploring Japan-U.S. Relations in a Globalizing Society

「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」

移動、そして通信手段の発達、経済活動に誘発される形でグローバリゼーションは進んできた。近年では、情報技術の画期的な進歩が引き起こした諸影響により、その傾向は一層強化されている。グローバリゼーションという大きな潮流の中で、既存の枠組みが崩れていき、国家、企業、個人などを取り巻く国際環境は大きく変動しつつある。しかし、以前には考えられなかったほどの効率性と利便性がもたらされている一方で、情報格差が貧富の差をもたらすなど、利益を享受する強者の存在は同時に社会的弱者を生み出している。また、グローバル化に伴い強者の価値観が普遍化し、文化的な摩擦へと至る。

国際社会において強い影響力をもつ日米両国は、この新しい情勢に対応し、生じている様々な問題に取り組むことが必要であろう。我々も一人の人間としてこうした問題への認識を深め、その改善を志向していくことが重要である。このような問題意識をもとに、第53回日米学生会議は「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」をテーマとして掲げた。テーマのもとに、異文化間問題、ビジネス、マスメディア、IT、通商政策、民族問題、人間の安全保障、以上7つの分科会が設置した。会議では、分科会の活動を中心にグローバリゼーションの諸相を様々な分野から明らかにし、その正負両側面の影響を検証した。その上で、他の世界との関わり合いの中で日米に期待される役割とは何か。そして日米双方はグローバリゼーションという大きな潮流の中でどのような影響を受け、どのような変化を促されているのか。文化的背景や価値観の異なる人々が、人種や民族の違いを超え、情熱をぶつけながら率直に議論を展開することのできる環境の中で、こうした問いに取り組むことを第53回日米学生会議は目指した。



第 53 回日米学生会議活動の概要

主催：財団法人 国際教育振興会

後援：外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター

(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会

期間：2001 年 7 月 27 日～2001 年 8 月 23 日

● 本会議の構成

第 53 回会議の理念、『相互理解、そして「力」の獲得』を踏まえ、本会議は計画、運営された。これは、会議の全てに反映させるべく、前会議の終盤に第 53 回実行委員会によって考案され、参加者に提示された会議理念である。本会議の主な活動は大きく以下に分けられる。サイトイベント、分科会活動、スペシャルトピック (ST: 全体討論会) である。なお、会議は原則として英語で行われた。

サイトイベント (20 pg 参照) は第 53 回会議の特徴であった。各開催地の決定や、「京都ワークショップ」、「Student Forum in Okinawa 2001」、「平和への誓い」、「東京フォーラム」などのサイトイベントは各サイト理念に沿って考案された。

分科会 (90 pg 参照) では、7つの分科会それぞれについて9人の学生が集中した議論を行った。これらの分科会は53回会議テーマである『グローバル化社会における日米双方の可能性の探求』に基づいて設置されたものである。全ての会議参加者が夏の本会議前に自らの主張をまとめた英文ペーパーを作成し、各分科会内での事前の勉強会などを経て、本会議では討論が繰り広げられた。また、各分科会では実地研修を行った。ここでは、社会の第一線で活躍されている方たちから直接お話を伺うことができ、分科会議論をより実り多くする上で効果的であった。

スペシャルトピック (ST) (122 pg 参照) は、分科会議論とは異なり、会議全体で行う全体討論会である。各種トピックは会議理念に基づき設置されたが、安全保障問題から食文化など、幅広い議題を取り扱った。具体的には、各 ST に所属する学生が事前に資料作成や諸準備を行い、本会議においてその準備を基に全体討論会を行った。実際に専門の方を講師としてお招きしたり、演技、運動、芸術的手法 (ペインティングなど) を取り入れたり、ただの議論とは異なり各 ST が様々な工夫をこらした。

● 会議運営

第53回日米学生会議の会議企画・運営は原則としてすべて学生の手によって、行われた。第52回会議の終盤（2000年8月下旬）に選挙で選出された日米14人の実行委員が約1年間に渡り会議の骨子となる、会議理念、テーマ、サイト、分科会議題、スペシャルトピック（ST：全体討論会）の決定を全て共同で行った。

これらに加え、日本側の実行委員は独自に、財務活動、予算書作成、事業計画書作成、実施要綱作成、広報活動、公開講演会（計3回）、参加者選考（2～3月）、春合宿（5月）、防衛大学校訪問、事前勉強会（計3回）、報告書作成などを企画、実施した。

一方で日本開催ということもあり、参加者も主要な役割を担った。一ヶ月に渡る会議の成功は、14人の実行委員の力だけでは不可能である。第53回会議では、参加者も積極的に会議の企画・運営に関わった。特に、各種サイトイベントの企画・実施にあたっては、日本側参加者がサイトスタッフという形で重要な役割を担った。参加者は企画のコンテンツ・広報活動はもちろん、場合によってはロジスティクス決めや財務活動にまで関わった。また、スペシャルトピック（ST）の企画を初め、機関紙作成、Tシャツ作り（記念品）、報告書編集、本会議中の有志討論会の企画・運営なども参加者の全面的協力の下行われた。



第 53 回日米学生会議 <日本側参加者 一覧>
The 53rd Japan-America Student Conference <Japanese Delegation>

名前	大学	学部 / 学科	学年
日本側実行委員会		The Japanese Executive Committee	
大井 美歩	中央大学	経済学部国際経済学科	4 年
岡本 紘明	慶應義塾大学	法学部法律学科	3 年
織田 健太郎	東京大学	教養学部総合社会科学科国際関係論分科	3 年
藤井 康次郎	東京大学	法学部	3 年
三田 重恭	慶應義塾大学	法学部政治学科	4 年
森下 麻衣子	慶應義塾大学	法学部法律学科	4 年
山下 淳一	慶應義塾大学	法学部政治学科	3 年
日本側参加者		Japanese Delegation	
秋山 洋児	立命館大学	国際関係学部国際インスティテュート	2 年
荒木 龍	一橋大学	法学部	2 年
石川 一郎	慶應義塾大学	総合政策学部	3 年
伊藤 公一朗	京都大学	経済学部	2 年
入江 芙美	九州大学	医学部医学科	6 年
宇佐美 友加	愛知淑徳大学	大学院コミュニケーション研究科	博士前期課程
Edwin Ng	一橋大学	経済学部	4 年
喜多 洋輔	国立三重大学	医学部医学科	4 年
後藤 将	東京大学	法学部公法学科	4 年
坂江 裕美	慶應義塾大学	環境情報学科	4 年
佐々木 淳	青山学院大学	法学部私法学科外国法涉外法コース	3 年
柴田 綾沙美	慶應義塾大学	経済学部	2 年
千代 明弘	国際基督教大学	教養学部社会科学科	2 年
鶴田 彬	上智大学	法学部法律学科	2 年
出浦 直子	慶應義塾大学	法学部法律学科	2 年
中尾 真希	中央大学	法学部国際企業関係法学科	2 年
中川 由紀	一橋大学	法学部	3 年
糠田 美穂	慶應義塾大学	法学部政治学科	3 年
布川 俊彦	東京大学	教養学部地域文化研究アメリカ科	4 年
夫馬 賢治	東京大学	教養学部総合社会科学科国際関係論分科	3 年
古川 敏明	東京大学	大学院総合文化研究科	修士課程 1 年
松岡 洋平	京都大学	教育学部教育心理学科	3 年
山口 臨太郎	東京大学	経済学部経済学科	4 年
Ng Yook Meng	京都大学	経済学部経済学科	3 年

第53回日米学生会議 <アメリカ側参加者 一覧> The 53rd Japan-America Student Conference <American Delegation>

Name	University	Major	Year
アメリカ側実行委員会	The American Executive Committee		
Mr. Neil Broadley	Oberlin College	Japanese / Spanish	Sophomore
Mr. Dustin Garis	University of North Carolina	Business	Junior
Ms. Mital Gondha	University of North Carolina	International Studies	Senior
Ms. Jaime Huelse-Barker	West Virginia University	International Studies / Nutrition	Graduate
Ms. Maria Jimenez	Campbell University	International Business	Senior
Ms. Allison Kramer	Eckerd College	East Asian Studies	Graduate
Mr. Chinazor Ojinnaka	Howard University	Health Management	Graduate
アメリカ側参加者	American Delegation		
Mr. Joseph Boski	University of Hawaii	Urban & Regional Planning	Master's
Mr. David Buckley	Boston College	Sociology	Sophomore
Ms. Jessica Cardenas	Campbell University	International Business	Junior
Mr. Brian Cathcart	Tufts University	Japanese	Senior
Ms. Tina Chen	Harvard University	Applied Math & Economics	Senior
Ms. Liv Coleman	Smith College	East Asian Languages & Literatures / Government	Senior
Ms. Lisa Daily	Eckerd College	Art / Writing / East Asian Studies	Sophomore
Ms. Parima Damrithamanij	Duke University	Economics	Junior
Mr. Steven Fuchs	State University of New York	History	Doctorate
Ms. Krisa Gardner	Wesleyan University	East Asian Studies	Sophomore
Ms. Rachel Golden	University of California, Berkeley	Development Studies / Public Policy	Sophomore
Mr. Ethan Jennings	University of Washington	International Studies	Junior
Ms. Amy Jones	University of Kansas	Japanese	Senior
Ms. Sophia Kan	University of Washington	International Business / Political Science / Asian Studies	Fifth
Ms. Ann Moore	University of Texas at Austin	Sociology	Doctorate
Mr. Bernard Murray	Howard University	International Business	Freshman
Ms. Jaime Muscar	Washington and Lee University	East Asian Studies	Freshman
Ms. Hannah Peterson-McCoy	Howard University	International Business	Sophomore
Ms. Lourdes Rivera	University of Guam	Secondary Education / Mathematics	Sophomore
Mr. Laticco Robinson	George Washington University	International Affairs	Master's
Mr. Brian Ruh	University of Texas, Austin	Asian Studies	Master's
Mr. Rasheed Townes	Harvard University	Government	Junior
Mr. Hsinyi Tsang	Johns Hopkins University	Biomedical Research	Doctorate
Ms. Nana Uemura	Oberlin College	East Asian Studies	Sophomore
Ms. Hua Wang	Duke University	Public Policy	Sophomore



本会議の行程

京都

- 7月 26日 (木) 日本側参加者集合
- 27日 (金) アメリカ側参加者集合
- 28日 (土) ジョイントオリエンテーション／オープニングセレモニー
- 29日 (日) 京都散策／文化紹介スキット
- 30日 (月) 京都ワークショップ
- 31日 (火) 分科会#1、#2 / ST「食文化」
- 8月 1日 (水) 分科会#3、#4 / ST「映画とアニメ」
- 2日 (木) ST「教育システム」 / 分科会#5 / 広島サイトブリーフィング

広島

- 3日 (金) 移動
- 4日 (土) Rizzuto 氏講演会 / ST「ナショナリズム」 / 平和記念資料館
世界平和連帯都市市長会議開会式 / チュ・ソク氏講演会
- 5日 (日) 岡本三夫氏講演会 / 平岡敬元広島市長講演会
世界平和連帯都市市長会議「市民との対話集会」参加
- 6日 (月) 平和記念式典参列 / 広島散策 / 灯籠流し

沖縄

- 7日 (火) 移動
- 8日 (水) 分科会#6、#7
- 9日 (木) Student Forum in Okinawa 2001 開会
海兵隊基地 / 嘉手納基地訪問 / 平和学習
- 10日 (金) 文化体験(琉球舞踊、琉球音楽、琉球空手)
複数講師をお招きしてのディスカッション
- 11日 (土) 沖縄一般公開フォーラム / 閉会 / 日本側参加者米軍基地にて
ホームステイ / アメリカ側参加者沖縄の方の家にホームステイ
- 12日 (日) ST「スポーツと文化」

東京

- 13日 (月) 移動
- 14日 (火) 分科会#8、#9
- 15日 (水) 分科会#10 / ST「安全保障」
- 16日 (木) ST「反体制思想とサブカルチャー」 / リフレクションミーティング
- 17日 (金) フォーラム準備
- 18日 (土) フォーラム / レセプション
- 19日 (日) 新実行委員選挙
- 20日 (月) 新実行委員ミーティング / 外務省レセプション
- 21日 (火) 新実行委員ミーティング
- 22日 (水) 新実行委員ミーティング / クロージングセレモニー
- 23日 (木) アメリカ側参加者帰国

STとはスペシャルトピックを指す。

第2章

事前活動報告

第53回日米学生会議実行委員会主催 公開講演会

春合宿

防衛大学校訪問

勉強会



第 53 回日米学生会議実行委員会主催 公開講演会

● 明石康氏講演会

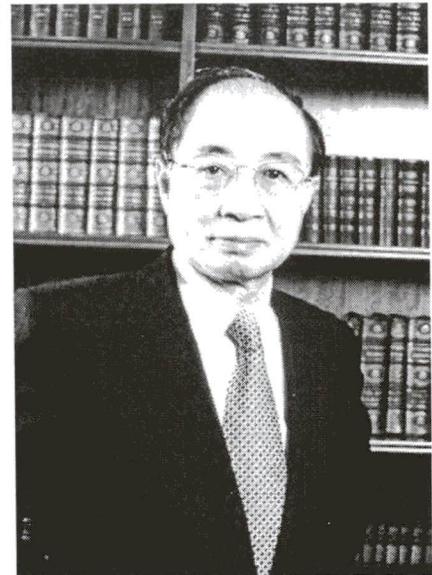
日時：2001年1月12日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

明石康氏

【略歴】54年東京大学卒業。米国フレッチャー・スクール大学院に留学中、日本人としての国連職員第1号に就任する。74年日本外務省に勤務、国連代表部参事官、公使、大使を務めた。79年事務次長（広報担当）として国連に戻り、87年軍縮担当の事務次長となる。92年1月にカンボジア暫定統治機構（UNTAC）の国連事務総長特別代表、94年1月より旧ユーゴスラビア問題担当国連事務総長特別代表、95年国連事務総長特別顧問。99年日本予防外交センター会長、人口問題協議会会長、日本国際連合学会理事長に就任する。

【主な著書】『国際連合』（岩波）、『国連ビルの窓から』（サイマル）、『国連から見た世界』（サイマル）、他多数。



テーマ：「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」

グローバル化が叫ばれる今日でも、国境は依然として大きな意味を持ち、国際交渉の主な主体は政府である。また、経済の次元での国際的な均一化が進む一方で、文化的レベルでは国民意識、民族意識、宗教意識が高まるなど、アイデンティティが強化され、分裂していく傾向があることも否定できない。こうした、逆向きの2つのベクトルをどう制御していくかが今日の課題である。

アメリカのプレゼンスは冷戦後ますます力強いものとなっている。その力の源は、文化、経済力、軍事力、強力なイデオロギーなどであるが、アメリカが目指すべき完全なモデルではないことに注意しなくてはならない。アメリカにも長所と短所があるのである。また、アメリカの外交政策には、積極政策と消極政策との間で大きな振幅が見られるので、アメリカに完全に依存した国際体制は必ずしも安定したものとはならないだろう。

21世紀におけるアジアの平和は、日本と中国が良好な関係を構築、維持していくことができるかにかかっているのではないか。アメリカに関しては、アジアにおけるバランスを維持する役割をしばらく持ちつづけると予想される。今後は、日米中関係を大切にしていかななくてはならない。

今後の日本が向かうべき方向性を、概括的に述べるならば、経済のみならず、政治、文化など幅広い視点を取り入れた国際協調を進めていかななくてはならないだろう。PKO派遣をめぐる議論で明らかとなった内向きな平和主義も再考しなくてはならないのではないか。国内、外交政策に鮮明なヴィジョンを持った「たくましい日本」、世界から積極的によいところを吸収しようと努める「学ぶ日本」、そして日本の強み、弱みを冷静に分析し政策を決定、遂行していく「合理的な日本」。これらが日本が目指すべきモデルである。

● 齊藤健氏・山元雅信氏講演会

日時：2001年2月17日

場所：中央大学駿河台記念館

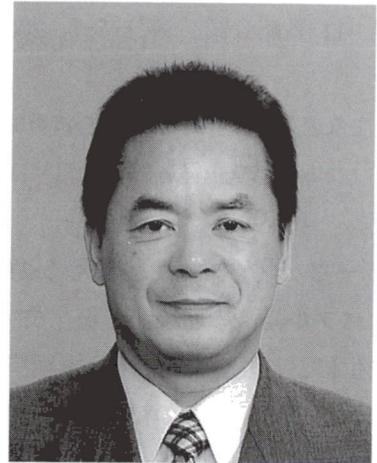
齊藤健氏（写真左）

【略歴】83年通商産業省入省、2000年通商産業研究所総括主任研究官、機械情報産業局電子政策課情報国際協力室長、2001年内閣官房（行政改革推進調整室）へ出向。



山元雅信氏（写真右）

【略歴】44年生まれ。日立造船やセガ・エンタープライゼスを経て、88年に独立。国内外や大学で講演・就筆中。また、大学生との世代間交流の会を主宰。現在、国際ビジネスコンサルタント会長、ビジネスモデル特許協会副理事長を務める。



テーマ：「21世紀大胆予測 ー官と民に問う IT社会における日本の戦略ー」

第53回日米学生会議のテーマ「グローバル社会における日米双方の可能性の探求」にちなみ、今話題のIT分野において日本がどのように戦略を立てて行くべきかを考えるための講演会を開いた。「官と民に問う 21世紀日本のIT戦略」と題し、内閣官房行政改革推進調整室の齊藤健氏と国際ビジネスコンサルタントの山元雅信氏にご講演を依頼した。

山元氏は講演の中で特許の重要性を強調した。世界、とくにアメリカにおいては特許がビジネスの中で大きな存在感を持っているとし、アイデアを特許として保護してビジネスチャンスを広げるアメリカのプロパテント政策がアメリカの経済を牽引していると述べた。とくにITの分野では、ビジネスモデル特許など特許獲得競争が顕著であるとし、IT戦略にも特許競争への競争力強化も欠かせないとした。その上で、日本はこうした潮流に乗り遅れないため、従来の政策をアンチパテントからプロパテントに改め、若い人たちにも多くのビジネスチャンスを広げてゆくことができれば景気回復、ひいてはグローバル化の中での競争力強化に有効であるとの論をとった。

一方齊藤氏は、官という立場から国がこれからどうした方針を取るべきかを説明した。従来の日本の国家戦略では、国家が主体となって戦略を立て経済発展を実現するとした形式だったが、そうした時代はもはや終わり、これからは民間が自由に経済活動ができるような環境を整えるのが国家の役割だと述べた。日本のビジネスがグローバル社会で競争力をつけてゆくためには、まず国内法の整備と見直し、インフラの整備が国家のとしての第一課題であるとした。



● 竹中平蔵氏講演会

日時：2001年2月19日

場所：日米会話学院

竹中平蔵氏

【略歴】73年一橋大学経済学部卒業後、日本開発銀行に入行。ハーバード大学ペンシルバニア大学客員研究員、大蔵省財政金融研究所主任研究員、大阪大学経済学部助教授、ハーバード大学客員准教授を経て、90年より慶応義塾大学総合政策学部助教授。98年「経済戦略会議」メンバー、2000年「IT戦略会議」メンバー、2001年「IT戦略本部」メンバー、同年国務大臣経済財政政策担当大臣。

【主な著書】『経済済民－「経済戦略会議」の180日』（ダイヤモンド社）、『みんなの経済学』（幻冬舎）、『ソフト・パワー経済 21世紀・日本の見取り図』（PHP研究所）他多数。

テーマ：「竹中平蔵と考える21世紀経済構想」

バブル経済の崩壊から現在まで、日本は長期的な不況に陥っている。この講演会では、竹中平蔵先生にお越しいただき、日本経済の再生のためには、いかなることが必要であるか、お話を伺った。

竹中氏は、日本の将来のためには、不良債権を処理し、バランスシート問題を解決することが大切であるとおっしゃった。不良債権の問題があるために、銀行は新しいプロジェクト開発等に貸し出しができない。バブルの崩壊したときから今までずっと先送りにしてきたために、日本が未だに不況から脱することができないでいる。だからこそ不良債権を取り去ることにより、バランスシート問題を解決し、銀行から成長産業への融資を積極的に行い、経済再生を図ることが重要である。その際には公的資金の注入の必要性が考えられる。同時に財政赤字問題のなどを中心とした、構造改革を行う必要性もある。また、構造改革にはリアクティブなものプロアクティブなものがあり、リアクティブ、つまり受身なものは不良債権処理などを示す。プロアクティブ、前向きなものはチャレンジャー支援、民営化などである。これを推進させるためには第一には、規制緩和をして市場原理の徹底させるための競争政策が挙げられる。第二に、破たん処理や倒産法制度の整備など、失敗した時にでもやり直しが可能なシステムを作り上げることが大切である。そして、第三に、情報通信産業を国民に浸透させることである。IT技術を各産業に導入することにより、プロアクティブなリストラを行い、企業の効率化を進める。また、国民一人一人へ定着させることができれば、国民全体の生活の質をさらに向上させることができるであろう。

これらの政策は、いずれも経済を強くするものであり、じきに効果をあらわしてくるはずである。よって、数年のうちに日本経済の活力は十分高まると考えられる。

以上のような政策が、日本経済を立て直すためには必要であると説かれた。

春合宿



日時：2001年5月3日～5月5日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、5月3日から5月5日にかけて2泊3日の事前合宿を行った。日本側参加者の初顔合わせとなるこの合宿は、日米学生会議の歴史、社会的意義の説明に始まり、第53回会議のテーマについてのディスカッション、続いて各分科会、サイトごとのミーティング、OBの方をお招きしてのレセプション等を通じて、参加者個々人が53回会議という

ものを具体性をもって捉え、さらに本会議にむけての各々の課題を認識する場であった。特に、各分科会でのディスカッションにおいて、大まかなトピックを考案し各々の論文のテーマを決定していった。これは同じトピックでも抽出されてくるテーマが参加者それぞれに少しずつ異なる中で、一つの流れを見つけまとめあげていくという作業であった。日頃は意識することのない社会の一面に目を向けさせることとなり、本会議でのテーブル・ディスカッションにも大いに期待をもたせるものであった。また、参加者全員が2泊3日の短い期間ではあったが、合宿という共同生活を体験したことの意味は大きく、ゲームも含めた歓談会、懇親会は、数日前までは見知らぬ人同士であった参加者が、自然と打ち解け親睦を深める機会となった。このように、事前合宿は、アカデミックな面、人的交流の面という、会議の主軸である双方の面において、意味深いものであったといえよう。



OB とのレセプションにて



防衛大学校訪問

日時：2001年6月15日

場所：防衛大学校

2001年6月15日、第53回日米学生会議日本側参加者は防衛大学校を訪問し、授業の聴講および防衛大学校生との討論を行った。防衛大学校に到着し、教室において一日のスケジュールの簡単な説明を受けた後、食堂へと案内された。その際に防衛大学校全学生による歓迎という予期せぬ事態を受け、驚きとともに始まった昼食会だったが、防衛大学生との対話や美味しいご飯のおかげでも楽しい時間を過ごすことができた。

昼食後は防衛大学校生による行進を見学し、次に、訪問におけるメインイベントである『防衛学特論研修』および『グループ討論会』へと進んでいった。

『防衛学特論研修』では「統率学」/「戦略学」/「戦史学」/「国防学」という四つの分野が設けられており、それらの中から会議参加者が興味ある分野を選び、事前にグループに分かれた上で講義が行われた。どの講義も各自が普段大学で受けている授業とは一味違うものばかりで、参加者はそれぞれに違った感想を持ちながらも、新たな視点を得たことに充実感を感じていた。

『グループ討論会』では7つのグループに分かれ、各グループとも日米学生会議参加者と防衛大学校の学生がほぼ同じ割合で入る構成となっていた。各グループが自由に討論のテーマを設定し、「憲法9条」/「自衛隊の海外派兵問題」/「日米関係の今後」/「戦争とは、平和とは何か」/「中国と台湾問題」/「ナショナリズムとは」などといった論点に関し、双方から様々な意見が飛び出した。考えや立場の相違から発生する議論のすれ違いや、衝突もところどころで見られたが、止むことのない真剣で白熱した議論の中、各参加者は異なる価値観の共有を楽しんでいたようだ。



防衛大学校の全面的な後援によって訪問は終始スムーズに進行し、成功に終わった。後日、学生会議参加者、防衛大学校生の双方から「非常に充実した一日だった」という感想を多く聞いたことから、この一日が両学生にもたらしたものは大きかったと言えよう。とりわけ学生会議参加者にとっては本会議への準備段階として、大きく有意義なステップを踏むことが出来たのではないだろうか。

防衛大学校にて

事前勉強会

本会議までの準備活動の一環として、日本側の参加者は、事前勉強会を行った。金子勝氏、塩崎恭久氏、川勝平太氏を講師としてお呼びし、第53回日米学生会議の総合テーマである、「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」を切り口に、講演をお願いした。どの勉強会も、本会議において、アメリカ側の学生との議論を深めていくための、非常に有意義な経験となった。

● 金子勝氏勉強会

日時：2001年6月30日

場所：日米会話学院

金子勝氏

【略歴】52年生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。東京大学社会科学研究所助手、茨城大学人文学部助教授、法政大学経済学部教授を経て、現在、慶應義塾大学経済学部教授。専門は財政学、制度の経済学。現実から乖離した経済学の現状を批判し、実証研究に根ざしつつも明確な政策的志向をもった評論を展開している。

【著書】『市場と制度の政治経済学』（東京大学出版会）、『反経済学』『経済の倫理』（新書館）、『反グローバリズム』『市場』（岩波書店）など。



第53回日米学生会議の総合テーマである「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」を考えるにあたり、「反グローバリズム」の著者であり、現在進行しているグローバリゼーションに対してアンチテーゼを唱える金子勝先生をお招きし、勉強会をおこなった。そもそも、グローバリゼーションとは昔から起こっていた現象ではある。しかし現代において、なぜそれが話題になっているのであろうか。それは、人類の従来生活を完全に変えるものであり、また、市場を不安定化せうる可能性を内包するからである。時間と空間を超える力がある金融の分野、そのなかでの日本の対応について焦点をあて、話は進んでいった。70年代以降の世界でおこった金融自由化の流れのなかで日本は、流れに遅れないようひたすらアメリカを追随している。しかし円が基軸通貨でない以上、そうすることは危険なことである。グローバル化が進展する今後の世界を生き残るためには、日本が独自の掌握力を持ち、戦略を描くことがいかに大切であるかお話を伺った。また、昨今の日本が抱えている問題として、不良債権問題についてもふれた。現在の内閣が断行しようとしている不良債権処理が与えるデフレ懸念について言及し、それによって消費が低迷し、日本の不況が長期化する恐れについても話された。



● 塩崎恭久氏勉強会

日時：2001年6月26日

場所：日米会話学院



塩崎恭久氏

【略歴】50年生まれ。東京大学教養学部教養学科アメリカ科卒業。ハーバード大学行政大学院卒業。75年日本銀行入行。経済企画庁長官秘書官、総務庁長官秘書官を経た後、95年に旧愛媛1区より衆議院議員当選。96年には、参議院議員に当選。97年大蔵政務次官、99年自民党法務部会長、参議院法務委員会筆頭理事、2000年自民党外交部会長、衆議院外務委員会理事、2001年より自民党厚生労働部会長代理、参議院法務委員会理事。

この勉強会では、日本政治の抱える大きな問題点として二つ指摘された。一つ目に「コントロール・パワー」がないという点。現体制での国のリーダーがリーダーとして役割が十分に発揮できないという欠点だけではなく、集団的自衛権、教科書問題、靖国神社などの問題から見られるように、総合的に問題に対して判断する人物がないという組織的な問題性を示された。他国のリーダーが命令を下すというシステムに対応しきれていない点などからみても仕組み的な改造の必要性を強調された。二つ目として「シンクタンクの未発達」を挙げられ、今後日本がどのような投資をすべきか、何を重要視するかを提示された。経済においては、不良債権の現状とともに「経済再生10年ビジョン」という現在小泉首相に提案されている塩崎氏私案の日本経済復興のビジョンを説明され、再生への方向性が示された。

自国の政治体制、経済状況、そしてその問題点、改善策について知る事で日本側参加者として自国の状況について語る上で非常に貴重なお話をいただいた。また学生であるわれわれにアクションを起こすことへの大切さを伝えられた。

● 川勝平太氏勉強会

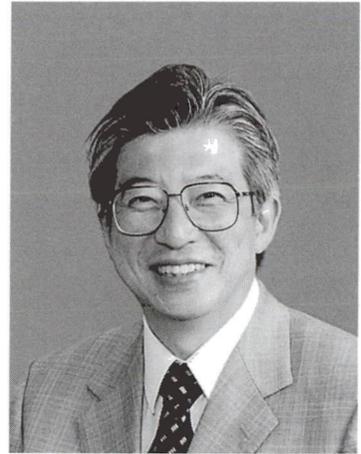
日時：2001年7月14日

場所：日米会話学院

川勝平太氏

【略歴】48年京都生まれ。早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、同大学院修了英国 Oxford Univ.にて博士号取得。早稲田大学政治経済学部を経て、現在国際日本文化研究センター教授。歴史の大きな枠組みについて常識を覆す清新な「海洋史観」を提示し、注目を集める気鋭の経済史家。小淵元首相主宰の「21世紀日本の構想」懇談会の中心メンバーを務める。

【著書】『日本文明と近代西洋』（NHK ブックス）、『富国徳論』（紀伊国屋書店、アジア太平洋特別賞）、『文明の海洋史観』（中央叢書、読売論壇賞）、『文明の海へ』（ダイヤモンド社）など。



グローバリゼーションというテーマのもと、経済や安全保障などとは全く異なった、独特の切り口からお話を伺った。グローバリゼーション、日米の歴史比較などの中でも特に印象的であったのは、川勝氏の日本固有の「美の価値観」に関する見解であった。本来、真・善・美は優劣つけがたい価値であるが、これらはその時々々の歴史において異なる比重が置かれた。そして氏によれば、来る未来こそは美の時代であるとも言える。「美」こそ人類共通の価値になりうる。例えば、グローバリゼーションのグローブ（地球）は水の惑星である。そして日本は、「水際立つ」、「水もしたたる〜」などに見られるように、水と美の結びつきに対して思い入れが強い。にもかかわらず、日本は経済発展のためにそれらを犠牲にしてきたのではないだろうか。力の押しつけ、「力の文明」の時代の終焉へ— 胸のすくようなお話は、それぞれが従来考えていた「グローバル化」に全く新たな視点を与えてくれた。

第3章

本会議報告ーサイト活動の成果

京都サイト

広島サイト

沖縄サイト

東京サイト



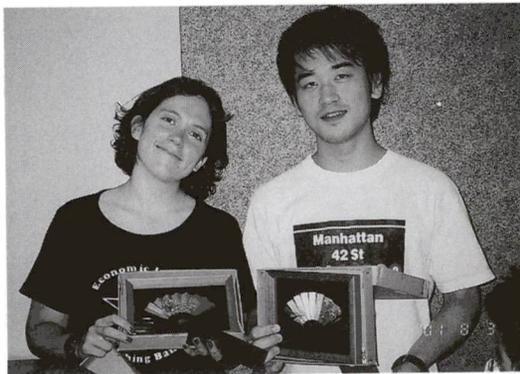
京都サイト

京都サイトコーディネーター：岡本紘明

Jaime Heulse-Barker

● 京都サイトスケジュール（滞在期間：7月26日～8月3日）

- 7月26日 日本側参加者直前合宿
- 7月27日 アメリカ側参加者到着
- 7月28日 ジョイントオリエンテーション
開会式（Opening Ceremony）
- 7月29日 京都フィールドトリップ
スキット上演
- 7月30日 京都ワークショップ
宿坊宿泊（妙心寺大心院、泉湧寺悲田院）
- 7月31日 分科会#1、分科会#2
スペシャルトピックミーティング
- 8月1日 分科会#3、分科会#4
スペシャルトピック#1（食文化）
広島プログラム「平和への誓い」プレセッション
スペシャルトピック#2（映画とアニメ）
- 8月2日 スペシャルトピック#3（教育制度）
分科会#5
- 8月3日 広島へ移動



京都サイトコーディネーターの二人



京都の法然院にて

● サイトスタッフメンバー

秋山洋児、岡本紘明*、喜多洋輔、千代明弘、山口臨太郎（*はサイトコーディネーターを指す）

● 京都サイトの理念

平安建都以来 1200 年余りの歴史を持ち、これまで日本の文化を生み出し、伝統を受け継いできた京都において会議を開催することは意義深い。日米双方の参加者が真摯に議論を行っていく上で不可欠である信頼関係を、文化についての対話を通じて構築することを可能とする土壌が京都にはあるからである。しかし「相互理解と力の獲得」を志向する際には、敏感な現状認識とより深い洞察が求められる。それは、資本主義の拡大と情報化が牽引するグローバル化の潮流の中で、「文化」の意義・あり方を問い直すことであり、すでに日本文化のシンボルとして記号化された京都の安易な再生産に甘んじず、将来への展望を提示し得ない「西欧的価値への収斂」と「伝統的固有文化への回帰」という二項対立を超えた新たな文化の意義・あり方を問うことである。

「文化」の名のもとに人々の心に浸透する不寛容に対していかにアプローチしうるか、京都において文化の本質を再考することでその方策を模索する。

以上をうけて、京都サイトでの活動は以下の理念で企画した。

1) 京都という空間の持つ、グローバルに対するローカルの視点の再考

歴史と現在が刺激し合う京都の独特の文化が世界に発信する価値が、「普遍性対固有性」という二項対立を超えた「固有性の中の普遍性」という新たな思考枠組みの可能性を内包しているということの考察を行う。そして、そこで育まれる人間関係のなかに、緩やかにつながり合った人と人の「開かれた共同体」のモデルを見出すこと。

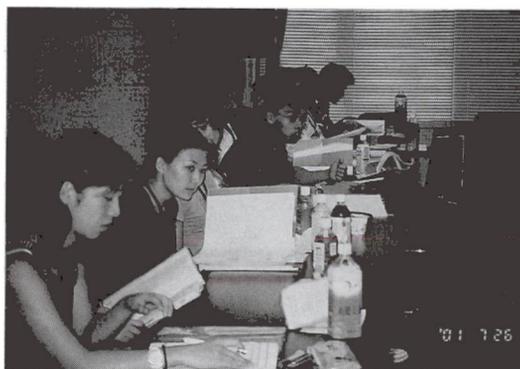
2) 価値の相対化

「これが日本文化である」と言えるような画一的・絶対的な「文化」なるものは存在せず、歴史的にも文化的差異を受け入れ融合し、現在でも異なる価値が現在進行形で編まれているということを感じる。また、絶対的に「美」であると誰からも評価される「芸術」が存在しないことをリアルに感じたい。

● 京都サイトイベント

● 日本側参加者直前合宿（7月26日）

日本側参加者は一足先に立命館大学衣笠キャンパスへ集合し、春合宿以来の顔合わせとなる仲間と再会。皆に配るファイルを作成したあと、会議の日程に関してオリエンテーションを行い、グループに分かれて現在の心境や抱負を話し合った。また日本側参加者一同で演じるスキットの内容を決める話し合いも行われた。



ミーティングをする日本側参加者



● アメリカ側参加者到着（7月27日）

日本側参加者はサイトスタッフ・分科会・スペシャルピックでミーティングを行った。夜、いよいよアメリカ側参加者が到着。アメリカ側は幾分疲れ気味、日本側は緊張気味ながらも、時の経つのを忘れてセミナーハウスの廊下で自己紹介や立ち話に花を咲かせた。

● ジョイント・オリエンテーション(7月28日)

参加者全員の自己紹介をし、それぞれが自分の出身地や趣味にまつわるお土産を交換し合いながら会話を弾ませた。初めての直に向かい合った会話に緊張しながらも、ゲームを通じてだんだんと場が打ち解けていった。



お土産交換を行う参加者たち

● オープニング・セレモニー

第53回日米学生会議開会宣言、会議OB会会長山室勇臣氏、立命館大学の佐々木氏のご挨拶に続き、京都大学助教授（国際政治専攻）中西寛氏の英語によるご講演に耳を傾けた。かつての国際化とは異なるグローバル化の中で日米双方が取りうる道について幅広い洞察がなされた。続いて開かれたレセプションでは、立命館大学関係者やOBの方も交えて交流が行われた。



講演をされる中西寛氏



レセプション会場にて

● 京都フィールドトリップ (7月29日)

事前にとった希望に基づいて銀閣寺周辺、東山、嵐山、金閣寺・竜安寺、奈良の5班に分かれ、アカデミックな雰囲気から離れて観光を楽しんだ。それぞれに、観光ガイドの学生ボランティア(「グッド・サマリタンクラブ」)の方々が説明を行いながら案内をしてくれた。ボランティア学生と会議参加者との間で、共に学生として気兼ねなく交流できたことは、我々にとって京都の歴史・文化を単に「語られる京都の歴史・文化」以上に身近なものに感じることができ、表層的な文化理解以上のものを行うことができた。アメリカ側参加者は、京都の歴史と伝統に感動しつつも、予想以上に近代化された街並みに驚いていた。



銀閣寺を訪れて



ボランティアの方を囲んで



熱演する参加者たち

● スキット上演

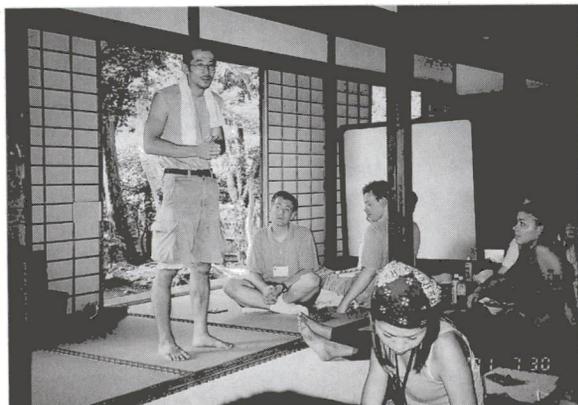
参加者の期待と不安の入り混じる中、練習を重ねてきたスキットが競演され、大いに盛り上がった。アメリカ側は、全米の各都市をめぐるという設定でアメリカ文化を面白おかしく紹介、日本側は、典型的な日本人一家の一日の様々なエピソードを通して日本人気質を表現、それぞれ最後には来場者全員が舞台上でダンスして締めくくられた。スキットで演じた役の印象が会議の後まで強く残った人もいたようだ。



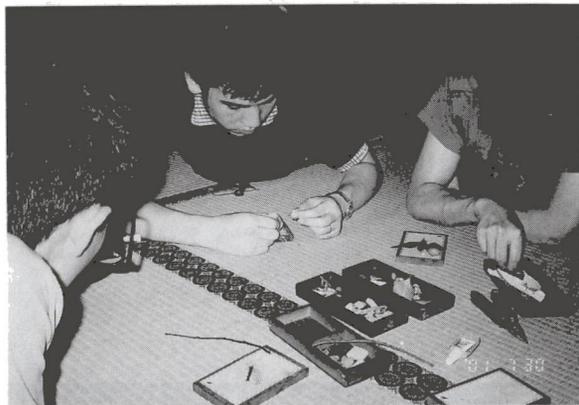
● 京都ワークショップ（7月30日）

グローバル化は、芸術をも含めた文化の均質化、文化の共時化や文化拡散を意味するのか、という問いから出発し、これらの問いに対して、空間的、社会的、歴史的に考え、さらに「文化」の本質という観点から空間や歴史を横断的に考察すること、を目的として対話者同士のインターアクションを重視したワークショップという形式をとった企画を行った。互いに異なった、そして複数のアイデンティティーを持った会議参加者たちが相互に関係し合い弁証法的に展開する文化のダイナミズムを体験することをめざした。コンセプトとしては①歴史と現在が刺激し合う京都という空間の中で、密な人間関係から生み出されるアートに注目することで、グローバルに対するローカルなものの可能性を肌で感じ、②誰もが自らの作品を作ることができ、表現者となれることを体験することで芸術・文化・美を相対化し、③互いに対話し合い、コラボレートする、共働という活動を体験するということであった。

法然院に場所を移し、「共有空間の創造」を掲げる気鋭のアーティスト、小山田徹氏を講師にお迎えし、境内周辺で集めた石ころや落ち葉などを素材にし、ボード上に自由に表現した。輪になって自由に創造し、さらにお互いの作品を認め合う過程で様々なコミュニケーションが生まれ、日常の中にも宝物があちこちに転がっているという小山田さんのメッセージは確実に伝わった。



小山田氏



「烏板」を創る



法然院にて

● 宿坊宿泊（7月30日）

京都市内の妙心寺大心院、泉湧寺悲田院に分かれて、宿坊で宿泊するという、ほとんどの参加者にとって初めての経験をした。日本文化を表象する客体としての寺院ではなく、そこで宿泊することでその文化の衣食住を疑似体験することができた。精進料理から食に対する精神を、そして大広間を襖で区切り同時に庭園を囲い込む構造をとる建築様式の中で寝泊りすることで建築と自然とが「遮断」されずに「透けた」関係を保つ美学を、まさに体験することができた。

サイトコーディネーター後記

「悦びの共有」

京都サイトコーディネーター 岡本紘明

我々の衣食住は多国籍企業の生産する大衆化された商品で哀しいほど満たされている。既に東京も香港もニューヨークもパリもその存在感を失い、資本主義の拡大・情報化・グローバル化による欧米文化への収斂たる文化の均質化がなんとももっともらしく聞こえる。しかしその一方で、諦観的な相対主義から過激な原理主義までを内包しながらも、世界システムの周縁或いは他者が不可視化されたそのシステムの中核において、伝統的価値への回帰としての独自文化・文明復興の動きも見られる。このような環境の中で文化を再考する者は誰でも虚無感を抱かずにはいられない。

こうした今日の状況の下、日米学生会議において、特に会議の開幕地であり以降の議論の土台となる信頼関係を醸成することになる京都において、何をなし得るかをサイトコーディネーターとして自問することとなった。

米国学生を迎え共に最初の一週間を過ごすことになる京都では、すでに記号化された日本文化としての建築物・景観の鑑賞と、その商品化されたお土産の購入という場を提供することに墮することは強く拒否したかった。記号化された文化に全てを矮小化することは、米国学生が抱くような文化的構築物である「他者」としての日本、日本人、日本文化の再生産であり、また、我々日本人としても日本文化なるものの独自の本質を想定することは、こうした文化装置の罠に陥ることになるとともに、画一的日本文化の名の下に異質な他者が不可視化されることにもなる、と感じたからである。

「相互理解と力の獲得」を標榜する会議において、普遍対特殊という矮小化された二項対立を突き抜け、多元的に分裂した中で価値そのものを模索し合い共同で探求するプロセスの共有を目指したいという思いから企画したのが「京都ワークショップ」であった。

京都では歴史と現在が刺激し合い、そこで育まれる密な人間関係から派生する都市とアートの関係の中に、グローバルズムに対して新たな価値を生み出す豊かな土壌がある。その京都において、「これが日本文化である」と言えるような画一的・絶対的な「文化」なるものを拒否し、歴史的にも文化的差異を受け入れ融合し、現在でも異なる価値が現在進行形で編まれているという認識を実感することの意義の大きさ。そしてワークショップという形態を取ることで、絶対的に「美」であると誰からも評価される「芸術」が存在せず、誰でも芸術家になれものを創り出す悦びと各々が紡ぎだす美を共有する活動を体現したいという思いからの、「京都ワークショップ」である。そ



これは、文化や社会が純粋化するのではなくて、絶えず混合的に雑種化することによってダイナミックに変化していくということの体現を目指したものである。そして、ワークショップの中に共時性と通時性の視点を埋め込んでいくことも、アーティストである小山田徹氏と法然院貫主である梶田真章氏とのご協力により実現することができた。

小山田氏は、これまでに様々な社会活動を行ってきた人々の共同ミーティング・プレイスの一つとしてのコミュニティに根ざすカフェを運営されており、今回は「カラス板」というアイデアをいただき、ワークショップに参加いただいた。これは、カラスがごみやガラクタを集め巣を飾るように路傍の宝物を再発見し、拾い集めた物をカラス板という小山田氏がつくった板に張り付けていくものである。路傍に落ちているようなものを眺め、探り、拾い、集め、並べ、飾ることで、日常のありふれた環境の中に新たな価値を見出すことを体現することになった。そして小さな板の上にそれらを表現し、その上に生み出される物語を他者との対話を通じて共有すること。それは誰でも自らの美を身の回りから紡ぎだすことで芸術家になることができ、ものを創り出す喜びによって人々が緩やかに繋がり合うことである。それはまた、あるべき・文化・社会のあり方に通底するものであり、異なる文化を持つ者の相互作用によって、「共時的」に様々な文化が溶け合って新たなものを生み出すダイナミズムの体現であった。また、梶田氏は理想的な寺のあり方「開かれた共同体」としての寺の機能を強調され新しいコミュニティの場として市民の活動・芸術発表の場として法然院を解放されており、法然院の方丈という空間の中でこのワークショップを行えたことは、古代から現代・現在にかけて脈々と営まれてきた多様な文化・価値が織り成す新たな文化創造のダイナミズムを「通時的」に感じることを可能にした。

「何が達成されたのか」と問われれば、「喜びの共有を」と答える。それは、潜在している力の強弱は問わずにその創造的に表現し、そこに喜びを見出しそれを共有することで人と人とが緩やかにつながりあう実感であり、絶対的な目標の達成ではない。今回はアートという言葉を紹介しての喜びの共有であったが、そうした喜びの共有が人と人を結び付け、緩やかで開かれた共同体での営為が新たな価値を生み出しうるという実感を持つことができたことは、思想・心情・価値観・宗教・文化の違いという分断を前にして抱く諦観と敵意を拒絶する「力」を与えてくれるものと信じている。

技術発展の必然的結果としてのグローバル化という受動的態度を拒絶し、既存の枠組にとらわれない個々人の自由な交流と、緩やかで開かれた共同体の形成、そしてそこから新たに織り成される新しい価値創造の機会として、積極的に価値を付与されたグローバル化を真のグローバル化とするならば、電子的情報の発信・受容・拡散と資本主義的価値の隆盛のみに真のグローバル化は還元され得ない。それは、「文化の収斂」と「文化への回帰」の二項対立が将来に対して何ら新たな展望を開かないことから明らかである。個々人が直に向かい合い対話を通じて喜びを共有することで、新たな文化を織物として共に織ることが求められていて、その試みの小さな一歩として今夏の日米学生会議の意義は大きいはずだ。

広島サイト

広島サイトコーディネーター：藤井康次郎

Dustin Garris

● 広島サイトスケジュール（滞在期間：8月1日～8月7日）

- 8月1日 元米空軍機長（太平洋戦争時）カートライト氏エピソード上映（京都にて）
- 8月3日 京都より到着
- 8月4日 スペシャルトピック ナショナリズム **Rahna Reiko Rizzuto** 氏 講演
平和記念資料館見学・平和記念公園碑めぐり
世界平和連帯都市市長会議開会式参加
在日朝鮮人被爆者 朱碩（チュ・ソク）氏 講演会
- 8月5日 岡本三夫教授（日本における平和学創始者）講演会
平岡敬氏（前広島市市長）講演会
世界平和連帯都市市長会議 「市民との対話集会」参加
- 8月6日 平和記念式典参列
厳島神社見学
とうろう流し参加
- 8月7日 沖縄へ出発



● サイトスタッフメンバー

坂江裕美、藤井康次郎*、夫馬賢治、古川敏明、Ng Yook Meng（*はサイトコーディネーターを指す）



● 広島サイトの理念

8月3日から8月7日までの4日間の広島滞在においては、「両国の歴史認識の克服、核兵器、世界平和」といった事項を集中的に取り扱うために「平和への誓い」というタイトルの下に一連のプログラムを企画した。

核兵器の参加を長崎とともに象徴する都市、広島。この地を、非核三原則を掲げる日本からの参加者のみならず、核保有国であるアメリカからの参加者が核兵器のもたらした爪痕に真剣に向かい合い惨劇の意味について考える場としたい。広島においては、参加者一人一人が核兵器、戦争と平和、戦争責任、日米関係、歴史認識などの事項を備えた包括的で密度の濃い内容に関することを、目で見、耳で聞き、議論をしていく。このような取り組みはやさしいことではないが、衝突と歩み寄りを繰り返していくプロセスは、本会議の理念である「相互理解と『力』の獲得」へのチャレンジの過程である。そして、21世紀の平和を担うのは参加者自身であり、このような惨劇を二度と起こしてはならない、という洞察を深めていく過程でもある。

本会議参加者が短い期間であるが、充実した4日間を広島で過ごすことで、参加者が平和への強い思いを胸に刻む。そして一人一人が社会に向けて自らの洞察を共有せんと、これからの生涯、社会に向け継続的に働きかけていく。本会議開催期間を超えてこの4日間が、次世代社会の平和を構築していく礎のひとつとなる。これこそが、第53回日米学生会議が広島にて開催する「平和への誓い」の目指すものである。

「平和への誓い」理念は以下の4点に集約される。

- 1) 原爆の災害について受け止め、真剣に向かい合う。
- 2) 日米両国の歴史認識の違いを克服する。
- 3) 日米の過去の問題という枠組みを超え、人類共通の課題として未来の平和、核問題につき、日米がそして個人として何ができるかを検討する。
- 4) 世代の平和構築の責任ある主体としての自覚を形成する。

● 原子爆弾の残した惨禍—日本人・在日朝鮮人・米国人の視点から

● カートライト氏ビデオ上映（8月1日 京都にて）

太平洋戦争中米軍の機長であったカートライト氏は撃墜され山口県伊陸に不時着した。そして、広島に連行された6名の乗組員は原子爆弾によってもたらされた惨禍で亡くなった。そのカートライト氏が戦後55年たった1999年広島と撃墜の地である山口県伊陸を訪れた。そこで、カートライト氏は1945年広島でなくなった友人たちを弔い、撃墜の地では地元の方々の暖かい歓迎を受けた。

カートライト氏再訪のきっかけのひとつは、山口県在住の村中氏が撃墜された航空機の破片を平和への願いとして、アメリカのカートライト氏に送ったことであった。

カートライト氏再訪のエピソードは、われわれに原爆の被害がアメリカ人にも及んでいたことを教え、太平洋戦争を乗り越えた日米の和解のモデルを提示してくれる。

そこで、第53回日米学生会議は広島で「平和への誓い」を開催するにあたり、カートライト氏、村中氏の両氏からメッセージをいただいた。

● 村中氏より寄せられたメッセージ

第53回日米学生会議に、ご参加の皆さんようこそ広島にいらっしゃいました。私は、皆さんと同じ歳頃、山口師範学校に在学中、徴兵検査を受け応召となり、大竹海兵団に入団して、猛訓練を受けて一等水兵となって、戦艦伊勢に乗艦辞令が張り出された時のことでした。

1945年7月28日、呉湾に海戦で傷ついて集まっていた連合艦隊を狙ってたくさんの米軍爆撃機が攻撃してきました。海面の向こうなので双方の音は、もの凄いものでした。その中の1機が大竹上空を、高い高度で筋を引いて群れを離れました。

終戦の後卒業、戦死を覚悟したこともありましたが、志望どおりの教壇に立つことが出来て、定年を迎えることができたのです。

機長が、生存しておられることをしり、私の拾っていた機体の一部の破片を彼に送りました。偶然にも鳩に似ていて、帰ってきた平和の鳩と呼んで、そのお礼の便りや、機長の苦難50年回顧録を日本人唯一頂戴しました。

この回顧録によって、向こうとこちらの真実がわかり、信頼関係によって結ばれたのです。わだかまりや仇討ちの連続を断ち切って平和を望むのなら、過去をお互いに言わないことです。忠臣蔵を美化せず、恩讐の彼方を賞賛することが、これからの姿にならなければなりません。

1999年カートライト元機長は、家族と伴い、部下の慰霊と墜落の地に建った平和の碑に花束を捧げ、機体の破片を返してくれたお礼ののべるために、訪日されました。私は落下各地をご案内いたしました。

21世紀に生きる学生諸君が再び、戦場に向かうことのないことをねがいつつ、この平和は多くの犠牲者に拠ってもたらされたことを、永く忘れないでください。

第53回日米学生会議が、実り多い会議となりますことを祈念いたします。

2001年8月6日 村中啓一



✿ カートライト氏より寄せられたメッセージ

Greetings to Participants of the Japan-America Student Conference:

Your motto for this meeting, "An Oath To Peace", is very fitting and I am pleased to be invited to address you. Based on my recent experiences in Hiroshima and Ikachi and 40 years as a professor with students from many countries my observations may be of interest to you. I have traveled to many countries and learned to appreciate different geographical areas and different cultures and traditions which are unique to each country and should be respected.

The first time that I came to Hiroshima I was blindfolded and hands tied and I left blindfolded and hands tied as a POW. The next time that I came here I went to the Peace Memorial Park but had no friends and was dismayed by the displays in the Museum and left quite unsettled. The third time, in 1999, I had made friends through correspondence with Mr. Muranaka and Mr. Mori and was welcomed. I am one of relatively few Americans who lost dear friends in the atomic bombing of Hiroshima so that I can relate more closely with the feelings of you Japanese who lost family and friends here. Thus, once given the chance, bonds of friendship came easily and were genuine with the Japanese men and women that I met here.

Coming to Hiroshima and Ikachi, seeing where my B-24 Bomber was shot down, where we parachuted and were captured, where we were imprisoned, and where my comrades who were all close friends were killed by the atomic bomb was very moving, a mixture of reliving a traumatic experience and finding some degree of closure after 54 years by paying homage to my comrades at a most appropriate place. The most touching experience was visiting two monuments; one at the sight where my comrades were imprisoned when the atomic bomb was dropped and a second at the place where our plane crashed. These monuments were placed by Japanese friends on their own initiative. What could be a more peaceful gesture?

To extend "An Oath To Peace", we must in our day think of peace in global terms. Nevertheless, our two great nations must take the initiative and lead the way by example. We must be willing to help others, but perhaps even harder than helping is to be willing to accept help. Therefore, if we are the helping hand we must be humble. The most compelling place to start, in my opinion, was impressed upon me on my visit to Hiroshima. That is the abolishment of nuclear weapons. What a signal this would be to the world if this message, which is well founded in Hiroshima, was endorsed by the United States and our countries jointly took the lead in this peace initiative.

My "peace" trip to Hiroshima was a small effort; be assured that your JASC "An Oath To Peace" can have a positive impact. Best wishes for a successful conference.

Thomas C. Cartwright, Professor Emeritus, Texas A&M University

■ 平和記念資料館見学・平和記念公園碑めぐり（8月4日）

平和記念資料館においては、まず原子爆弾投下前の日米関係、日本の社会状況を学んだ後、原爆の惨劇を生々しく伝える展示品（黒い雨の痕・ガラスの刺さった壁・人の影が映った階段・原爆投下時の洋服・髪の毛・ケロイド・日用品・写真等）を自分たちの目で確認した。日米の参加者の中には長い時間をかけ資料館を見学するものも多かった。そしてかつてその惨劇の中心地であった平和記念公園の碑めぐりを高校生ボランティアの協力を得て行い、ヒロシマの悲劇を感じるとともに市民の間の自発的な平和運動の一端を垣間見た。



平和記念公園
ボランティアの方を囲んで

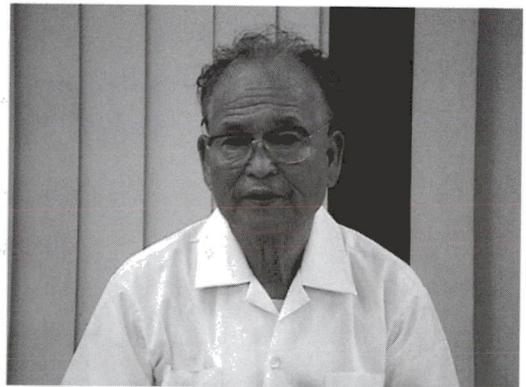
■ 在日朝鮮人被爆者 朱碩氏講演（8月4日）

広島は多くの在日朝鮮人が強制労働を強いられ、被爆し、原爆投下後の惨劇の中でも民族差別を理由に医療が受けられず、戦後補償も十分になされていないという意味で、日本のアジア侵略に対する責任を問う場でもある。国際的に通用するような平和論を構築していくためには、原爆の被害者であると同時に侵略の加害者である日本という複雑な構図を持って私たちの平和論を鍛える必要がある。そして朱氏の講演は、広島に象徴的に現れた民族問題は過去のものであるだけでなく、現在世界に散在する民族紛争の原因として民族差別、偏見がある事をわれわれに認識させた。氏の講演は我々の世代へ投げかけられた課題でもある。

◆ 朱碩氏（チュ・ソク）

1926年朝鮮で生まれる。1943年安国民学校高等学科を卒業して、修道学校（広島市、旧制中学校）上郡高校（兵庫）朝鮮大学（東京）師範大学班（通信）を卒業。広島県朝鮮人被爆者協議会事務局長になったこともあり「ヒロシマを語る会」会員で証言を続けている。1948年～1993年まで民族学校の教職にあって10年間に3校の初級学校長歴任。来ヒロシマ修学旅行生への「ヒロシマ」語りを数多くしてきている。著書に「被爆朝鮮人教師の戦後誌」など。

講演を行う朱碩氏





● 世界平和連帯都市市長会議「市民との対話集会」(8月5日)

「核廃絶」「飢餓・貧困」の議題に分かれ、世界中から集まった市長、そして平和への強い理念を持った広島市民、世界各国の市民の方々と意見交換を行った。核廃絶を扱った分科会において、被爆者の女性が自らの被爆体験を「二度と思い出したくない記憶」であるにも関わらず、平和への強い想いから使命感を感じて語ってくださった。短い時間ではあったが、その講演は参加者に大きな衝撃を与え、消えることのない印象を残した。

● 次世代の平和構築－歴史認識・平和教育・反核と行政

● ST ナショナリズム (8月4日)

日米のナショナリズム、ペイトリオリズム、歴史認識を問題意識に執筆活動を続けており、2000年度 American Book Award を受賞された、Rahna Reiko Rizzuto 氏に講演していただいた。アメリカナショナリズム、日本ナショナリズムのどちらにも一体感を感じることはできなかった日系アメリカ人に焦点を合わせた作品を描いていくことに意義を感じているというお話をされる中で、氏はナショナリズムという壮大で時に暴力的な物語に飲み込まれることのない個人の生き方の重要性を示唆された。その後、歴史認識、教育、人種差別問題等、自由に意見の交換を行った。



講演される Rizzuto 氏

◆ Ms. Rahna Reiko Rizzuto

Rahna Reiko Rizzuto's first novel, Why She Left Us, won an American Book Award in 2000. It also received a Gustavus Myres Outstanding Book Award Honorable Mention, and was named one of the Best Books of 1999 by the Honolulu Advertiser. She was awarded a US/Japan Creative Artist Fellowship in 2001 for her second and third novels.



ディスカッションを行う参加者

日米で学び、伝えるヒロシマ

学生、平和への道探る

63人が「ナショナルリズム」討議



日米両国作家リストさんの話を聞く
「日米学生会議」の参加者たち

日米両国の学生が日本を縦断しながら相互理解を深める「日米学生会議」(財団法人国際教育振興会主催)が四日、広島市中区のホテルに会場を移した。六日の平和記念式典への参列を含めて三日間、被爆地で平和構築の道筋を探る。初日はまず、広島に滞在する日米両国作家リストさんの母を講師に迎え、日米学生会議について討議。リストさんは、本人の母の強制収容所体験など戦争をめぐる家族史を語り、「ヒロシマを

繰り返すな、真珠湾を忘れるな」といった非難の応酬をよめ、日米とも自ら「罪に向き合うのが先決」と述べた。米国の学生からは「私が生まれる前の戦争責任をどう考えるべきか」という疑問も投げかけられた。被爆地の惨状を「目撃した」と語り、率直な声が出た。

その後、原爆資料館の見学や世界平和連帯都市市長会議の傍聴もした。一行六十三人は七日から沖繩を回って東京に戻り、約一カ月間の成果をまとめる。

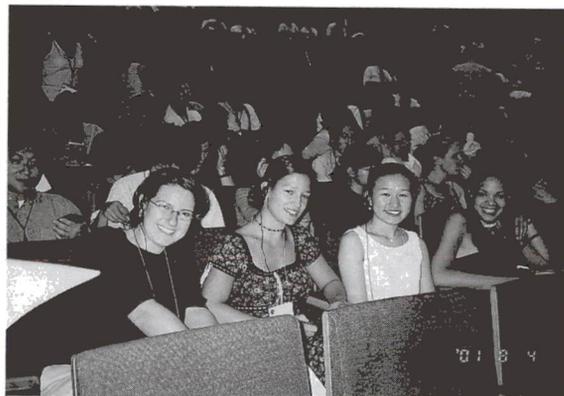
中国新聞 2001年8月5日付

世界平和連帯都市市長会議開会式(8月4日)

世界平和連帯都市市長会議は広島市、長崎市が中心となり、平和という理念の下、世界各国の地方政府の長が集まり、活動をする会議であり、国連認定のNGOである。この会議の開会式に参加することで、参加者は国際社会の多様な連帯、アクターの活躍の可能性を肌で感じる事ができた。



世界平和連帯都市市長会議開会式の様子



会場での参加者



■ 岡本三夫教授講演（8月5日）

「ヒロシマを日米の過去の問題としてだけで捉えるのではなく、人類共通の課題として捉え、世界平和に向けて国家が、そして個人がどのような役割を果たせるのか」「次世代の平和構築の責任ある主体としての自覚を形成する」という課題に取り組むため、日本における平和学の創始者であり、現在、広島修道大学教授であられる岡本教授に核兵器の違法性、歴史認識を中心とした講演をいただいた。教授は、世界の人々は原子爆弾が大きな爆弾であることは知っているが、しばしば、その「負の力」の全貌を知らないことを指摘し、今後核廃絶へ向け、核兵器の惨禍の全貌を明らかにし、核兵器の違法性を訴えかけていくことの必要性をお話された。

◆ 岡本三夫教授

ハーバード大学ロースクール人権研究所（米国）、欧州平和大学院（オーストリア）、ザルツブルク大学政治学部客員教（オーストリア）などで研究員や客員教授を務められる。

主な著書に「平和学—その軌跡と展開」法律文化社、
「Peace Studies in the Nuclear Age（核時代の平和学）」
広島修道大学総合研究所、「平和学を創る—構想・歴史・課題」広島平和文化センターなど。



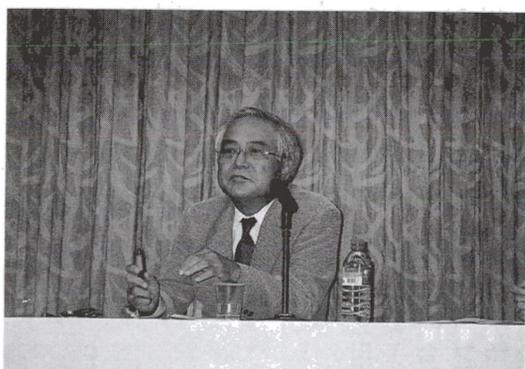
講演される岡本三夫教授

講演に耳を傾ける参加者たち



■ 平岡敬氏講演（8月5日）

岡本教授に引き続き、上記の課題に取り組むため、前広島市長として、そして国際司法裁判所、世界各国で核兵器廃絶、世界平和への想いを貫いてこられた平岡敬氏に講演をしていただいた。平岡氏自身の反核、平和への強い想い、そして現実の政治の場で市長としてその想いを貫くことの困難さが伝わってきた。氏の理念は「アジアとの和解」「核の惨状を世界に訴えていく」という2つの柱から成っている。そして氏は市長を引退なさった今なお、その理念をもとに民間で活発な活動をなさっている。このような内容を含む氏の講演は一人一人が核廃絶、平和構築を進めていく上で多様な貢献の仕方があることを参加者に認識させた。また、氏はアメリカの核の傘の下にいる日本が核廃絶を世界に向けて訴えかけていくことの矛盾についても指摘され、参加者が今後の日米関係を考えていく上での重要な問題提起もなされた。



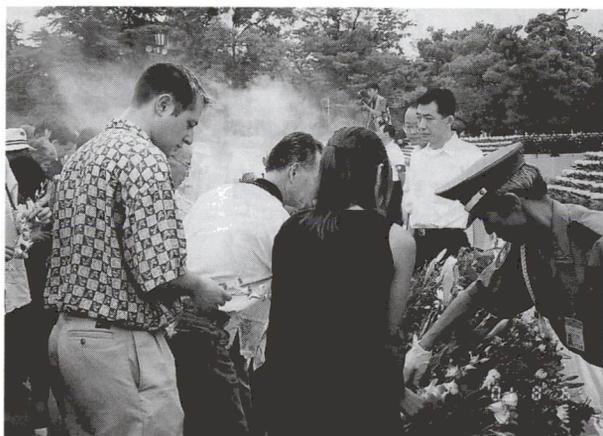
講演される平岡氏

◆ 平岡敬氏

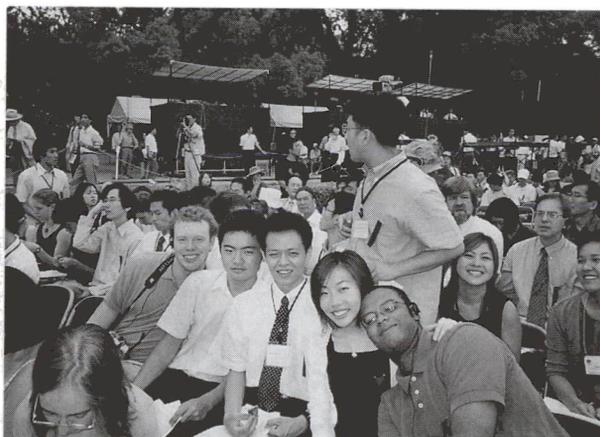
1952年早稲田大学第一文学部を卒業後、中国新聞社入社。1975年取締役編集局長に就任。1982年に中国放送代表取締役専務、1986年に同代表取締役社長に就任。1982年から広島市教育委員、1988年から広島商工会議所副会頭などを務める。1991年広島市長に当選。2期努める。現在、中国・地域づくり交流会会長、ヒロシマ・セミバラチンスク・プロジェクト名誉会長などを務める。著書に「偏見と差別」未来社、「無援の海峡」影書房「希望のヒロシマ」岩波書店、ほか多数。

● ヒロシマを振り返って

■ 平和記念式典参列・とうろう流し（8月6日）



花を手向ける参加者たち



平和記念式典に参列して

広島サイトの総括として平和記念式典、とうろう流しに参加した。21世紀を担う世代として「ヒロシマ」を体感し、個々が広島滞在を通して感じた事を静かに振り返った。平和記念式典直後の新聞社のインタビューにある米国側学生が以下の意見を述べた。

「広島に来るまでは、奴隷制のようなアメリカの重大な史的事実よりも重要なものはないと感じていた。しかし、日米学生会議の広島での活動を終えようとしている今、1945年8月6日に広島で起きたことも自分にとって等しく重大なことであった。原爆投下を行ったのは自分の世代ではない。しかし、祖国がこのような惨劇を起こしたことを悔しく思うと共に、全て破壊された広島がわずか56年の間にこれほどまでに繁栄している事に広島市民の力と希望を感じた。自分が広島を訪れ、感じ取ったこと全てをできるだけ多くの人に伝えていく決心である。」

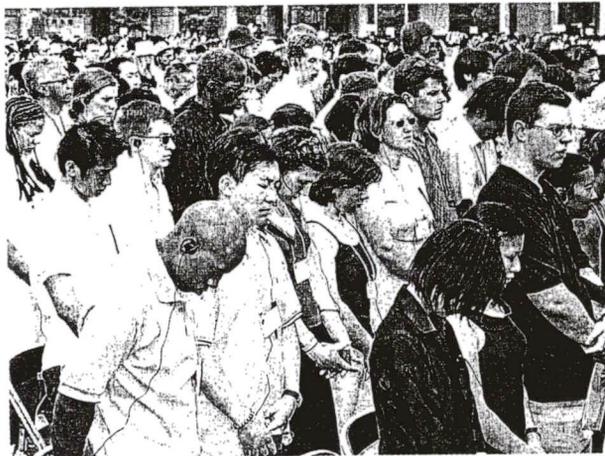


第53回日米学生会議は、原爆が投下された8月6日前後の広島に身を置きながら、「平和への誓い」というタイトルの下、日米両国の歴史認識克服、核兵器、世界平和、人権といった事項を全ての感覚を使って集中的に学び、議論を行った。こうした議論を通じて異なる思想や、歴史認識をもつ参加者間で衝突があった。また、講師のお話を伺い、原爆の惨禍をかつてないほどに肉薄して感じるなかで個々の内部でさまざまな葛藤が生じた。こうした過程の中で、参加者一人一人は相互理解を一步進め、それぞれが今後平和構築を進めていく上で必要となる「力」の原石を獲得したのではないか。

「日米学生会議」に参加し、世界平和と連帯都市市長会議の対話集会などに出席した米国人学生、ブライアン・カスカートさん(22) 市長会議などの場で、被爆者が語る怒りや苦悩に、平和の大切さを実感しました。今後はこのような場へ、日本がかつて侵略したアジア各国の市長や、従軍慰安婦のような戦争被害者を招いてはどうでしょう。そうすれば、お互いが歴史の教訓を分かち合う土壌もでき、広島が今後も平和都市として国際社会にアピールし続けることになると思います。

朝日新聞 2001年8月7日付 「外国人の声」抜粋

核なき世界 若者連帯



平和記念式典に参列し、黙とうする日米学生会議のメンバー

「悲劇もつと知ろう」

米、ドイツ、インド、パキスタン。二十一世紀の平和を担う若者たちが、世界各国から、新たな世紀に一步をすすめる平和記念式典に集まった。
「子どもたちの力強い平和宣言に、人類の将来への希望を感じた」。ハワード大一年のパートナー・マレーさん(20)は、日米学生会議(国際教育振興会主催)の米側メンバーとして来日。日米両国の仲間計六十三人とともに式典に臨んだ。
原爆の惨状に触れ、投下したのは自分の世代と違わないが、責任は実感できないが、祖国の過去の行為を恥ずかしく思っていると打ち明ける。

中国新聞 2001年8月7日付



講演会の合間を縫って昼食を食べる参加者たち



厳島神社を訪れて

参加者ノート

Before heading to Hiroshima, I had already studied a bit about the results of the dropping of the atomic bomb in Ian Buruma's Wages of Guilt. He basically criticizes Hiroshima for turning it into what he views as a simple "peace movement," which is not critical of Japan's past or for that matter, America's. To Buruma, "Hiroshima" – as it is written in katakana – symbolizes only a movement to fight for "peace," without analyzing the causes of war. He correctly sees the Hiroshima movement as based on a monopolization of victimhood during the war, such that the Korean hibakusha, a great portion forced to do heavy factory work in Japan during the war, have had to fight for fifty years to have a memorial in the Hiroshima Peace Park recognizing their pain. JASC listened to the mayor at the time this new memorial was being planned. The mayor, who finally got the memorial in the park, explained the complex politics behind the move, all the more showing the point that Hiroshima has helped many Japanese neglect atrocities committed by the Japanese military in Asia while focusing on the atomic bomb tragedy.

Though I had been in Hiroshima a year before, because this visit was in August, I felt more prepared to witness what Japanese civilians had suffered at the hands of the U.S. government. Though I found evidence to support Buruma's point of view, I became more aware of the horrors of the atomic bomb. One especially shocking exhibit in the Peace Museum were the fingernails of a boy dying of thirst from the heat of the bomb that he sucked his fingers for water. I remember a point made by John Dower about American's needing to see a schoolgirl's decimated lunchbox – that despite the politics surrounding the memory of the bomb and the war, some images like this are beyond intellectual comprehension.

Attending the Hiroshima's World Mayor conference (with the notable absence of any Chinese, Korean or other East Asian mayors) and the 45 minute ceremony the morning of August 6th may have provided me with a more balanced picture of Japan's view of Hiroshima, but I still felt that Buruma's point had merit. A major mission of Hiroshima was to abolish nuclear weapons worldwide. Debates about Japan being protected by the U.S. nuclear umbrella aside, in order to attempt to accomplish this goal, Hiroshima proclaimed itself to be an



“international city” for the 21st century. This message seemed to be to invite people from around the world to listen to Hiroshima’s message, and exporting that message around the world through other forms and programs. But here I find the same problem. If Hiroshima truly desires to reduce or eliminate nuclear weapons, those involved in the movement obviously must work together to achieve this goal. But obviously while many people have this goal, they also have other interests, which must be attended to. After all, cooperation requires listening as well. In order to make any significant progress, especially in East and South Asia, Japanese people from Hiroshima must listen and accept the stories of, for example, Korean “comfort women” and Nanking Massacre survivors. Leaders of the Hiroshima movement must recognize the obvious fact that nuclear problems are tied into the larger consequences of war, which by no means is Japan the only victim. Perhaps hibakusha of Japanese and Korean descent could stand side-by-side with Nanking Massacre survivors and former comfort women to show audiences the consequences of war on all fronts. This makes a far stronger statement about the realities of the “collateral damage” we hear about today, especially in Afghanistan, though not neglecting other parts of the world. Together with a realistic debate of the causes of war, a presentation like this may prevent further needless deaths in the future, which is what victims on all sides want the most in the first place.

(Brian Cathcart • Tufts University)

広島名物お好み焼きに舌鼓を打って



広島ของ暑さに負けず



参加者ノート

平和記念式典に参列した8月6日の夕方、花束と線香の煙に包まれた平和記念碑の前に立ち、広島に滞在した数日間を感慨深く振り返りながら、深い安堵感と共に10円玉と10セントコインを賽銭箱へ投げ入れた。約半世紀前は敵対していた日米のコインを慰霊碑に投じることで、平和を願ったというよりは、日本と米国で育った私が抱えていたアイデンティティに関する葛藤に一応の終止符を打ち、自分の中での「平和」を手に入れた気持ちだった。

中学生の頃に修学旅行で初めて広島を訪れ、在日朝鮮人の牧師さんからお話を伺い、強い衝撃を受けた。軍需産業の盛んであった広島に強制連行されていた多くの在日朝鮮人が国籍を理由に被爆後の応急処置を受けられ

なかったこと、また現在もなお日本の中で彼らに対する人種差別が目に見える形でも見えない形でも存在することを知った。更に広島で日本軍の捕虜として拘留されていた米兵が原爆後に市民の手で殺されたことを知り、当時の日本の市民は原子爆弾の被害者であったと同時に人種差別の加害者でもあったということを知った。

その後米国で高校時代を過ごし、世界史で原爆投下に関する議論を行う機会があった。周囲の高校では原爆投下の映像を教室で流すと歓声を挙げた生徒もいたと聞き、不安も大きかった。議論が始まると中学時代に聞いた日本人被爆者の話、在日朝鮮人の話、米兵の話在必死で説明した。そして原爆の議論が示唆するものは必ずしも日本市民が受けた被害や歴史認識の相違だけでなく、米国同様、日本社会にも根深く存在する人種差別でもあることを述べた。結局原爆の是非や日本の戦争責任という議論になることも、議論の中で私が攻撃の対象となることもなかった。確かに在日朝鮮人の方のお話を米国の学生と共有できたことは喜ばしいことであったと今でも信じている。しかし自分の中に何か違和感が残った。周囲に日本人がいない中で、太平洋戦争について議論したところで日本に対する非難が自分へ向くことは一目瞭然であった。そこで私はヒロシマの議論を行う上で被害者としての立場だけを主張するのではなく、加害者としての立場も認め、更に議論を「原子爆弾」や「戦争責任」ではなく「人種差別」に逸らすことで非難を和らげようとした。自分を守るために牧師さんの話しを利用してしまったという罪悪感が、今回広島を訪れるまでずっと残っていた。

それではなぜ自分を守ろうとしたのか。日本社会に完全に同化することはできないと感じていた私は、当時は米国社会に同化しようと必死だった。同化しようとする中で少数民族であること、英語能力でも劣ることから、周囲に対して自分が黄色人種であることに悔しさを覚えるほどの強い劣等感があった。そして当時、同化をするためにはまず自分の存在を周囲に認めてもらう必要があると感じた。更に自分の存在を認めてもらうには全ての面（当時は学業、運動面と考えていた）において周囲と「同等」ではなく「勝つ」ことが必要だと考えていた。そして周囲にある程度認められたと感じた時、自分のアイデンティティは国家に属するものではないということに気が付き、劣等感と、米国社会に同化しなければならないという切迫感から解放された。しかし、広島のことを考えると、日本で大学に通うようになってからも高校当時の感情が生々しく蘇った。在日朝鮮人の方への罪悪感とその罪悪感の一因となった米国での葛藤から、私の広島への思い入れは強かった。自分の高校時代の行動に対する自責の念や過去の劣等感と向き合うことは、忘れ去りたい過去を敢えて思い出すものようなものだった。しかし、その過去の想いを直視しないことには、それが今後も自分に残り続け、更なる強さを得る機会を台無しにしてしまうと直感した。今回の会議で広島を訪れることにより「何か」得られるのではないかという期待が大きかった。

本会議で広島へ行くと知った時、在日朝鮮人の視点を加えて欲しいと強く感じた。その理由は、日本の市民は原子爆弾の被害者であっただけではないということを知り、再認識する必要があると考えたからである。そして在日朝鮮人に関する問題が示唆するものは日本、米国社会に留まらず世界中のあらゆる地域に深く根を下ろしている人種差別問題であるということを知り、議論することは重要であると考えたからである。よくある反戦、反核の議論を本からの知識で行うのではなく、より身近な問題を議題にすることで一人一人が平和への認識をよりわが身にひきつけて捉えられるのではないかと期待したからであった。この議論をする中で、自分が劣等感を感じながら自分を守るために人の話を利用するのではなく、米国側の参加者と対等な立場であることを認識した上で議論をしたいと願っていた。

広島でナショナリズム、アイデンティティ、人種差別の議論をしていた時に自分の高校時代の経験を伝える機



会があった。特に米国の学生にこの話をしたのは初めてだった。自分の中では既に片付いた問題であると感じていたから話したのであるが、決して片付いていなかったことに気が付いた。話し始めてみると涙が止まらなかったのである。しかし、そこには、私の話しに耳を傾けてくれる人たちがおり、更に米国側の学生に私と非常に似た思いを抱いていた人がいたため、互いにわかりあえたという安心感を得ることができた。そして同じような思いをした人が他にもいたことを知った時、人種差別問題をより深刻なものとして再認識した。また在日朝鮮人被害者、朱碩氏の講演会では通訳者の1人となることで朱氏の話を自己防衛のための隠れ蓑として利用せずに、ストレートに米国側の学生にも伝えることが出来たという喜びがあった。

朱氏の講演が終了した後もまた涙を止めることがなかなかできなかった。高校では自己防衛のために人の話を利用してしまい、その後も利用してしまった事実をなんとか忘れ去ろうとして人種差別に対する自分の弱い部分を直視することがなかった。自分の傷を直視せずにいた自責の念が溢れ出てきてしまったのだろう。今回の会議で自分の傷と正面から向き合うことで初めて自分を許容できたのではないかと感じている。そして8月6日に心に染み込むような安堵感を得ることができた。また、広島でこのような経験をする中で自分の深い部分から感じたのは、表面上の平和ではなく、問題の本質を問い、その本質的問題を見据えた上で平和を志向することの重要性である。この夏、自分を克服すると同時に、こうした新しい認識を育み、自分の考え方、行動の基盤となる部分に根付かせることができたのだと信じている。

(坂江裕美・慶応義塾大学)

サイトコーディネーター後記

「理想的対話状況」の構築を目指して

広島サイトコーディネーター 藤井康次郎

日米学生会議とは討議、コミュニケーションの場である。日米双方の参加者間での自由な討議、コミュニケーションを通じて何か価値の有るものを生み出していくことを志向する場、それこそが日米学生会議である。このような目標を達成していくためには、討議とコミュニケーションが最大限に機能する環境、すなわち「理想的対話状況」を作り上げることが重要な前提となる。理想的対話状況を構成する重要な要素をいくつか例示してみよう。まず挙げられるのが、参加者の意識が、それぞれのバックグラウンドや価値観に閉じこもらず、積極的に異質な価値観、アイデアに対しても開かれていることである。また、参加者が対話、討議に参加する高い意欲を持つことや、参加者間で自由な発話を抑圧するヒエラルキーが存在せず、参加者が皆対等であることなども主要な構成要素となるであろう。

私が広島サイトの企画、運営の責任者として第一に心掛けたのは、「理想的対話状況」に少しでも近い環境を広島において作り上げることであった。原子爆弾によりもたらされた惨劇の意味はきわめて重く、混沌としている。その圧倒的な悲惨は、それを知的に理解しようとする試みを退け、一人一人に対し、語ることよりも沈黙すること

を強く促すかのようでもある。しかし、日米学生会議が先に述べたように、コミュニケーションの場であるならば、われわれはヒロシマにおいて何かを語り、そして語られなければならない。8月の初旬に広島において、原爆投下をめぐる当事国である日米の学生が、原爆の悲惨に向かい合い、何かを語る。それによりもたらされる成果は、どれだけ自由な討議に適した環境を作り上げることができるかにかかっている。討議の対象が、複雑で、困難なものであるほど、機能的なコミュニケーションが行われる環境が要請される。

討議の意義は、そこから何か建設的なものを生み出していくことや、参加者が討議を通じ成長していくことにある。機能的なコミュニケーションを実現し、こうした意義を達成していく上で最も重要だと思われるのが、参加者の意識が、それぞれのバックグラウンドや価値観に閉じこもらず、積極的に異質な価値観、アイデアに対しても開かれていることであろう。そのような環境を形成していく上で大きな障壁となるであろうと予想されたのが、日本側参加者が持つであろう被害者意識であり、アメリカ側参加者が感じるであろう加害者意識である。未来における平和や核問題といったことを建設的に議論していく上で、被害者と加害者という対立軸に参加者がとらわれてしまうのならば、妥協不可能な原爆投下の是非といったところに問題の焦点があてられかねない。また、参加者の立場がその所属する国家に固定化されてしまうことで、互いに多様な価値観や意見を発揮し合い、吸収し合う機会が減ってしまうであろう。

このような対立軸を緩和させるひとつの方策がナショナリズムを相対化することである。原爆が投下されたのは半世紀以上も前のことであり、参加者の誰一人としてそのことに関して責任はないはずである。それにもかかわらず、強い被害者、加害者意識をもつとするならば、それは自らを所属する国家（被害国、加害国）と同視しているからに他ならない。このような国家との一体感、すなわちナショナリズム、ペイトリオリズムを相対化することにより、被害者、加害者意識からの脱却を図ることができる。次に、原爆投下をめぐる被害者が日本だけではなく、加害者がアメリカだけではないという事実を認識することも重要である。原爆投下の当時、広島には多くの朝鮮人が強制労働のため拘束されており、また捕虜となったアメリカ兵も存在した。こうした人々も等しく原爆の被害者であり、また、原爆によりなくなった朝鮮の方々から見れば日本も等しく加害者であるはずである。こうした認識は、ヒロシマをめぐる問題を安易にアメリカ対日本の対立軸に還元しようとする知的退廃を抑制するはずである。さらには、太平洋戦争とヒロシマという悲劇を実際に乗り越え、和解に至ったモデルを参加者が目撃することも、日本とアメリカという対立軸の緩和を図る上で有用であろう。以上のようなコンセプトをもって企画されたイベントが、部下を原爆で無くした元米軍機長カートライト氏のエピソードに関する企画、在日朝鮮人被爆者である朱碩氏の講演会、そして、ナショナリズムの暴力性とそれに翻弄されながらも強く生きる個の生き方をモチーフに執筆活動を展開する小説家 *Rahna Reiko Rizzuto* 氏の講演会である。

また、実際に政治の世界で反核、平和への理念を力強く貫いてこられた前広島市長の平岡敬氏や、日本における平和学の創始者である岡本三夫教授などの方々に、さまざまな立場や視点からヒロシマについて語ってもらうことで、参加者の問題意識が喚起され、多様な意見や考えに開かれた意識を形成していくことができたのではないかと。そして何よりもこれらの方々の方々の平和への強い想いは、参加者の平和構築へ向けた自覚を形成する上で欠かすことはできなかったと感じている。

参加者がコミュニケーションに参加する高い意欲を持つことも、充実した討議の条件である。今年の会議に参加したときに自分が感じたのは、アメリカ側学生の中に人種問題について強い問題意識を持っているものが多くいたということである。そのような問題意識に答え、コミュニケーションへの参加の意欲を高めるうえでも、ヒロシマ

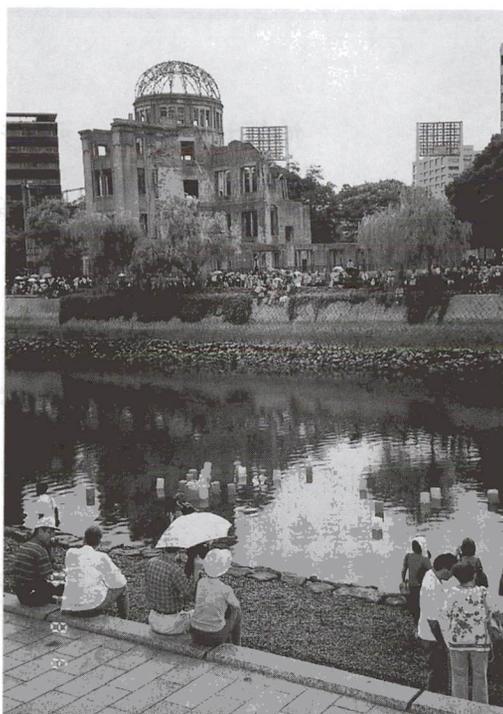


をめぐる人種問題について、参加者が考えていくことは大変意義深いといえる。そして、少なからぬ国において国内の人種差別が構造的暴力という形で平和を脅かし、各地で民族紛争が頻発する世界の現状を踏まえるならば、今後の平和構築を考える上でも、民族問題につき考えていくことは欠かすことができない。その意味でも平岡氏や Rizutto 氏、朱碩氏の講演会を開催することの意義は大きかった。

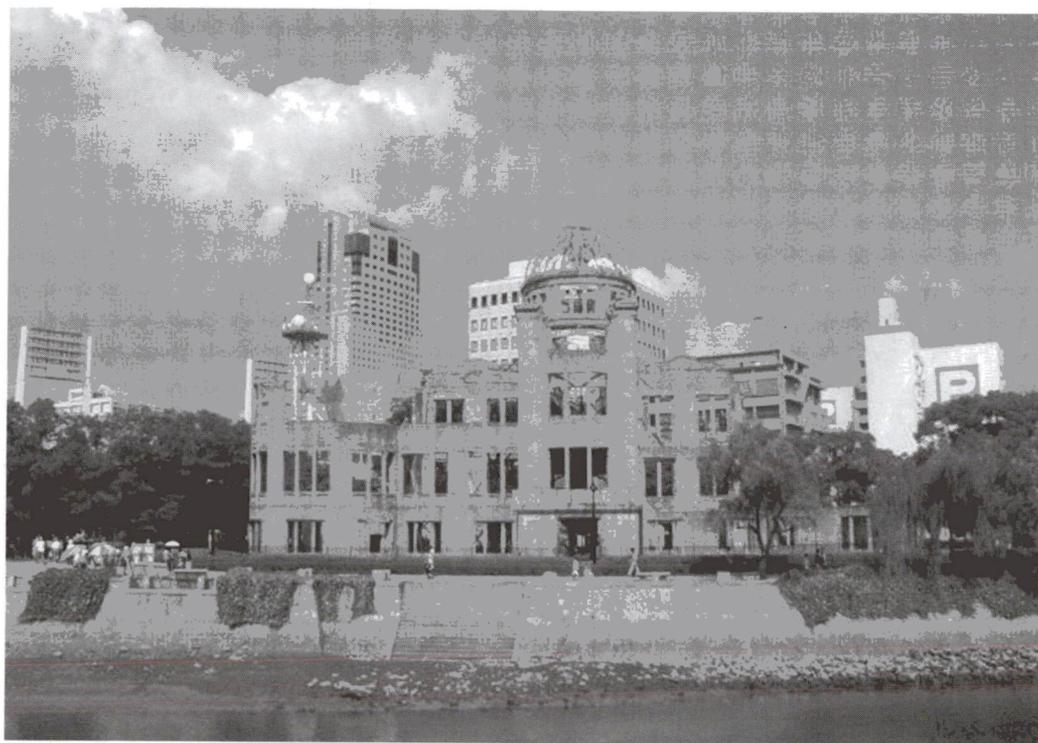
コミュニケーションへの参加者が対等であることも、自由な討議を実現していく上での重要な前提である。これに関しては、日米学生会議では、年齢、所属大学、学年などによる上下関係はないので問題はないようにも思える。しかしながら、これは日米学生会議全体に関していえることなのだが、英語力の差が、発言に対するモチベーションなどに大きな影響を与えていたことは否定できないであろう。この差を少しでも埋めるためには、通訳を積極的に引き受けてくれた参加者の協力や、各参加者の相手の意見を辛抱強く聞く姿勢、英語力に不安をかかえながらも積極的に発言していこうとする意欲が必要不可欠であった。確かにこのような試みは困難を伴ったが、異なる言語や規範をもつ者たちが、共通の問題に取り組む上での方法論を、参加者は実践を通じて学ぶことができたのではないかと。

今までに述べてきたように、広島サイトコーディネーターとして自分が第一に心掛けてきたことは、参加者間での自由な討議、機能的なコミュニケーションが可能となるような環境を整えることであった。広島での滞在において、どれだけ適正な環境が作り上げられたのだろうか。これは、自分ひとりが評価する問題ではないのであろう。一人一人の参加者がどのように感じたかを集計していくことでしか結果はわからない。広島サイトを企画、運営してきた上で反省すべき点も多々あるが、「理想的対話状況」の構築を目指して努力してきた自分の方向性は間違っていないと感じている。

ヒロシマをめぐる歴史認識は分裂している。そして人類は自らの存続を脅かす核兵器という凶器の取り扱いについてすら何のコンセンサスも持ち合わせていない。これらの問題に限らず、ありとあらゆる事柄について世界には多様な考え、見解が存在する。世界は分裂しているのである。異なる宗教、信条、政治的主張、歴史認識が溢れ、鋭い断絶が世界に走っている。しかし、人々はこれらの鋭い断絶の中で共存していかななくてはならない。このような現実を直視するならば、世界における問題を解決していく際にまず要請されるのは、分裂した主体が機能的なコミュニケーションをすることができる環境を構築していくことであろう。いささか理想主義的ではあるが、「理想的対話状況」に近づく形で世界における制度形成を方向付けていくことは必ずしも不可能ではないはずである。それは、果てしない挑戦のようでもある。そして、私にとって「広島」は、この果てしない挑戦への入り口であったのかもしれない。



広島の花火流し 8月6日



広島の花火ドーム



沖縄サイト

沖縄サイトコーディネーター：織田健太郎

Neil Broadley

● 沖縄サイトスケジュール（滞在期間：8月7日～8月12日）

- 8月7日 広島より到着
沖縄サイトスタッフによる沖縄の歴史・文化・社会に関するプレゼンテーション
- 8月8日 分科会#6、分科会#7
沖縄フォーラム一般参加者到着
Student Forum in Okinawa 2001 オリエンテーション
- 8月9日 平和学習 嘉手納基地訪問グループA～Cに分かれて平和学習
その後平和祈念公園・平和記念資料館にて集合、見学
在沖縄米国総領事主催のレセプション
グループごとのディスカッション
- 8月10日 文化体験
沖縄の有識者を囲む合同ディスカッション
グループごとのディスカッション、フォーラム発表準備
- 8月11日 一般公開フォーラム「Student Forum in Okinawa 2001」
ホームステイ
- 8月12日 スペシャルトピック#6 「スポーツと文化」
ビーチにてフリーアクティビティー



在沖縄米国総領事官邸の庭にて

● サイトスタッフメンバー

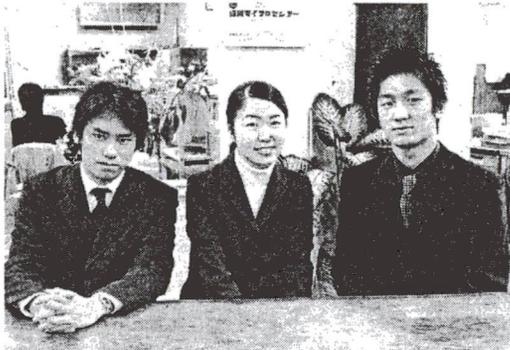
石川一郎、織田健太郎*、佐々木淳、柴田綾沙美、鶴田彬、出浦直子、中尾真希、糠田美穂、松岡洋平

(*はサイトコーディネーターを指す)

● 沖縄サイトの理念

日本の最南端に位置する沖縄は、古来より海洋文化の十字路として栄えてきた場所であり、豊かな独自の文化を育んできた一方で、太平洋戦争では悲惨な地上戦の行われ多数の犠牲者を出した場所である。そして今日、米軍による基地問題や経済問題のジレンマを抱えている地域でもある。沖縄に存在する多くの問題は日米関係と深く結びついているにもかかわらず、問題意識の共有には両国だけではなく日本国内でも大きな隔たりがあるといえる。こうした認識を共有し問題を両国共通の問題として捉える作業はこれからの日米関係にとって欠かせないわれわれは、次世代を担うべき学生としての立場と多角的な視点から、問題だけでなく新しい沖縄の可能性と魅力を生かした沖縄の未来像を提示すべく、日本の各地域そしてアメリカからの声をあわせて沖縄学生フォーラムでそれらを議論する機会を設けた。

沖縄の学生の参加を呼び掛ける実行委の織田、森下、藤井の各委員（右から）＝18日、琉球新報社



沖縄学生フォーラムは、①「沖縄の過去・現在・未来」に焦点を当てた②学生の手による③一般公開の国際フォーラムを含めた④120名規模の三日間の国際会議として⑤本土・沖縄・アメリカという異なる三つの当事者の視点を合わせた、フォーラムという意味で非常に新規性を帯びたものであったといえるだろう。多種多様な価値観を持つもの同士での討論、発表を通じ沖縄に対する問題意識の共有と学生間の相互理解を図ったのみでなく、責任ある考えを提示するため、一般公開の場でグループごとに考えを発表し、結果を聴衆と議論し、それらをメディアを通じて社会に提示できたことは、われわれの大きな収穫であった。

また、フォーラムを通じて得た地元とのつながりは、観光で見る沖縄ではなく生の沖縄を体感し、人々の温かさや独自の文化に触れることを可能にした。今回の沖縄サイトでは本当に多くの地元の方々による惜しめない支えがあり、地元の学生たちの自発的なサポートがあったことにより成功を遂げることができたのである。

県内の学生も参加を

8月の日米学生会議

実行委が呼び掛け

日米間の信頼と世界平和のために学生同士が議論し、交流を深める日米学生会議（国際教育振興会主催）が、この八月、沖縄でも開催される。会議の沖縄開催に合わせ、同会議参加者に沖縄の学生も加えたスチューデント・フォーラム（学生公開討論）・イン・オキナワも八月九～十一日に名護市（名護市開港記念館）で企画・運営に当たる同会議実行委（森下麻衣子委員長）が、七月十七日から八月二十三日までの間、京都、広島、沖縄、東京の順で開催をめぐり、沖縄開催は八月十七～二十日となる。日米の将来に多大な影響を持つ地域として沖縄の現状を調べ、将来の沖縄と日米の姿を考える。会議の公用語は英語となる。同会議実行委の森下委員長（慶応大）、織田健太郎さん（東大）、藤井康次郎さん（同）の三人が十八日、琉球新報社を訪れ、「沖縄の企画を成功させるため、沖縄に送けたいの深い学生の人材がほしい」と会議への参加を訴えた。募集人員は二十一人で、応募者の中から一次選考（書類審査）、二次選考（筆記試験・教養・英語、集団面接）を経て決定する。申込期間は二月～二十八日。申し込み・問い合わせは〒160-0004東京都新宿区四谷一ノ二、国際教育振興会内日米学生会議事務局（03）33559000（03）33559000、ホームページhttp://www.u-net.su.t.t.n.e.jp/jasc/



● 沖縄学生フォーラム一般参加者名簿

沖縄学生フォーラムの参加者は、第 53 回日米学生会議日米両参加者 63 名と、沖縄と本土全土からの一般応募参加者により形成される。

参加者名	大学	学科・専攻	学年
Group 1			
津波 望美	沖縄国際大学	総合文化学部英米言語文化学科	1 年
晨原 陽介	琉球大学	教育学部英語教育専攻	4 年
大城 祐子	沖縄国際大学	総合文化学部英米言語文化学科	1 年
見原 典竜	防衛大学校	陸上要員 管理学専攻	4 年
具志堅 千恵子	沖縄国際大学	総合文化学部英米文化学科	1 年
仲間 秋子	沖縄国際大学	文学部英文学科	3 年
Group 2			
国吉 真美	沖縄大学	国際コミュニケーション学科	2 年
山城 紗都美	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	4 年
大沢 泉	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	2 年
瀬川 辰彦	明治大学	政治経済学部	4 年
Group 3			
古謝 義友	沖縄国際大学	総合文化学部英米言語文化	1 年
倉岡 大樹	名城大学	国際学部	4 年
松本 佳代子	同志社大学	文学部英文学科	3 年
池田 敏章	立教大学		2 年
Group 4			
山下 雅人	防衛大学校	航空要員 電気工学専攻	4 年
比屋根 麻里乃	早稲田大学	第 1 文学部	2 年
片岡 麻衣子	中央大学	法学部政治学科	2 年
長嶺 克	沖縄大学	法経学科	4 年
砂川 大吾	沖縄大学		4 年
慶田城 七瀬	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	4 年
Group 5			
杉原 梓	早稲田大学	第一文学部	3 年
池谷 里美	沖縄大学	法経学科	4 年
源古 剛	名城大学	国際学部	4 年
前堂 直志	名城大学	国際学部	4 年

Group 6

當山 由紀乃	沖縄国際大学	文学部英文学科	3年
金城 絵美	沖縄国際大学	総合文化学部英米言語文化学科	1年
佐藤 太郎	防衛大学校	航空要員 国際関係学科専攻	4年
島袋 ゆりか	慶應義塾大学	法学部法律学科	3年
池原 平	龍谷大学	経済学部	3年

Group 7

長田 州之介	慶應義塾大学	法学部法律学科	4年
宮里 敏史	防衛大学校	航空要員 通信工学専攻	4年
松山 亜紀子	沖縄国際大学	総合文化学部英米言語文化学科	1年
前原 絹子	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	4年
張 美秋	沖縄大学	法経学科	3年

Group 8

山城 和豊	名桜大学	国際学部	4年
上原 未知	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	4年
宮城 征彦	沖縄大学	法経学科	4年
北松 円香	国際基督教大学	教養学部社会学科	1年

Group 9

大城 優美乃	琉球大学	法文学部国際言語文化学科	4年
仲村渠 智	早稲田大学	商学部	3年
金城 亜希子	同志社大学	法学部政治学科	3年
山口 由起子	東京大学	教養学部地域文化研究学科フランス科	3年
新垣 智子	琉球大学	法文学部	4年

Group 10

儀間 新吾	沖縄国際大学	総合文化学部英米言語文化学科	1年
山城 愛子	琉球大学	教育学部英語教育専攻	3年
菊地 端夫	明治大学	博士前期課程政治経済学研究科政治学専攻	1年
白井 洋太郎	防衛大学校	海上要員 電子工学専攻	4年
海勢頭 麗圭	琉球大学	教育学部英語教育専攻	3年

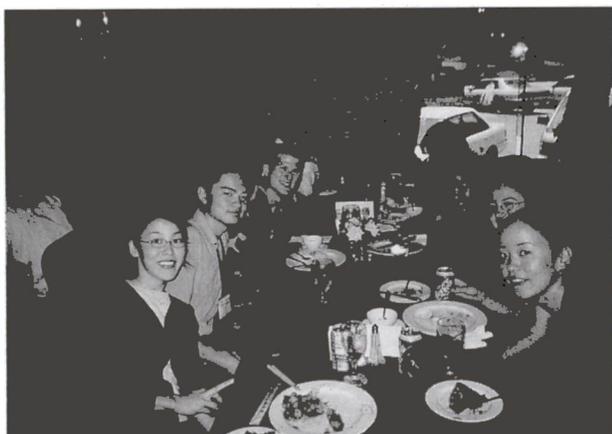


嘉手納基地にて

●平和学習

● Camp Foster、嘉手納基地訪問

初日には、平和学習が行われた。海兵隊の Camp Foster でブリーフィングを受けた後に嘉手納基地を訪問、基地見学の後に Officer's Club にて昼食を基地関係者とともにした。昼食後安保の丘から基地を見学後三つのグループに分かれ平和学習にむかった。



Officer's Club で昼食を頂く参加者



安保の丘にて

● グループ A

「住民を巻き込んだ沖縄戦～住民の視点からの戦争体験～」

グループ A は、平和ネットワークの方の案内によりはじめに糸数壕（あぶちりがま）に向かった。肌で沖縄戦の酷さ、悲惨さを感じることができ、大変貴重な経験であった。その後、駆け足ながらひめゆりの塔を見学した。

● グループ B

グループ B は、陸上自衛隊の駐屯地で沖縄戦の様子を再現する立体模型を見せていただいた後に、旧海軍の司令基地となっていた海軍壕へと向かった。住民の避難していた、ガマとは異なり、人の手によって掘られコンクリートで固められて地下深くにある壕には、兵士が手製の石槍を手に最後の突撃に赴く際に使った出口や、沖縄戦の終盤に司令官らが自決した部屋などが当時のまま生々しく残されていた。参加者たちは皆、神妙な面持ちで戦争の負の遺産に、深く見入っていた。

● グループC

グループCは、読谷村役場にて小橋川清弘氏による講義をうけた。読谷村は、基地の共同使用という名目で、未返還基地の土地に、村役場その他を建てている。これまでどのような問題が起きてきたのか、どのようにして基地返還に向けて動いてきたか、読谷村史編集室の小橋川先生に講義をお願いし、ディスカッションを行った。



講義を受ける参加者たち

● 平和祈念公園・平和祈念資料館 見学

それぞれのコース終了後、参加者は、沖縄県平和祈念公園に集合し、平和祈念資料館と平和の礎を見学した。

参加者ノート

「軍隊は国を護らない。」沖縄のある方が防衛大学校の制服を纏う私を目の前にしてこう言い切りました。将来の幹部自衛官を目指し、日々訓練に臨む学生が、その夢を絶対的に否定されたのです。始め私の中に行き場の無い怒りが込みあがりました。饒舌家の私は、青臭い書生論を用いて彼に反論しようとしたのですが、声が出ません。一言でも声を発しようとするれば、涙が溢れそうだったからです。自分の存在を否定されたばかりか、旧軍の努力が、失われた数多くの命が、そんな一言で言い切られてしまったのです。名状しがたい感情を抑え、私は考ました。そして、最後に一言彼に告げました「国を護らない軍隊の者です。それでも頑張ります。」と。彼の言うことは確かに正しい。然し、それは結果論に過ぎない、過去にこのような悲惨な事実が残ってしまったことを否定することができないのなら、明日このようなことをおこなさないようにすればいいのだ、という結論に達しました。

「軍隊があるから戦争が起きる。」「自衛隊は憲法第9条に反する。」沖縄ではよく言われました。肉親を失い、平和を奪った戦争。こんなものは起きないに越したことはありません。そう、人類が争わなければ、私は不要な存在なのです。しかし、人類が発展しようとしつづける限り、争いは必ず起こります。現に様々な形で争っているではありませんか。皆が正しいから、争うのであり、お互い半歩ずつ引けば、相手のことを考え、譲り合う心さえもてば、争わなくて済むのではないのでしょうか。「ペンが剣よりも強し」と言うのなら、私が戦争へ行かなくてすむような世界を創って下さい。皆さんのペンが折れた時、私が剣として使われるのです。戦争は他の手段をもってする政治の延長に過ぎないのですから。

たとえ、軍隊は国を護らないといわれようとも私は護りに行きます。この度、日米学生会議沖縄フォーラムで逢った皆で築く未来が、争いのない平和な世界であることを祈り、短い感想文を締めくくらせていただきます。

(白井洋太郎・防衛大学校)



● 在沖縄米国総領事主催のレセプション

平和学習が行われた夜には、在沖縄米国総領事官邸におき、総領事主催のレセプションが開かれた。官邸は、嘉手納基地などを一望でき、その場において参加者間ならびに、そこにいらっしゃった領事館関係者および米軍関係者の方々とお話しする機会を得た。



総領事を参加者が囲んで



● 文化体験

午前は琉球舞踊、琉球音楽、琉球空手の3グループに分かれ文化体験を行った。

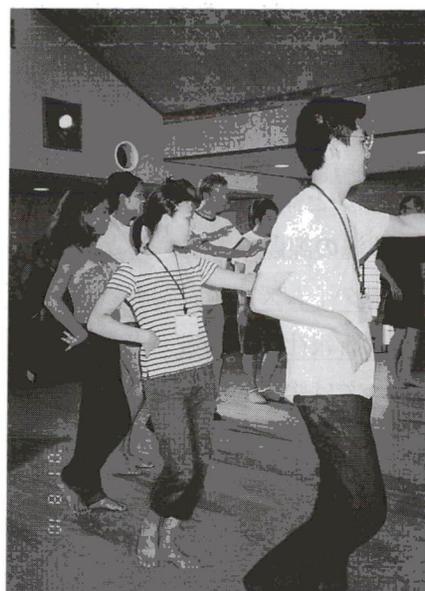
琉球舞踊のグループと琉球音楽のグループは沖縄県立芸術大学の学生による琉球舞踊、琉球音楽の発表を鑑賞した。その後、音楽のグループは三線という楽器の演奏の仕方、舞踊のグループはカチャーシーの踊り方を学生に教えていただいた。



沖縄県立芸術大学で講義を受けて



まずは先生及び学生のお手本を拝見して



そして実践へ

琉球空手のグループは沖縄県空手博物館（剛柔流：外間哲弘館長）を見学。琉球空手や古武道の由来、空手の国際化についてお話をうかがい、実践的な護身術も体験した。「柔よく剛を制す」「剛よく柔を制す」という流儀を身をもって感じる事ができた。

参加者ノート

フォーラムに参加してショックだったこと-それは、沖縄の人たちがことあるごとに「本土」と「沖縄」を区別して考えることだった。私自身は沖縄も、日本の一つの県という認識でしか捉えていなかったもので、こういった考え方に触れたときは驚きを隠せなかった。例えば、沖縄の学生に、「沖縄の人はみんな水泳がうまいの？」と軽い気持ちで尋ねたら、「それは内地の人間の先入観だ」と、猛烈な反発を受けたことがあった。この認識のギャップは、そのまま基地問題に対する両者の温度差となってあらわれる。基地に対して、沖縄の人は非常に敏感である。轻轻松松安全保障上の問題など口に出出来ない。ギャップを埋めるためには、相互に尊重しながら、誠実に向き合って対話するしかない。そういった意味で、今回のフォーラムは、基地問題を考える上で非常に重要な役割を果たしたと思う。結局、問題に関わる複数の立場の人間（この場合は沖縄、本土、アメリカ）が対話することでしか、解決への道は開けないのである。私自身にとっても、これからの人生における社会との接し方、人間との接し方について、とても大きな意味を持つフォーラムだった。

（山口由起子・東京大学）



● 沖縄の有識者を囲む合同ディスカッション

各グループのフォーラムのテーマにそった、沖縄の各界をリードする有識者による講義と質疑応答が行われ、それをもとにグループごとに沖縄フォーラムに向けて方向性を探った。

トピックと講師の方々

➤ 沖縄の課題

沖縄タイムズ社論説副委員長 長元朝浩氏

琉球新報社基地担当 松本氏

ここでは総合的な視野から、参加者と講師の対話を交えつつ沖縄の認識を深めることを行った。特に、やはり参加者のなかで関心の高い基地問題や経済の話題が盛んに議論された。

➤ 国連アジア本部を沖縄に

沖縄大学法経学部教授 下地玄栄氏

沖縄の地政学的特長と地元の特性を生かして世界の平和と発展に貢献するべく、国際連合のアジア本部を沖縄に誘致する構想について考えた。

➤ 国際金融センターと地域振興

琉球大学教育学部教授 真栄城守定氏

沖縄が基地問題と表裏一体として抱える経済の問題を考え、その解決策を国際金融センター構想の例を参考に考え、議論した。

➤ 新しい観光資源

プゼナテラスピーチリゾート社長 国場幸一郎氏

沖縄の経済を支える観光業の視点から沖縄の持つ地域的な可能性を考え、リゾート経営の第一人者である国場幸一郎氏と共に沖縄の経済問題解決のための糸口を探った。

➤ 沖縄の長寿と健康

琉球大学医学部名誉教授 鈴木信氏

世界一の長寿国日本の中でも、最も平均寿命の長い沖縄の人々の健康のメカニズムを *The Okinawa Program* の著者である鈴木教授に解説していただいた。生かすべき沖縄の魅力に長寿と健康があることに気づかされた。

➤ IT技術と沖縄振興策

KBC 学園校長 稲垣純一氏

地理的短所から製造業の育ちにくい沖縄において新しい産業として注目される IT 産業の可能性について、沖縄 IT 関連の最前線で活躍中の稲垣氏に話を伺った。

参加者ノート

～Student Forum in Okinawa 2001 に参加して～

沖縄が日本に復帰してそろそろ30年の節目を迎える。その間、沖縄は、魅力溢れる海洋文化を持ち、我々に自然の美しさを思い出させてくれた。また、南国特有の農作物の生産により、我々は南国の食材を味わうことができた。そして何より、日本がこれほどの平和を享受してきたのは、沖縄の存在なしでは語れない。しかしながら、沖縄には、それ以外の産業がなく、経済的な貧しさから、未だに米軍基地が存在し、最も平和を願う県民の思いとは全く異なった現実がある。その沖縄の歴史、文化、伝統、芸術など、現在の沖縄の姿についての理解をより深め、これからの沖縄の未来を議論することは、沖縄だけでなく、日本、アジア、そして世界へと大きな影響を与えるものである。沖縄出身者である私にとって、これほど有意義なフォーラムは他にないであろう。実際、短い期間ではあったが、多くのものを得ることができた。たとえば、沖縄の米軍基地問題に関しては、日本側の言い分、県民の言い分、そして、アメリカ側の言い分と、それぞれの立場から意見を述べることで、互いに理解を深めると同時に、問題の根本を知り、互いに刺激を与え、問題をより身近なものとして捉えることができた。また、その前提となる各種講演、文化演出見学、史跡研修、基地見学は、当時の沖縄や、現在の沖縄の姿を垣間見させてくれた。そして、最後の公開フォーラムにおいては、各グループの発表や、来場の方々との意見交換もあり、問題意識の向上へとつながった。このフォーラムを通じ、各学生が沖縄についての認識を深め合い、考えたことが、現在の沖縄の姿、そして、これからの沖縄のあるべき姿について、世界に広げる一歩となったことは間違いない。今後も、このようなフォーラムを企画し、実行していくことは、日本のみならず、世界の発展に大きな影響を与えるものと考えている。来年以降も実施されることを期待してやまない。

(宮里敏史・防衛大学校)

● Student Forum in OKINAWA 2001 公開フォーラム

日本本土、アメリカ、そして沖縄の学生が一緒に沖縄の未来を考えるとという理念のもと、2日間に渡り、体験し学んできたことを踏まえ、それぞれのグループは自由な視点から沖縄の未来を考えた。参加者はお互いに出会ってからわずか三日足らずで、さらにバックグラウンドや言語の壁と悪戦苦闘しながら、寝る間も惜しんで提言を練った。それらの提言はプレゼンテーションという形で宜野湾市の沖縄コンベンションセンター大会議室にて一般来場者及びマスコミ関係者の前で発表された。



稲峰沖縄県知事による挨拶



挨拶をする両実行委員長



フォーラムには、稲嶺沖縄県知事にも御臨席頂き、お言葉を頂戴した。その後、本土、アメリカ、沖縄の学生がそれぞれ均等に含まれた10のグループが、それぞれ独自の視点から、プレゼンテーションを行った。

琉球王国時代からの歴史を劇風にして発表したり、それぞれの学生が立場を変え、例えば沖縄の学生がアメリカの視点から意見を述べたりするグループなど、発表形態は多岐に渡るものとなった。また

内容としては、マスメディアとの関わりを考えたり、嘉手納基地を始めとする基地の民軍共同使用というアイデアをもとに、沖縄の発展を考えたりするなど、様々な案が出された。

しかし、ここで出された意見は、ほとんどが基地の廃絶ではなく、基地との共存を視野に入れたものであった。これに会場は敏感に反応し、来場者との質疑応答も盛んに行われた。軍隊とは何なのかという本質的な議論がない、と疑問を挙げたのは高校生だった。既成事実化した基地の存在によって問題が起きているのであれば、まずそれから解決していくべきであり、沖縄の住民感情を考えるべきであるのに、フォーラムの発表では基地があることによって苦しむ沖縄の人々の気持ちが何も考えられていない、等の厳しい指摘もあった。

沖縄フォーラムの結果には賛否両論あるのは確かではある。しかしフォーラムを作り上げるという過程において、そしてその中から社会発信をするという姿勢それ自体に沖縄学生フォーラムは価値があったといっても過言ではないだろう。本土、沖縄県そして米国という立場や文化の違いを乗り越えてひとつの目標に向かうという過程において参加者それぞれ得たものは大きかった。



審査員の方々とフォーラム来場者

● 各グループの発表内容

グループ1

大城祐子、織田健太郎、具志堅千恵子、
津波望美、中尾真希、仲間秋子、晨原陽介、
古川敏明、見原典竜、Brian Cathcart、
Lisa Daily、Jaime Huelse-Barker



“Fostering Coexistence through Effective Communication in Okinawa”

「沖縄におけるコミュニケーションの改善により平和共存を促進する」

基地問題の解決には、まず、基地と沖縄住民の間におけるコミュニケーション状況を改善していくことが必要である。コミュニケーション上の問題の例として、基地の経済的波及効果などプラス面が地元メディアによって報道されないこと、情報の非開示が基地に対する地元住民の不信感を募らせることなどがある。基地と住民間には、一方的な力関係が存在するが、こうした問題解決に向け、政策決定過程への住民参加が認められなければならない。自治体レベルで解決できるものと、そうでないものを明確化することで、スムーズな問題解決が可能となるものもあると考えられる。併せて、外国企業の招致、沖縄の多文化都市化、学校・地域社会・専門家・政府等、様々なレベルでの交流の活発化、アメラジアンへの支援など新しいネットワークの構築も提案する。結論は、より協調的で且つ効果的なコミュニケーション構造を確立することで、少なくとも短期的には、基地と沖縄住民の平和共存が可能になるということである。



グループ2

山下淳一、伊藤公一朗、柴田綾沙美

Joseph Boski, Krisa Gardner

Hua Wang, Nana Uemura, 国吉真美

瀬川辰彦、大沢泉、山城紗都美

“Open Discussions to Improve Japan-US-Okinawa Relations”

本グループにおいては、一見非現実的とおもわれることを討議することで、または頭の片隅に入れておくことでデッドロックに陥っている沖縄の種々の問題に新たな可能性を見出そうとするプレゼンテーションを行った。

われわれのグループでは日本国政府、アメリカ政府、そして沖縄による三者間協議の重要性を訴えるために2029年という期限を設け、その期限到達時に沖縄が自らの道を決定するという「仮定」をすることによって、どのようなことが可能かということを示した。

現在の相対的な力関係は、アメリカと日本が大きく、自らの生活に一番関係する沖縄の声が一番小さい。これは国と自治体という違いがあるものの、そこに関わる利害関係も考慮すると必ずしも適切とはいえない。したがってこの自己決定というものを設定することで、交渉する際の三者間のパワーバランスを均等にして、対等な立場で話しあえる土台をつくる。これにより、日本政府は沖縄の意見に耳を傾け真摯にその問題に取り組み、アメリカは謙虚に沖縄の問題に向き合い、沖縄は自らの過去、現在を見つめ、この長期間を通して沖縄にこれからどういう道が可能なのか、またはどういう選択肢が最適かを定めるためのオープンディスカッションが可能であろう。

この過程で、沖縄は日本政府との関係、また米国政府との関係の再考、基地の縮小および撤退の可能性、沖縄経済の構造的脆弱性とITなどを含む新たな可能性、変わりゆくまたは世代間でかわってくるであろう沖縄/琉球アイデンティティの行方などが議論される。

このグループプレゼンテーションはあくまでも、一定の仮定の上に成り立っている。沖縄を特別扱いしているわけではなく、過剰な負担を強いられている沖縄の問題を、真剣に考える際に、ときには一歩下がって、全体図をみてもみるのも良いのではないかと考えた。視野が狭くなってしまいがちなので、大胆な解決方法を考えることも、また問題解決の一助となるのではないかと考えた。

グループ3

秋山洋平、入江美美、三田重恭、
Dustin Garris、Hsinyi Tsang、
Lourdes Rivera、倉岡大樹、
 古謝義友、松本佳代子、池田敏章



私達のグループ発表の主眼は、沖縄の本土からの経済的自立、特に、失業率最悪、県民の所得は全国平均の3分の2程度という経済格差を埋めること、基地があることでもたらされる政府からの資金援助に頼りがちな沖縄の現状を打破することにあったと思う。その方法として、観光というものを産業の軸にすえての提言だった。

沖縄の経済は、日本政府からの補助金、基地、観光産業が3本柱として知られる。このうち、補助金、基地の経済効果はほぼ固定しており、もはや著しく高めることは難しい。そこで、観光産業に注目したのである。私達は、沖縄における観光産業の問題点に着目した。

日本は世界と比較して、エンターテインメント的ビジネスを軽視する傾向がある。沖縄を訪れる観光客の平均滞在日数は世界的な他の観光地に比べて、圧倒的に短い。例えば、観光客のハワイにおける平均滞在期間は7日とされる一方、沖縄では平均が3日であると言う。しかし、逆を言えば、それが、たった一日延びる事によって得られる経済効果は10億ドル(約1000億円)近いという計算もある。県の最大の収入である政府の補助金が6000億円であることをよって、今の観光政策を、もっと長期滞在型の観光を目指したものへと変えていく、その具体的な案を、実際に5人家族むけのパッケージツアー(5日間コース)を計画するという形で行った。

旅行パッケージを作る上で私達が最重要視したのは、いかに沖縄固有の魅力をもってリピーターを増やすか、という点であった。私達は、自然、歴史的遺産(ガマや各種ミュージアム、公園など)文化、カジノ(現在思案中)などの新しいアミューズメントの中で、一番の沖縄の魅力は、やはり「沖縄の人々」にあると考えた。これは実際に我々が沖縄に滞在し、地元の人々と関係を築いていく過程で感じたことであった。ともかくもてなし方というか、歓迎ぶりがすごいのである。例えば、沖縄では結婚式などの行事があると、いつのまにかよく知らない人まで一緒に祝っているという。沖縄の学生はそれが普通であると言っていたが、自分達にとっては新鮮であった。今回のパッケージの中でも、実際にどのようにして沖縄の歴史を県外の人に知ってもらうか、そしていかにして地元の人と旅行者がコミュニケーションしていけば良いのか、という点が議論された。その上で実際にガマに入った文化体験は貴重な資料となった。

当日のプレゼンテーションはスキット(寸劇)の形式をとり、実際に旅行代理店の職員2名と5人家族という極めてわかりやすい設定で実施した。スキットの中では実際に代理店側が家族側にパッケージを説明していく。家族側が質問をし、代理店側がすかさずアピールしていくのである。このやり取りから、フォーラムの観客が観光スポットとしての沖縄の魅力を理解することを目指した。



グループ4

石川一郎、松岡洋平、糠田美歩、長嶺克、
Mital Gondha、Hannah Peterson-McCoy、
Ethan Jennings、砂川大悟、慶田城七瀬
片岡麻衣子、山下雅人、比屋根麻里乃



正味3日間という短い期間ではあったが、4班では数多くのことが問題提起として議論の対象となった。沖縄への国連アジア本部誘致問題、米軍兵によるレイプ事件、沖縄の観光産業の未来、ビジネスとしてのさとうきび畑の今後、本土に住む人間の沖縄に対する実質的無関心、そして沖縄米軍基地問題である。

上記のような問題を議論してゆく中で、私達は各々が持つバックグラウンドの違いによって沖縄に対する意識の違いが存在し、考えに温度差があることに気がついた。それは、考えのすべてを表現するのは困難ではあるが、簡単な例を挙げてみると次のようなことである。「沖縄県民の中には本州に住む人々に対してある種の劣等感を感じている。(誰もが認める事実とはいえないが、特に所得や教育水準の面において少数このような意見を耳にする)」「しかし、本土の人間にはそのような意識はほとんど存在しない。」「米国人の多くは日本における最重要な米軍基地である沖縄の存在、場所を知らない」などである。

そこで私達はこれら意識の違いの存在を表現、伝達することをプレゼンテーションの最重要課題としてすえ、意識の違いが生じる源泉と考えられる歴史的経緯、つまり沖縄の歴史をスキット形式で表現し、その後で「沖縄の未来への提言」を班員各々がコラージュ的に意見を述べることで纏め上げた。

スキットは大きく3つのパートに分かれている。はじめは、琉球王朝の成立から薩摩藩の侵略(1429~1609)で、主に政治的に安定し、文化に富んだ平和な南国を表現した。次に、明治政府による廃藩置県と沖縄支配(1879)、本土の意向による長年保たれてきた中国との貿易の断絶を表した。そして最後に、第二次世界大戦と沖縄戦、その後の米国支配、そして1972年返還という著しく揺れ動かされた時代を表現した。

コラージュでは各々が一言で端的に次のように提案をした。「国連アジア本部を誘致し、沖縄の意義を高め、同時に新たな雇用を創出する」「米国との軍事的依存をやめ、アジア諸国との協定を結ぶ」「学生間の対話を増やし、沖縄の未来を更に真剣にとらえる。」「沖縄県民と米軍基地とのコミュニケーションをより多くはかり、互いに共存してゆく」「沖縄の伝統とは何かを再考察し、未来を提言する」「沖縄の産業にさらなる投資をする」

プレゼンテーションは、スキットでの沖縄の歴史の表現、各々の意見のコラージュの混合形態であったため、テーマであった「意識の違い」がどこまで観客に伝わったかは分からない。しかし、各々の意見をコラージュすることは新たな試みであり、各々の考えを率直に述べるという意味で深い意義があったのではないかと思う。

グループ5

森下麻衣子、夫馬賢治、千代明弘、

Allison Kramer、David Buckley、

Rachel Golden、Rasheed Townes、

前堂直志、源古剛、池谷里美、杉原梓



私たちは、沖縄の現状、そして未来を考えるにあたり、メディアの持つ可能性に着目した。これは、私たちが議論を行う上での重要な情報源となったメディアと接するに当たり、その現在のあり方に限界を感じさせられたからだ。

沖縄の基地問題をめぐる報道のあり方、論調は、アメリカと日本とでも異なれば、日本国内でも沖縄のそれと本土のそれとは大きく異なる。こうした各メディアのスタンスの差異というものは、沖縄問題特有の現象でもなければ、それをすぐに変えられるものでもないだろう。もしくは、それは変えるべきものなのではないのかもしれない。また、論調が異なるであろうことは、私たちの理解のうちにあることなのかもしれない。しかし、私たちは、実際には、全てのニュースや全ての新聞を見たり読んだりすることはできない。報道の仕方や論調もわかりだが、そこに提示される情報、もしくはされない情報の相違も私たちの認識に大きな影響を及ぼす。

こうしたことを示すため、私たちは、米国、日本本土、そして沖縄のニュース番組を想定した報道を実演した。ニュースの扱うテーマとしては、「思いやり予算の決定」が共通に設定され、各班には、同じ内容の情報が与えられた。それぞれのニュースは、各視点から伝えられ、私たちが共有していた情報の中でもある特定の情報を報道することを選んだグループもあれば、あえてそれを伝えないことを選んだグループもあった。例えば、思いやり予算の額については、全てのグループがそのニュースに組み込んだものの、その予算が沖縄県の総予算の3倍であるという伝え方をした沖縄の報道に対し、本土の報道はその額を述べるに留まった。

同じ情報を元にそれぞれが作成したニュースが与えた印象は大きく異なるものとなった。ニュース報道を自分達の手で作り上げ、それを演じることによってわかったのは、「事実」や「数字」という一見中立に思えることさえ、それが伝達される過程において、事前に多くの価値判断を含んでいるということだった。一つの「論調」や「色」から、私たち、もしくは伝達者自身がいくら離れようとしたとしても、伝達者の認識やその限界は確実に私たちに影響を及ぼしているのだ。

自分たちの作業を通して実感させられた現在のメディアの限界を提示したのちに私たちは、新しい形のメディアの姿を提言した。私たちは、各メディア機関の「論調」や「色」を分析し、提示し、各メディアにおいて発信された情報を横断的に見た上での「情報」を提示する多国籍かつ非営利のメディア機関の存在を提唱した。このようなメディア機関からの情報発信は、その他一般メディアの活動を受けて成されるので、「最も早い情報」を提供することはできないが、それを目的とする必要もまたない。こうしたメディア機関がその効果を発するのは高度に政治的な事象、国家の安全保障または、



民族集団や国家の存否に関わるような事象に関する情報提供においてである。高度に政治的な事象に対し、その他一般メディアが各地域、各国家、各政治的利害団体に属することによって課せられる制約を持たない。またこのようなメディア機関は、その他一般のメディアの目的とは異なる為、そして非営利にて運営されるため、同じ土台において競争する必要もなく、そうしたことから由来する経済的制約からも自由である。

上記のような形で、多国籍にまたがって存在するメディア機関の持つ可能性は大きい。多くの情報が散在する今日の世界において情報を集約させる役割を担うだけでなく、各地域や各国における一個人の情報収集能力の限界に新たな可能性を与える。それは、今までのメディアにはなし得なかった「中立性」を持って異なる政治的立場、民族的立場、そして宗教的立場の人々をつなげ、対話を促進する役割を担うことができる。こうしたメディアは、様々な問題における私たちの認識を広げ、相互理解を進めることにより、諸問題のより建設的な解決を促す可能性を持っていると考える。

私たちの提言は、まったく異なる背景を持った参加者 11 名、3 日間という限定された日程の中、それぞれの知識や言語の壁を超えて成された。提言の内容がどれだけ現実的であったか、結果に対する評価は人によって異なるであろう。しかし、こうした自分達の考えを「提言」という形で導き出すまでの過程がどれだけ困難だったかは、それぞれが様々な形で感じたことなのではないかと思う。そして、この 3 日間を通じて私たちが経験した「困難」によってこそ、こうした試みがいかに重要なものかを確認させられた気がするのだ。

参加者ノート

今回私は学生会議というイベントに参加することは初めての体験でした。この学生会議に参加できて、多くのことを学べたし、考えさせられるきっかけとなりました。私の中で印象的だったのが、平和学習のために戦時中、住民の隠れ家になっていたガマを見学したことです。当時のままの状態、中にはいるととてもショックを受けました。見学中、戦争体験者のかたが当時の状況を教えてくれて、ガマの中で私と同年代の女学生も多く死にました。戦争について、平和について考えさせられるような貴重な体験が出来ました。短い期間の中、学生会議では様々なことを体験でき、その実体験をもとに討論ができたので良かったと思います。しかし、スケジュールが詰め込まれすぎて、十分に討論する時間がなかったのではないかと思います。(中略)

今回のフォーラムは、アメリカからや本土からの学生に沖縄の現状を知ってもらうととてもいい機会になり、沖縄の学生にとってもより身近に沖縄の抱える問題に向き合う良いきっかけになったと思います。しかし、フォーラムでは、沖縄出身のオブザーバーの意見として、「本質が問われていない」などの意見がありました。今回は 4 日間という限られた期間の間での会議だったので、住民を納得いかせる発表は出来なかったのかもしれませんが。現在沖縄が抱える、基地問題、失業率の増加などは簡単に解決できるものではありません。会議に参加した私たちは、沖縄の現状は知ることが出来たと思います。この知識をどう今後に生かすかは、私たち次第だと思います。私は今、ただの会議で終らせるのではなく、自分の中でこの経験が何かに繋がれば良いなと考えているところで

(国吉真美・沖縄大学)

グループ6

池原平、大井美歩、金城絵美、佐藤太郎、
島袋ゆりか、當山由紀乃、山口臨太郎、
Jessica Cardenas、Steven Fuchs、Ng Yook Meng



私たちのグループで、中心的に話し合われたことは、沖縄の高学歴の人間が、職を求めて県外へと出てしまう頭脳流出についてであった。そこで、フォーラム前のグループディスカッション、及び沖縄スチューデントフォーラムでは、実際に沖縄に住む学生の生の声を通じて、現実を見つめ、そこから解決方法を探ることを試みた。

沖縄学生 A：私は東京の会社で働きたい。その方が、自分の能力を生かせる機会が多くあると思うからだ。沖縄ももちろん好きだが、将来は海外で働きたいという夢があり、それを実現できるような大企業が集中している東京はやはり魅力的である。しかし、結婚して子供が生まれたら、子育ては沖縄でしたいというのが本音であるが、仕事との両立を考えると、現実としては難しいのかもしれない。

沖縄学生 B：私は英語の先生になりたい。そして生徒に英語だけではなく、ここ沖縄の素晴らしさや、抱える問題までも伝えていきたい。そのためには、自分自身が、沖縄を県の外から、客観的に見ることが大切になると思う。だから私は県外の大学に行くつもりだ。

沖縄学生 C：将来は留学したいと思っている。そのためには英語がしゃべれるようになりたい。だから、米軍基地で働くことによって英語力を伸ばしたい。私にとっては米軍基地で働くことも、職業選択の一つ。基地が多く存在する沖縄に住んでいることを最大限に生かしたい。

沖縄学生 D：私は沖縄が好きだ。だから沖縄で沖縄のために働きたいと思う。今は県庁で公務員として働きたいと考えている。そして、沖縄の産業の発展に貢献するような仕事に就きたい。

これらの「学生の声」に共通して見られることは、沖縄が好きで将来は沖縄で生活していきたいと思っているが、生計を立てて行くための職業は、公務員、米軍基地で働く、観光産業など非常に選択肢が限られている、ということである。

一部には、これらの選択肢を積極的に生かし、これらを通じて、自分のスキルアップに結び付けている学生もいた。沖縄で得られる機会を最大限に利用し、沖縄で仕事を見つける。このように、沖縄に住む学生が、これらの選択肢の中から、自分の可能性を伸ばすための機会を見出すことが出来れば、頭脳流出を防ぐことができるであろう。しかし、これらの選択肢以外の職業を求める学生、特に大企業に勤めたいと考えている学生が多くいることも、また事実である。沖縄では働くことの出来る企業数も限られてしまうため、仕事を求めて県外へと流出するのである。

こうした様々な声はすべて沖縄問題の側面を表すものであり、簡単な解決法などは存在しない。沖縄での限られた機会の中から自分の可能性を見出すか、島を離れるかという選択肢に若者が悩まされない為にも沖縄の生活水準の向上が望まれる。こうした方策には、頭脳流出の防止と教育機会の拡大だけでなく、経済発展も含まれる。



グループ7

前原絹子、鶴田彬、出浦直子

布川俊彦、Maria Jimenez、Liv Coleman

Bernard Murray、張美秋

松山亜紀子、宮里敏史、長田州之介

私たちは発表をするにあたって次の二つの点にポイントを置いた。第一点は沖縄の現状に対して、三つの視点からの考察を発表すること。本土の学生、沖縄の学生、そしてアメリカの学生と、それぞれ沖縄について知識と認識の差があることを逆に利用し、あえて自分たちが沖縄の現状に対して持つ考えやイメージを素直に述べてもらうことで、三者の考え方の相違点を浮き彫りにすることが狙いであった。

フォーラム本番でアメリカ側の学生は、沖縄問題についてアメリカ人は一般的に認識不足であり関心も薄いという現状を正直に述べたが、同時に極東の平和維持のために、また沖縄の経済のために基地は不可欠である、という考えを強調した。アメリカでも報道された米兵による数々の暴行事件は、痛ましい出来事として受け止められたものの、基地の撤廃を訴える声は出てないという点がうかがわれた。学生のスタンスもほぼ同じであったようだ。

日本側は最初に、安全保障問題を考えた上での沖縄の重要性を説いたが、「皮膚感覚の欠如」という言葉を用いて沖縄の問題、特に基地問題、について本土の人間は実感を持ってそれらの痛みを感じていないという考え、危険と知りながらも日々の生活に必要であるために一部の住民に我慢を強いるという点で原発と基地が似ているのではないかという考えを述べた。日本側が言わんとしたのは「皮膚感覚」がない故に本土の人間は沖縄の問題を本質的には理解できていないということ、基地問題について同情はするが仕方がないことだと人々は心の底で思っているという事実であり、この二つを反省の気持ちを込めつつ特に強調して発表した。

最後に発表した沖縄の学生たちは、沖縄問題の生々しい事実を訴える代わりに、沖縄に住む者たちが今、何を一番望んでいるのかを述べた。最初にあげられたのが「No More Wars」、何を差し置いても戦争だけは起こしたくない、起こされたくないという終戦以来の沖縄の気持ちであった。そしてもう一つが、沖縄の精神的及び経済的な自立を求めるとのこと。日本とアメリカに依存し、そこから脱却しようにも力がない故にできないという現状を踏まえつつ、将来的にこの二つの自立を勝ちとっていくことが沖縄の目標であるという主旨の発表であった。

発表にあたっての第二点は、沖縄の未来のために彼らを取りうる方策を提言する事であった。この際に留意したのは、「平和」で「豊か」で「自立」した沖縄になるための方法を考えること、学生という社会的に制約がなく自由な立場をいかした学生ならではの提言をすることの二つであった。

その結果としてできたのが「基地を利用した観光産業の振興」というなんとも奇抜なアイデアで

あった。これは米軍の基地の一部を開放してもらうことで基地内ツアーを行ったり、軍用には使わなくなった飛行機を利用して民間人を乗せた遊覧飛行を行うこと、また頻繁に航空ショーやミュージシャンを集めてのフリーコンサートなどのイベントを行うなど、基地がある沖縄だからこそできることであり、現時点であるものを利用できるという点で、考え方によっては非常にリーズナブルな提案であった。

しかし、ともすれば基地との接触が増えてしまい、ますます依存する傾向が強まってしまうという危険性も伴っている。そのため、同時に基地を使わない方向での観光産業の振興も行うこと、例えば外国からの、特に中国や台湾などアジアからの、観光客を増やすことで将来的にはハワイのような世界のリゾートになることも目指していくということでバランスをとることを計った。これら二つの観光振興のためのアイディアは、現実的にみて観光業しか強みがない沖縄が経済的に豊かになるためには、観光のさらなる振興しかないと考えた結果であった。経済的に自立し、豊かになることで、日本とアメリカと対等に交渉できる力を蓄え、その後に基地をなくしていくという、非常に時間がかかると思われるが、段階を踏んで行くことでいずれ必ず達成できるプランであると私たちは考えた。発表の際に基地即時撤廃派の人たちからの反対意見が出ることはある程度覚悟し、その場合は、様々な観点から見ても基地なくしては沖縄の経済は立ち行かないという事実を重視したという点を説明し、理解を促したいと考えていた。

「平和」であること、すなわち基地を持たないこと。「豊か」であること、すなわち経済的にうらおっていること。「自立」していること、すなわち日本本土にもアメリカにも寄りかからずまた利用されない沖縄であること。この三つを主眼に置き「個としての沖縄」のアイデンティティを模索していくための私たちなりの提言が、私たちグループ7の発表であった。

■日米学生会議

沖縄で得たものは何か

社説

基地問題をめぐって、沖縄と本土、米国の三者の間には、依然として認識のギャップがある。三者間のギャップだけでなく、それぞれの内部においても、意見の違いや利害のぶつかり合いがあり、それが基地問題の解決を難しくしている。

とすればいいのか。この難問に日米の学生たちが挑戦した。第五十三回日米学生会議の公開フォーラムが官野両市で開かれ、地元沖縄を含む日米の学生百十四人が十のグループに分かれ、基地問題を中心に、沖縄で学んだ成果を発表した。グループ編成に当たって、出身別にチームを組むのではなく、どのグループにも、それぞれ本土、沖縄、米国の学生を加え、混成チームにした。その配慮は良かったと思う。

さまざま意見が飛び交った中で目立ったのは「持続可能な日米同盟のためには、沖縄の人々の協力が欠かせない」「ユニケーションの欠如が解決を妨げている」という視点だった。「米軍基地に対する住民心理を緩和するため、嘉手納基地を民軍の共同使用にする」「沖縄を多文化都市にして二カ国語教育を進める」

「私にとって基地は職業選択の一つ。基地に働きたい」と語ったのは沖縄側学生である。一定の習得期間を設けた後に、自由に自己決定できるようにする。沖縄は自由な決定権を持つべきだ」と主張したグループもあった。

発表後の、フロアを交えての討議では、地元の高校生や一般参加者から「軍

隊の本質とは何かの議論がない」「ほとんどが基地との共存を前提にしていて」との厳しい指摘があった。耳の痛い話も、地元だから聞けることとして受け止めてほしい、と思う。

討議の中で浮かび上がった考え方の違いを埋めていくのは容易ではないけれども、あるグループが指摘した「公正な正義感をもとにして」という言葉は、大きなヒントになるはずだ。

国際感覚とは、「人権感覚」「道義感覚」「公正な正義感」にほかならない。異なる利害を持ち、文化背景の違う人々が、共通の土俵で対話をするためには、「公正な正義感」を意識的に育て、それに依拠するしかないのである。

「公正な正義感」に照らして沖縄の過去・現在を捉え直せば、基地問題が放置できないことは、はっきりしている。そのことを日米の学生が肌で感じ取り、共有することができたのであれば、沖縄会議の目標は、とうとう達成できた、とうとう達成した。



参加者ノート

今回はご厚意により沖縄フォーラムへ参加し、期間を通じて非常に価値ある時間を過ごせたと実感しています。

第1には、今まで常識のように感じてきた様々な問題の新たな側面について深く考えさせられたという事がありました。特に沖縄固有の問題に対する認識の甘さ(米軍問題等)を実感し、そして改めて認識を高めることができた事は、これから本当に「日本」そして「世界」を考えていかなければならない我々のような世代の人間にとって非常に大きな、まさしく宝とでも云える経験の一つであったと断言できます。

第2には、生活を共にし、同じ経験をする事による参加者同士の一体化、思想の激突による互いの理解、そして純粋に「友達」になったという事実が挙げられます。これら一連の経験はそう簡単に実現するものではありません。ましてや日本の様々な地域、そして米国から集まった民族も地域社会も価値観も違う人々がこの様な機会を得ることは非常に希有なことです。思想の壁、言葉の壁、民族の壁、それらを乗り越え一体化できたという事実は、我々にとってこの上なく貴重な経験であり、これからもそうであり続けるはずで。我々は熱く、時には反目し、そして寄り合い、互いの最善を考え、宥和を見つけたすべく努力するという過程を経験することで、大きく成長したのではないのでしょうか。このように、考えるだけでも多くの実りある経験ができた今回のフォーラムは、私自身にとっても、そしておそらく関わりを持ったすべての人間にとっても極めてよい結果に終わったのではないかと感じています。

最後にこのような素晴らしい機会を提供して下さった日米学生会議実行委員の方々、また多数の支援して下さった方々に対し感謝の意を紙面ではありますが示させて頂き、私の所見とさせていただきます。

(山下雅人・防衛大学校)



寸劇で県民と米軍のコミュニケーション障害を取り上げたグループ=沖縄コンベンションセンター

沖縄フォーラム 基地との共存案提示 本質的な議論がない

日米学生
県内参加者

認識の違いに批判相次ぐ

日本土や米軍、沖縄の大学生が集まって、沖縄の在り方を考える日米学生会議の沖縄学生フォーラム(主催・国際教育振興会)が十一日、宮野湾中の沖縄コンベンションセンターで開かれた。百十四人の学生が十ゲルを分かれて沖縄の基地問題を解決する案などを発表。基地といかに共存するかという発表が多数を占めた。一方、高校生を中心とした約百人の県民が参加した傍聴席からは「沖縄の人の気持ちが理解されていない」などの批判が相次いだ。

日米の学生は九日に来県。沖縄の学生も加わり、米軍基地やガマ、平和記念資料館などを視察しながら、各グループごとにフォーラムの発表に取り組んできた。

発表では「県民と米軍のコミュニケーション改善のためにホームステイや基地内通行」や「磁手納基地やホワイトビーチを軍民共用化、テーマパーク建設での観光客誘致」などの提案があった。

傍聴席の意見を問う場面で、那覇西高の城間悠子さん(一八)は「基地は構造的暴力。本質的なことが議論されていない」と反論。フォーラム後、「三振興会」が十一日、宮野湾中の沖縄コンベンションセンターで開かれた。でも百十四人の学生が十ゲルを分かれて沖縄の基地問題を解決する案などを発表。基地といかに共存するかという発表が多数を占めた。一方、高校生を中心とした約百人の県民が参加した傍聴席からは「沖縄の人の気持ちが理解されていない」などの批判が相次いだ。

「これまで米軍のテレビの視点で沖縄の基地問題を見てきた」というジョージ・ワシントン大学のロビンソンさん(二〇)が初めて沖縄の人の気持ちが分かった。米国人としての私の気持ちは複雑だが、多くの米国人が沖縄の気持ちを知らないことが重要」と強調した。

沖縄タイムス 2001年8月12日付

基地と共存を 共用して活用

日米学生会議 フォーラムで論議

第五十三回日米学生会議沖繩フォーラム（主催・国際教育振興会）最終日は十一日、沖繩コンベンションセンターで日米の大学生百十二人による公開フォーラムが行われた。フォーラムは十人前後のグループごとに発表。在沖米軍の存在意義や経済効果を評価する立場から、基地との共存を目指す意見が出る一方、沖繩の経済的發展のために基地の重民共用や縮小が主張されるなど、多様な意見が交わされた。共存を目指すグループは、東アジアの安定には在沖米軍が必要として「県民にも理解を求めるべきだ」と指摘。そのための障害は、互いのコミュニケーション不足だ、として、市民レベルでの基地関係者との交流促進を求めた。さらに米国内でも沖繩問題への関心を高めるため、NGO（非政府組織）などを活用した米国世論の喚起を訴えた。基地縮小を訴えたグループは嘉手納基地を共用化し、ハブ空港として観光産業に活用することを提案。また米国の大学生の一人は「現在の基地従業員の雇用形態は沖縄県民が望んでいるものではない」と基地に代わる雇用創出を考えるべきだとした。

琉球新報 2001年8月12日付

参加者ノート

今回このフォーラムには、参加者という立場だけでなく、企画する側としても関わる事ができた。6月に、数名のメンバーと共に沖繩に赴き、様々な人に会い、御協力をお願いする事から始まった。今回僕は、その中でも特に、高校の修学旅行で経験のあった、平和学習を企画した。

企画の段階から苦労は様々あったが、実行するとなると、時間や人数による問題も発生し、その中で進めていくのは大変だった。・・・このフォーラムに関しての苦労話、また反省点をあげたらキリがない程出てくる。それだけ自分にとって、企画段階からいい経験だったし、学び取る事も非常に多かった。

しかし今ここで言いたいのは、それをいろいろな面から支えてくれた方々への感謝の気持ちだ。平和学習を企画するにあたってイロイロ助けて下さった、母校の桜美林中高の諸先生方、実際にガイドして下さい、事前に相談にも快く応じて下さった沖繩平和ネットワークの皆様、お忙しい中講師としておつきあい下さった読谷村の小橋川先生、全面的に僕らをサポートして下さいました園さん、県庁の方々、そしてこの企画に参加・協力してくれた学生の皆さん、まだまだここに書ききれないが、それだけ多くの人が力を貸してくれた事に心から御礼を申し上げます。

正にうちなーんちゅ（沖繩人）のゆいまーる（助け合い）の精神で協力してくれた。特に学生は、いちゃりばちよーでー（出会えば兄弟）を口にして、昨日今日に知り合ったのではないくらいに接してくれ、ちょっとでーげー（いいかげん）なところもあったけど、でーじ（とても）いい人達だった。いい人達、というか、イイ奴らって感じかな。

今回の日米学生会議の中で、自分の得たもの、苦楽、反省、思い出、そのほとんどが沖繩に集約されている。それだけいい経験であったし、かけがえのない様々なものを得る事ができた。最後にもう一度、フォーラムの参加者、日米学生会議の参加者、そしてこの企画のために力を貸して下さいました全ての方々へ心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

（佐々木淳・青山学院大学）



グループ 8

岡本紘明、宇佐美友加、後藤将、Brian Ruh、Parima Damrithamanij、
Jaime Muscar、山城和豊、上原未和、宮城征彦、北松円香

“From three perspectives: JAPAN, OKINAWA and US”

我々は、日米学生会議が沖縄において外部の学生とフォーラムを開催するという機会を活かして、沖縄の学生が日本政府、米国の学生が沖縄県民、日本の学生が米国政府の立場に立ち、在沖縄米軍基地に関する3者間ディベートを行った。

【日本政府の主張（沖縄人デリゲートによる）】米軍基地は、日米安全保障条約を基軸とし、日本、ひいてはアジアの秩序維持に必要不可欠のものであり、沖縄にのみ存在するものではない。また、雇用をはじめとする米軍基地の経済効果は大きい。日本政府としても沖縄開発庁を置き沖縄の発展に全力を尽くしている。

【沖縄の主張（米国人デリゲートによる）】実際の統計的数字を見てみても、本来ならば日本全体で負担すべき、公共の安全を保障する米軍基地が沖縄に極めて集中している。米軍人の素行についても、少女暴行事件やシングルマザーの問題など、社会生活における問題の原因となっている。

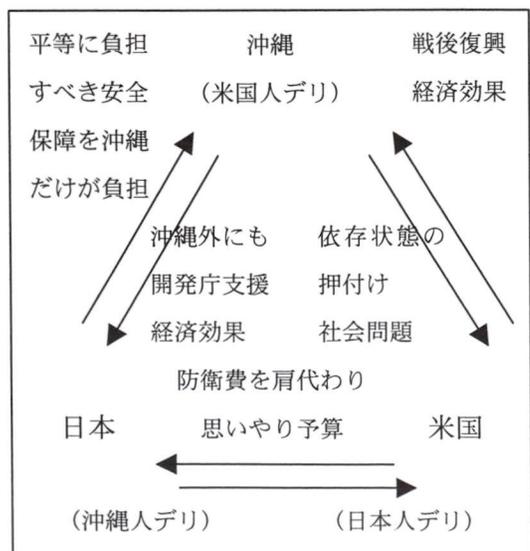
【米国政府の主張（日本人デリゲートによる）】沖縄に対しては、雇用を中心とする沖縄の経済への貢献を指摘したい。戦後の沖縄を救ったのは米軍基地であり、また事実、72年の本土復帰に際しては日本人解雇が社会問題化した。日本政府に対しては、本来日本が担うべき国家の安全保障を我々が肩代わりしている点を指摘する。防衛には莫大な費用が必要であるが、それを戦後ずっと我々が担っているのである。

【沖縄の反論（米国人デリゲートによる）】米国政府は、米軍基地は沖縄経済に貢献していると主張するが、この沖縄の米軍基地依存状態は米軍基地があるために作り出されたものであり、沖縄が経済的に自立するためにも米軍基地の撤退は不可欠である。

【日本政府の反論（沖縄人デリゲートによる）】米国政府は防衛費を肩代わりしていると言うが、実際日本は多額の思いやり予算を与えている。また沖縄という場所については、地理的な戦略的優位性を考慮し、米国との相談の中で決めているものである。

我々はフォーラムでの話し合いを通じ、米国人は沖縄に対する深い知識が不足していたり、また日本人は経済効果など抽象的な視点から、沖縄人はもっと身近な問題から基地問題を考えるとといった視点の違いを感じた。この経験を通じ、コミュニケーションの必要性を痛感した。

最後に、コメンテーターから、より将来に向けての具体的な提案がなされた方が良かったという指摘を頂いた。





グループ9

藤井康次郎、中川由紀、Edwin Ng

Neil Broadley、Ann Moore

Amy Jones、大城優美乃、新垣智子

金城亜希子、仲村渠智、山口由紀子

コミュニケーションを問うー持続可能な日米同盟へ向けてー
イントロダクション

アジア地域の平和、秩序を達成していくための要、それが日米同盟であり、日米安全保障条約である。この平和と秩序を通じて、日本、アメリカ両国の市民は安定的経済活動、文化の交流を達成している。日米同盟が変わる、有効かつ実効的な安全保障体制への展望はいまだ明確になっていないことをかんがみるならば、21世紀初頭の政策を考えるにあたり、われわれが取り組まねばならないのは、持続可能な日米同盟を構築していくことである。

そのために欠かせないのが、沖縄の人々の協力であり、理解である。半世紀以上にもわたる日米安全保障体制は沖縄の人々の苦難と犠牲の上で成立してきた。そして、度重なる米兵の犯罪、事故、騒音公害に沖縄の市民の怒りはマグマのように蓄積している。持続可能な日米同盟を達成していくためにも、このような市民の怒りを日米両国政府、市民は真剣に受け止め、公正な正義感覚に基づき、基地問題の改善に向け継続的努力をしていかななくてはならない。沖縄における人間の安全保障の達成、日米地位協定の改正、基地の集中の軽減などが目指されるべき目標となるだろう。

こうした目標を達成していく上での前提として、われわれは3つのコミュニケーションの軸に注目した。すなわち、「基地ー沖縄」、「本土ー沖縄」、「米国ー沖縄」のコミュニケーションである。これら3本のコミュニケーションを促進していくことこそが基地問題の改善を図る上での第一歩となるのではないか。

米軍基地と沖縄のコミュニケーションについて

米軍基地と沖縄の住民の関係について考えるとき、両者の歩み寄れない大きな溝は、まず双方のコミュニケーション不足が引き起こしているものだと考えられる。そこで、その溝を埋めるためにも、市民レベルでの日米交流活動促進を以下に提案する。まずは、現段階ではほとんどみられない、子供同士の交流をはじめめることを提案する。

- ・基地内の学校と沖縄の学校との文化交流（合同平和学習なども含む）
- ・基地内の学校と沖縄の学校とのスポーツ交流（対抗戦、運動会等など）
- ・基地内と学校と沖縄の小学校、中学校、高校、すべての段階での交換留学

子供を通して、親同士の、日米双方のコミュニケーション増加が考えられる。また、その子供たちが大人になったとき、沖縄における基地問題解決の大きな力となり得る。

次に、既存のコミュニケーションの強化を提案する。沖縄市民が、基地内で講演を行うなどして米



兵の啓蒙に努め、また、米兵によるボランティア活動などを充実させることにより、米軍基地問題の緊張を緩和させることができるのではないか。

日本本土と沖縄のコミュニケーションについて

沖縄―本土関係は今後米軍基地の本土への移設の可能性も考えられることから、極めて重要である。しかし、ここにもやはりコミュニケーションバリアが存在しており、米軍基地をめぐる本土対沖縄という国内対立を生じさせ、持続可能な日米同盟の構築を阻んでいる。本土の人々はメディアなどを通じて沖縄についての情報を間接的には得ているものの、本当の意味で沖縄との相互理解が図れているとは言えない。そこで、私たちは一人一人の真の理解を勝ち取っていくために、教育と観光という視点からコミュニケーションバリアに挑戦したいと考えた。

まず、教育ではアメリカ国内で行われているような *domestic exchange* (国内留学) を実施し、本土と沖縄の大学間での交流をより活発化することを提案する。また、短期間の学生会議・交流プログラムも多数導入することによって、相互理解が成され、基地問題に取り組むにあたっての共通の認識基盤を形成する。

沖縄への観光客の98%が本土からであることを考えると、観光もまたコミュニケーションバリアの解消に有効であると言える。平和記念博物館を沖縄戦の悲劇性を訴えることに留まるのみならず、基地問題の現状を伝える展示を行うなど、暴力のない本当の平和の重要性を発信していく場としてはどうだろうか。さらには、本土の人間だけでなく、世界の人々にも届くメッセージとするために、複数言語での展示も検討すべきである。こうすることによって、沖縄はより深い魅力を獲得し、人々の心に訴えかける力を獲得することができるだろう。

米国と沖縄のコミュニケーションについて

沖縄の基地における内部的な基本政策および、沖縄の基地問題に大きな影響を与える東アジアの安全保障体制を策定しているのは米国本土のアメリカ政府である。沖縄の現状や、沖縄市民の思いを米国市民に訴えかけていき、沖縄問題に関する米国市民の認識を深めていくことも有用であると考えられる。米国市民が直接に米国政府に働きかけることによって、基地問題の改善を図ることができるからである。アメラジアンの問題や、米兵の教育プログラムの質を改善していく上で特に有効であると考えられる。

そのために考えることのできる具体策としては、沖縄市民と米国市民からなるNGOを立ち上げること、既存のネットワークやNGO、国際的な平和団体を活用すること、米国本土に沖縄に関する移動博物館や沖縄の子供代表を派遣することなどが考えられる。

これらの具体案は、アメリカにおけるロビー活動や、啓蒙活動、マスメディアへのアクセスなどを可能として、中長期的な視点で見れば、沖縄における基地問題の改善に大きく役立つといえるだろう。

総括

われわれは沖縄の基地問題を考える上で、コミュニケーションの問題に着目をした。それは、本土の学生、アメリカの学生、沖縄の学生がともに沖縄において3日間活動していく中でコミュニケーションの問題が重要であると実感したからである。有効なコミュニケーションは異なる集団がひとつの問題に向き合い、問題解決へ向け活動をはじめの前提を為すのである。

グループ10

佐々木淳、坂江裕美、荒木龍、菊池端夫

Tina Chen、Laticco Robinson、Sophia Kan、

儀間新吾、山城愛子、海瀬頭麗圭、白井陽太郎、



地域活性化と経済発展を通しての米軍基地との共存

現在の沖縄が抱える問題を考慮した上で、これにどのように向き合い、これを踏まえた上で、沖縄の発展をどのように考えるべきか、若い世代、特に Student Forum に集まった学生として出せる意見を具体的に示そうというグループ内でのテーマを設け、議論を重ねた。

※地域活性化

* シンクタンクや専門の調査機関の設立

沖縄が直面する諸問題の研究を行い、その解決法を提示する。

県や政府の政策決定過程に影響を与える政策を提言する。

その研究内容として・・・

代替エネルギー、自然環境保護、エコツーリズム、公共交通システム等

* 地域活性化を目的とした公共プログラム

- ・ 教育 奨学金制度、ユースセンター設立等
- ・ 伝統芸能保護 後継者育成と経済支援、口承伝統の収録とデータベース作成
- ・ 福祉 地域の NPO 支援、老人介護サービスの拡充

* 米軍基地に対する住民心理の緩和

- ・ 基地内通行の自由化
- ・ 住民どうしの交流活性化

※ 経済発展

- ・ 軍事的に地理的条件が有利と言われる沖縄に、アジアのハブ空港を建設する。
嘉手納基地の民軍共用化
- ・ その空港の周りに、沖縄の歴史・伝統を理念に置いたテーマパークを建設する。
ショッピングエリア、ホテル、カジノ、アミューズメントパーク等
- ・ 公共交通の整備（鉄道の建設）
嘉手納を経由する那覇 名護間、読谷村（嘉手納基地） ホワイトビーチ間
- ・ ホワイトビーチの民軍共用
大型クルーズ船の就航
- ・ 平和博物館の建設

これらを建設した嘉手納基地周辺に、平和博物館を建設する。

共同使用とは、平和の上に成り立つし、戦時中の沖縄の記憶は忘れてはいけない。

You may say I'm a dreamer, but I'm not the only one... (a theme park in Okinawa) and the world can be as one.



参加者ノート

今夏、日米学生会議沖縄フォーラムに参加して、今までとは違った視点から沖縄の基地問題を見ることが出来た。私たちは学校の特性から沖縄の基地については安全保障の観点から考えることが多い。しかしながら今回のフォーラムにおいては、基地のもたらす経済的な効果、社会問題などが主要な論点であり、また最終日の公開フォーラムに参加するまでは沖縄において頻発している米軍兵士の犯罪、地位協定問題等については知っていたものの、実際にそれらの問題に対する地元住民の生の声を聞いたことはなかった。このフォーラムを通じて、これらの問題は沖縄の人々にとって想像以上にセンシティブな問題であることを理解することができたとし、また沖縄県民だけの問題なのではなく、日本の問題であることも認識できた。

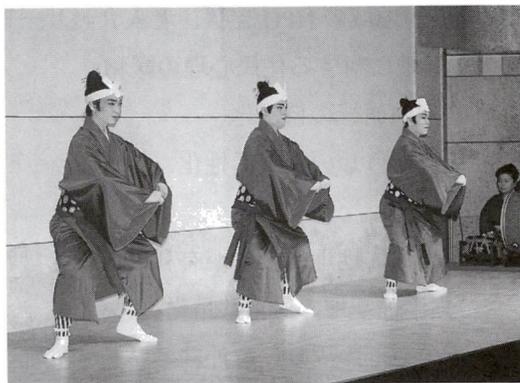
しかしながら残念であったのは沖縄の基地問題、特に基地の存続に関する議論の中では犯罪などの社会問題ばかりが取り上げられて、肝心の安全保障の問題がほとんどといっていいほど出てこなかったことである。基地の弊害ばかりが取り上げられて、沖縄の米軍基地の存在が東アジア地域の安全保障に大きく貢献していることが、あまりにも論議されていなかった。それは中台紛争に対する抑止効果、尖閣諸島問題、東シナ海に進出する中国海軍に対する抑止など様々なものがあるが社会問題と同時にこのような安全保障上の問題ももっと論議されるべきであるだろう。

フォーラムの冒頭で、稲峰知事が「沖縄における数々の米軍基地問題が沖縄だけの問題ではなく、日本の問題であることを認識するべきである」と述べた通り、より多くの本土の人々も、これらの社会問題を認識すると同様に、沖縄の人々も米軍基地問題を沖縄の社会問題から考えるだけでなく、日本の安全保障の観点からも考えるべきだと思う。

(佐藤太郎・防衛大学校)

● レセプション

フォーラム後、来場者との交流と優秀な提言をしたグループの表彰を兼ねてレセプションを行った。そこでは沖縄県立芸術大学の学生たちにボランティアで琉球舞踊を披露していただいた。



● ホームステイプログラム

学生会議参加者と学生フォーラム参加者希望者のうち、日本側参加者は米軍基地内の家庭、アメリカ側参加者は沖縄市民の家庭にホームステイした。一泊というきわめて短い間ではあったが、集団を離れて全く異なる環境でもてなしを受け、各参加者は純粋に交流を楽しんだようだ。

参加者ノート

～嘉手納基地におけるホームステイ～

私達日米学生会議一行は京都、広島を経て8月7日に沖縄入りをした。沖縄では実際に嘉手納基地内を訪れ、沖縄戦に関する史跡や博物館を見学し、この経験をもとに沖縄と基地問題に関する議論を重ねていった。そして、議論の成果発表の場である沖縄フォーラムを経て、8月11日、幸運なことに私達は沖縄に駐留する米国軍人の家庭に1泊2日でホームステイをする機会を与えられた。

私がホームステイをさせていただいたのは、主が嘉手納基地内において米軍情報機器関係の仕事に従事するMayfield一家であった。家族構成は、夫婦と10代の子供3人（長女は米国滞在）の5人家族であり、到着した夜は自家製のハンバーガーでもてなしてくれた。食後は近くの小中学校を散歩がてら案内してもらい、夜は家族でテーブルゲームをして過ごした。非常に愛情に満ちたあたたかな家庭であった。

しかし、私の目を一番ひいたのは彼らが使用する家庭用品であった。それらは、テレビや冷蔵庫のようなものからシャンプーや歯磨き粉のようなものに至るまですべて基地内のストアで購入した米国製品であったのだ。食料品のようなものはまだしも、他の生活用品に関しては近隣で購入しても問題はないのではなから疑問を感じた。

もちろんそれらは強制的に行われているのではない。どれだけ米軍が地域住民と交流を深めたいかという積極性に関わるものだ。日用品を共有することは異文化理解の第一歩であり、異なるコミュニティへの融和には必要不可欠なことであると思う。米軍は地域住民と親密なコミュニケーションを図ることを公然と主張しており、積極的な姿勢を示しているように思えた。しかし、実際にはそれほど積極的ではなく、ある意味否定的であるようにも感じた。これは、もしかすると駐留地に対して過度な愛着心や同情心をもたせないようにする一般的な軍隊の方針によるものかもしれない。そう考えると、そのような情景が一瞬垣間見れたような気がして非常に興味深かった。

(石川一郎・慶應義塾大学)

サイトコーディネーター後記

沖縄サイトとはなんだったか

沖縄サイトコーディネーター 織田健太郎

長い日米学生会議の歴史の中で、これほど両国にとって重要で深く関係のある土地でありながら、沖縄で会議が開かれたことは今までたったの一度しかなかった。問題の起源を常に日本の国家政策と日米関係ならびに日米安保という国際秩序に持ちながら、戦後から今まで議論されてきた「沖縄問題」という言説は、単にひとつの地域的問題を表象しているに過ぎないというのが私のかねてからの印象であった。日本本土と米国における沖縄問題に対する無知と無関心はその一つの現れであるといえよう。日米両国の国民が、両国関係という秩序の恩恵を受け、それを維持していく過程においてこの問題が見過ごされている現実はその自体として大きな問題である。

しかしながら、これが歴史に基づいた多分に感情的な問題であるため、政治の場では本音が見えず、一般論という平行線で議論が膠着してしまうというのも事実である。議論を前に運ぶにはここに新しい流れを吹き込まねばな



らない。まさにその役割が第 53 回日米学生会議の理念「相互理解と『力』の獲得」の目指すところのものであった。我々が沖縄で会議を開催した背景には、日米の沖縄への理解を比較的立場の自由な学生が率先して促進しているという意図があった。

我々の沖縄での活動がどういった意味で新しい取り組みだったかは、沖縄報告の冒頭で述べたのでここでは触れないが、われわれ「現在の学生」というひとつの世代が出した結論や認識の内容は、それが本土・沖縄・米国という三者の視点を止揚したという意味において、沖縄問題における新しい議論方法の新規的实践モデルとなり、重要な価値を持つであろう。

一方、旅行では見られない沖縄を知るといふサイトの理念は、沖縄のさまざまな地元の方々との対話と交流を通して実現された。それは、地元の学生たちであり、基地で働く方々であり、大学関係者、ボランティア協力者、フォーラム来場者の方々であった。そこから生の沖縄を感じ、衝撃と感動を参加者それぞれが強く覚えた。それは沖縄を伝えようとする地元の方々の情熱と沖縄を知ろうとする熱意の下にできた「沖縄サイト」というひとつの作品、いやそれ以上に有機的な結果の形であったように思えるのである。

このサイトを通じ、問題や摩擦の間には必ず異なる認識と意見が存在し、それを尊重しあうことから解決の道が生まれるということに参加者各人が認識したはずである。そして、地元の方々とのふれあい、学生同士の共同作業において生まれた感動の共有は確実に相互理解へのステップとなったはずである。全国、全米から集まった学生が沖縄での経験と「沖縄の視点」をそれぞれ持ち帰り、将来に活かすことができればこのサイトは輝かしい成功を収めたことになるであろう。

一年間の準備活動を通じて、我々の理念に共感し惜しみなく協力して下さった、NPO をはじめとする地元の方々やボランティア協力者の方々、熱心に会議開催運営を支えてくれた地元学生、言語の差を埋めようと必死で通訳してくれた日本側参加者、そしてなにより睡眠を削って共同作業で沖縄サイトを作り上げた沖縄サイトスタッフのみんなには、心から感謝の気持ちを込めてお礼を言いたい。先例なく大規模で内容の濃かったこのサイトは、こうした献身的活動による共同作業の成果であった。

* 同時通訳ボランティア 鶴田知佳子様 村田久美子様

今回フォーラムでは参加者の母親である鶴田様と当会議 OG である村田様に日英の同時通訳をボランティアで引き受けていただいたお陰で、二ヶ国語でのスムーズな国際会議運営ができた。

以下は通訳者プロフィール。

➡ 鶴田知佳子

上智大学外国語学部フランス語学科卒業。コロンビア大学経営学大学院卒業、経営学修士 (MBA)。6 年間イタリア、ミラノ在住、イタリア語にも精通。10 年ほどの金融機関勤務を経て、1999 年より目白大学助教授。日本通訳学会理事 (通訳教育分科会担当)。NHK 衛星放送通訳者、CNN ニュース同時通訳者、会議通訳者。

➡ 村田久美子

上智大学外国語学部卒。第 36 回 JASC 参加。フルプライム奨学生としてダートマス大学経営大学院卒、MBA。モルガン・スタンレー証券会社、プライスウォーターハウスコンサルタント勤務を経て、現在、寺澤総合研究所にて寺澤芳男東京スター銀行会長の執筆・講演活動を補佐

東京サイト

東京サイトコーディネーター：三田重恭

Chinazor Ojinnaka

● 東京サイトスケジュール（滞在期間：8月13日～23日）

- | | |
|-------|---|
| 8月13日 | 沖縄より到着
参加者有志による「ジェンダーとセクシュアリティ」のディスカッション |
| 8月14日 | 分科会#8
分科会フィールドトリップ
スペシャルトピック#7「安全保障」 |
| 8月15日 | 分科会#9、分科会#10 |
| 8月16日 | 会議総括 |
| 8月17日 | フォーラム準備 |
| 8月18日 | 東京フォーラム |
| 8月19日 | 東京 DAY |
| 8月20日 | 新実行委員選挙
FREE / 新実行委員ミーティング |
| 8月21日 | FREE / 新実行委員ミーティング
外務省レセプション |
| 8月22日 | FREE / 新実行委員ミーティング
閉会式 |
| 8月23日 | アメリカ側参加者帰国 |

● 東京サイトスタッフ

荒木龍、入江芙美、伊藤公一朗、後藤将、三田重恭*、Edwin Ng

（*はサイトコーディネーターを指す）



● 東京サイトの理念

東京は、日本の政治、経済、情報など様々な分野の中心地であると共に国際関係において重要な役割を果たしている。この東京においては企業、政府機関、国際機関、大学などへの実地研修を行い、分科会の議論の質を高めていき、東京フォーラムにおける分科会報告に向け集中的に準備を行うために設けたサイトである。

また最終会議開催地である東京では京都での会議開会から、広島における「平和への誓い」プログラム、さらには沖縄における「Student Forum in Okinawa 2001」などを振り返る場所である。日米学生会議参加者内でのインターアクション、さらに様々な土地における様々な人とのインターアクションをとおし学んだことや感じたことを振り返り、日米学生会議から学んだものや感じたものを消化していく作業を行う。それらの作業を通じ、日米学生会議の意義というものを参加者各自が考え直す機会でもある。

以上の作業を行い、それらを発表する場が東京フォーラムであり、一ヶ月間におよぶ会議を振り返り、消化し、社会に発信していくことが東京サイトの意義である。

● 東京フォーラムまでの活動

■ 「ジェンダーとセクシュアリティ」についてのディスカッション

一部の参加者が自発的に企画を行い、「ジェンダーとセクシュアリティ」についてのディスカッションが行われた。ディスカッションは自由な形式で進められ、男女間・日米間のジェンダーについての疑問などが挙げられ、日米間の文化的な認識の違いなどについて討論することができた。

■ 会議リフレクション（8月16日）

大半のスケジュールを終え、二度目のリフレクションミーティングをおこなった。はじめに日米参加者でわかれ、その後に合同セッションを行い、会議をふりかえった。自らの反省や63人の集団としての反省、会議を通じて抱いた気持ちなどそれぞれに発言した。「日米参加者間の交流が足りなかった」「勉強会や講演会の後に参加者同士でもっと議論と消化をするべきだった」といった率直な思いが出され、時間の使い方や会議終盤での参加者の態度などについても積極的に話し合われた。

■ フォーラム準備（8月16日、17日）

リフレクションミーティング後、フォーラム準備をはじめた。東京フォーラムでは分科会のほかに各サイトの報告、そして歴史認識に関するパネルディスカッションがあったが、準備時間においては、参加者が京都、広島、沖縄、東京の各サイトとパネルディスカッションの五組に分かれた。この準備では、発表の内容や形式をグループごとに考えた。

● 東京フォーラム

● 目的

第53回日米学生会議は『グローバル化社会における日米双方の可能性の探求～相互理解と「力」の獲得』という総合テーマを掲げ、約1ヶ月の間、京都、広島、沖縄、東京の各サイトを巡り、各地における様々なイベントやそれぞれの分科会において議論、交流を重ねてきた。その成果を広く社会に発信する場としてこの東京フォーラムを開催した。

第1部では北岡教授の基調講演、各分科会における成果発表、各サイトにおける活動報告を通して、総合テーマに対する答えを模索した。

また、第2部では、歴史認識という繊細なトピックについて、教授、日本側学生（シンガポールからの留学生を含む）、アメリカ側学生の間でパネルディスカッションを行うこと、及び来場者とのインターアクトを通して、日米、そして日米を超える枠での相互理解を目指した。

最後に、第3部においては、日米学生会議参加者、講師の方、OB・OGの方々、来場者の方、そして様々な形で支援して下さった方々との交流会を設け、第53回日米学生会議を総括した。

● 当日の流れ

13:00 開会

<第1部>13:00～16:00 「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」

- ◇ 基調講演 講師：北岡伸一氏（東京大学法学部教授・日本政治外交史）
- ◇ 分科会による成果発表
【通商政策、ビジネス、異文化間問題、情報技術（IT）、人間の安全保障、民族問題、マスメディア】
- ◇ 各サイトにおける活動報告
【京都、広島、沖縄、東京】

<第2部>16:10～17:40 「未来を構想する歴史認識」

- ◇ パネルディスカッション
パネリスト：藤原帰一氏（東京大学法学部教授）
Steven Fuchs（State University of New York at Stony Brook）
Ng Yook Meng（京都大学経済学部経済学科3年）
夫馬賢治（東京大学教養学部総合社会化学科国際関係論3年）
- 司会：藤井康次郎（東京大学法学部3年）

- ◇ 質疑応答

<第3部>17:40～ 「第53回日米学生会議総括」

- ◇ 第53回日米学生会議総括
- ◇ 第53回日米学生会議参加者と来場者との交流会



● 北岡伸一氏による基調講演

「グローバル化社会における日米双方の可能性の探求」

1. はじめに

私は歴史が専門なので、歴史を見直すところから、今日の課題を考えてみる。日米関係の歴史は、しばしば力——経済力とか軍事力とか——の次元で論じられる。アメリカの圧倒的優位とか、日本がアメリカに追いついてきて、アメリカの態度が厳しくなったなどといった議論はこうした傾向を示唆している。しかし、日米関係を理念の側面から考察することが、より重要である。この側面から、グローバル化時代における日米関係のあり方について考えたい。

2. 門戸開放原則の提唱

今日講演のテーマとしたいのは、門戸開放という理念(open door)である。ペリー来航も背景に門戸開放の主張があった。自由な通商という理想はアメリカとともに古いのである。グローバリゼーションの根底にもこのような門戸開放、自由な通商、という理念が横たわっている。1899年、アメリカは中国に向けてこうした理念を打ち出した。当時、中国の植民地化——勢力圏 sphere of interest への分割が進んでいた。アメリカは、勢力圏はやむをえないが、その中での通商は各国とも同じ待遇にしよう、つまりロシアの勢力圏でもロシア製品を関税や運賃で優遇しないようにしよう、という提案をした。そうすれば、勢力圏がそれ以上閉鎖的にならず、中国の植民地化にはブレーキがかかる、と期待された。翌1900年、アメリカは二度目の通牒を送って、中国の領土的行政的保全(territorial and administrative integrity)、つまり領土の分割や、行政の一部を外国が抑えてしまう(たとえば関税とか郵便とか鉄道とか)ことはやめよう、と提案した。これは全面的に立派な原則だと言うわけではない。なぜならば、アメリカは中国への進出で立ち遅れていたため、分割に反対し、勢力圏の中で貿易をすることはまずなによりもアメリカの国益にかなっていたからである。しかし、建前は立派なので、どの国も反対しにくかった。日露戦争において重要だったのはこの原則であるといえる。日米英対ロシア、ドイツ、フランス(三国干渉の国)はまさに門戸開放原則を巡る対立軸でもあったのである。その後、日米関係が悪化することになる。それは日本の台頭をアメリカが恐れたという面もあるが、より重要なのは、満州権益の囲い込みを狙い、日本が門戸閉鎖の側に回ったという事実である。



講演をされる北岡伸一氏



講演を聴くフォーラム来場者

3. 東亜新秩序と大東亜共栄圏

日本は日露戦後、ロシアなどと接近して、満州権益の確立に努めた。しかし第一次大戦後、アメリカの力が圧倒的になると、ワシントン会議（1921～22）で門戸開放の原則が確立された。ここにおける門戸開放とは、帝国主義権益の保持自体はやめないが、権益をこれ以上強化はしない、という合意である。1920年代、門戸開放原則はおおむね守られた。しかし31年の満州事変から事態はかわり、37年、日中戦争が勃発した。理念の側面に着目するならば、1938年、日本は東亜新秩序ということ理念を国際社会において提起した。そして、のちにそれは、大東亜共栄圏という理念に発展した。ここでは、欧米からアジアを解放すると主張された。しかしそれは建前で、実態は欧米勢力の排除に加え、日本の優越・支配を意味するものであった。アジアにおける戦争は中国ナショナリズム対日本の帝国主義という争いになり、それに日本が負けたということである。その意味では、実はイギリスやオランダも敗者といえる。日本も実は戦争が激しくなると、アジア諸国の地位をそれまでよりは認めるようになる。その意味でもナショナリズムが帝国主義に勝ったといえる。これこそが太平洋戦争の本当の争点である。

4. 戦後

戦後はどのようになったであろうか。日本は帝国主義を放棄し、自由貿易にコミットし、そして経済大国になった。80年代半ば、日本の経済力がアメリカを圧倒しているように見えたとき、アメリカでは「本当に勝ったのはどちらだったのか」、という批判があった。しかしそれは明らかである。真の勝利者は、一つはナショナリズムであり、もう一つは自由貿易主義だった。太平洋戦争をまたぐ国際社会の変動を、理念の側面で捉えると以上のような構図が見えてくるのである。今日においては、ナショナリズムという問題は、植民地からの独立という点ではもはや解決した。あとは自由貿易主義が重要である。経済の弱体化が懸念された1970～80年代、アメリカはかなり保護主義的であった。1990年代の日本の不況も同じような問題点をはらんだものといえる。冷戦で明らかになったのは、統制経済 *command economy* の敗北である。しかし日本はその経済社会の中に、まだ多くの統制の要素を残している。自動車や家電などの分野では統制はないといえ、そのためこれらの分野で日本は勝者たりえた。しかし金融、建設、農業など、多くの分野ではいまだ多くの統制がみられ、保護主義的であるといえる。

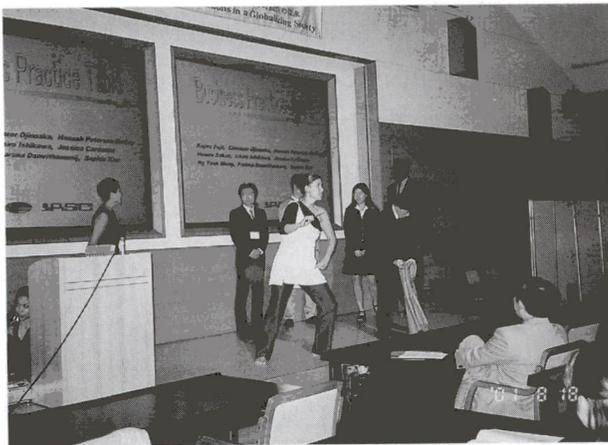
5. 今後の展望

今後日本は、もっと自由を推し進めていかななくてはならない。今後の展望を考える上で第一原則とされるべきは、自由である。第二は、アジアとの友好であり、第三は、地球規模での貢献、そして第四に、文化の多様性の保持を挙げたい。日米安保は日本の安全だけが目的ではない。自由な政治経済こそが真に維持、発展させられるべきものなのである。自由のためには安全が必要なのである。しばしば懸念されているが、私は必ずしもグローバリゼーションが進展していく中でも、世界は一色になってしまわない、と考える。日本の文化はそんなに弱いものではない。生物多様性条約と同じように、文化の多様性は人類の財産であり、文化の再生産には力を入れる必要がある。アメリカと文化において異質な日本が、自由という共通の理念のもと緊密な関係を持つことはとても重要である。アメリカとイギリスが連帯するのはあたりまえといえる。異質なアメリカと日本が結びつくからこそ意義深いのである。



各分科会による成果発表

各分科会は一ヶ月間の議論を踏まえ、その成果をプレゼンテーションや提言という形で提示した。スキット（寸劇）形式を取り入れたり、来場者を巻き込んだりなど、会場を沸かせるような工夫を凝らした発表形式をとったグループもあり、また総じて、その提言内容は学生らしい柔軟で新鮮なものであった。



「人間の安全保障」分科会による発表



「ビジネス」分科会による発表

各サイトによる活動報告

各サイトによる活動報告では、パワーポイントや写真を用いて、各地で行われたイベントの様様を紹介し、そこにおいて行われた議論や交流の様子を来場者に伝えた。



京都サイトの発表

● 第二部 パネルディスカッション「未来を構想する歴史認識」

● 理念

歴史とは過去のものであるかもしれないが、歴史認識は現在のものである。そして歴史認識は、国の政策から個人人の活動に至るまで、さまざまな影響を与えていくことで、未来を創り上げる一端を担うものである。第53回日米学生会議は、異なる歴史認識が鋭く衝突する場である、広島、沖縄を訪れ、未来の構築について考えてきた。このような経験の総括への契機として、さらにはそうした経験から得た知見を交換し、批判し、鍛える場として、本会議は東京フォーラムにてパネルディスカッション「未来を構想する歴史認識」を企画、開催した。講師兼パネリストとして「戦争を記憶する」の著者である藤原帰一教授をお招きした。

● パネリスト（敬称略）

藤原 帰一	（講師）	東京大学法学部教授・国際政治
夫馬 賢治		東京大学教養学部総合社会科学科国際関係論
Ng Yook Meng		京都大学経済学部経済学科
Brian Cathcart		Tufts University, Japanese & Asian Culture
Steven Fuchs		State Univ. of New York at Stony Brook, History
藤井 康次郎	（司会）	東京大学法学部私法学科



パネリストたち

● パネリスト発言要旨

◆ 藤原帰一氏

戦争を記憶せねばならないという言説は誰から、そしてどこからやってくるのであろうか。戦争に関する記憶には以下の特質が見られる。1. 戦争に関する記憶は確かに大きな影響力をもつ。時には国際政治の争点になることもある。2. 記憶にはさまざまなものがある。同じ事に関する記憶にもさまざまなものがある一方で、当事者は自分達の正しいと考える記憶こそが唯一のものであると捉

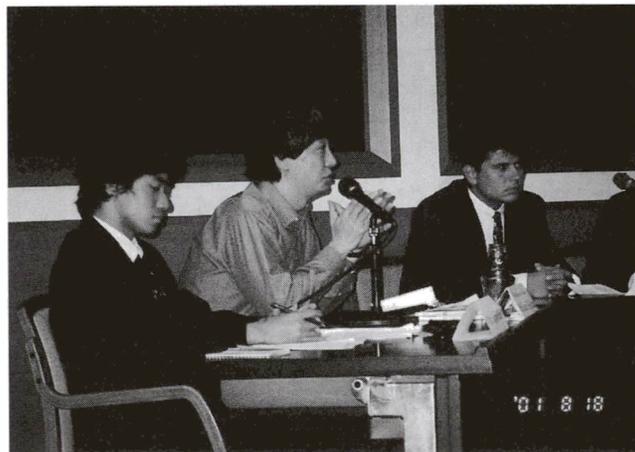


えがちである。3. 戦争に関する記憶は時とともに変化するものである。

冷戦終了後に戦争に関する記憶は一定の役割を果たすものであると期待されている。それは、人々が戦争を記憶することにより、戦争をしないという規範を内在化し、結果として戦争に関する記憶が戦争に対する抑止力となることである。しかしながら、そうした役割が期待される一方で、ナショナリズムと戦争に関する記憶が結びつき、戦争に関する記憶はナショナルなイデオロギーとなる傾向がある。

過去から現在にわたる、太平洋戦争、ヒロシマ、ホロコースト、南京大虐殺に関する言説の発生、変容、頻度を見ていけば、戦争に関する記憶の上記の特質や、その期待されてきた役割、ナショナリズムとの結合などのダイナミズムを捉えることができる。

こうした戦争に関する記憶の暴力性や危うさを冷静に見つめるならば、われわれがしなくてはならないのは戦争を「記憶する、覚える」ことではなく、戦争を「知る」ことである。戦争を記憶する過程からは、戦争に関する多くの事実、たとえばごく普通の身近な人間が死に、人を殺すといったことが捨象されてしまう。われわれは、どのような判断をするかではなくて、まずは、さまざまな資料、証言、研究から、多様な視点を取り入れ、戦争を「知る」ことから始めていくべきである。そうした過程をつうじてはじめてわれわれは、戦争に対する自分達の視点をもつことができるのではないか。



講演される藤原帰一氏

◆ Steven Fuchs

歴史の教育者として、私が感じるのは相互理解というものはプロセスであるということである。相互理解を実現していくためには、自分達の枠を越え、他の視点、価値観へと自身を開いていくことが必要となる。それはすなわち、自分達が受け入れており、心地よいと感じるもの以外のものも取り込んでいくということである。歴史を学び、自身の歴史認識を形成していく際にもこうした心構えを忘れるべきではない。

▼ Brian Cathcart

果たして歴史認識というものは、国家主義的、文化的、人種的なイデオロギーの影響から脱することができるのであろうか。唯一客観的な事実へのアクセスが極めて難しく、不可能であると感じる一方で、自分は歴史的、文化的相対主義へのコミットメントも避けたいと感じる。異なる歴史認識の鋭い断裂とその弊害を見るとき、われわれには批判的思考以外に何をすることができるのであろうか。

▼ Ng Yook Meng

現在のアジアと日本を巡る、歴史認識をめぐる政治的緊張、対立を緩和していくためには何ができるであろうか。ひとつにはグラスルーツレベルでの交流を進め、異文化間の思考や価値観の交換の促進に努めることである。また、中国や韓国などの日本侵略の被害をこうむった国および、侵略の主体であった日本双方の教育の改善も重要である。

▼ 夫馬 賢治

現在、日本とアジア諸国の間で歴史認識についての対立が起きている。太平洋戦争後、平和憲法を掲げ、平和国家としての礎を築いてきた日本であるが、一方ではアジア諸国からは、謝罪に消極的な日本の姿は相変わらず戦争国家と映っている。日本の姿は、日本人だけが築けるものではなく、アジア諸国に映る戦争国家としての姿もまた、現在の真の日本像なのである。日本が自らのアイデンティティを平和国家の民に求めていききたのなら、日本は辛い道のりであることを覚悟しながら、アジア諸国の怒りを受けていれていかなければならない。

● 総括

多くのパネリストが、歴史認識は解釈する側の主観の影響を受けるものであり、そのことが消極的な帰結をもたらす旨の主張を行った。そうした歴史認識が構築されていく際の問題点を真剣に受け止め、中立的で客観的な歴史認識を構築していくことは非常に難しいのではないかと、この問題の根深さを論じたのが Brian であった。この鋭い問いかけに対する、ひとつの答えとして、会議中での広島、沖縄での経験が歴史認識のもたらす分裂を克服するヒントになるのではないかと、歴史の教師でもある Steven が今後の生徒たちにどのような姿勢で歴史を教えていくかを交えながら、分裂した歴史認識を克服していくための方策を論じた。国家主義、民族主義的イデオロギーからの影響を排除していくためには、歴史を記憶するのではなく、知ることが大切であるとした藤原氏の発言も、Brian の問いかけに対する応答となり得るであろう。藤原氏の発言は、分裂した歴史認識が国際社会において多くの摩擦を引き起こしている現状を踏まえ、そうした中での学者の役割を明確にするとともに、各人が歴史に対してどのようなアプローチをしていくべきかを示唆したものであった。Brian 自身も批判的思考の重要性を強調しているが、それは藤原氏の「歴史（戦争）を知る」という問題意識と共通するものであると考えられる。



アジアにおける歴史認識に関する摩擦、紛争に焦点を当てたのが Yook Meng と夫馬であった。Yook Meng は日米学生会議での経験を踏まえ、地に足のついたグラスルーツの交流を深め、また日本、アジア各国双方の教育を見直していくべきだと主張した。どのような歴史教育を施すべきかという問題に関しては、先に述べた藤原氏や Steven の発言が大きな参考となると考えられる。しかし、初等、中等教育がどのような目的をもってなされるべきかという議論は大きな問題となり得るので、この点についてさらなる検討が必要となってくるであろう。一方、夫馬はアジア諸国が持つ歴史認識から抱かれる日本のイメージ、すなわち侵略者としての日本もまた真実であるとして、日本が平和国家としての道を歩むためには、そうしたイメージも受け入れなくてはならないとする。ここで問題となっているのは、「どれが正しい歴史認識か」、ということではなく日本の国益、アジアの安定のためには「どの歴史認識を受け入れるべきか」という問題意識である。より真実に近く、客観的な歴史認識を志向するのではなく、国際協調を達成していくために戦略的に歴史認識を選択していくべきであるという夫馬の主張は、藤原氏や Steven の発言とは趣旨を異にするものと考えられる。この場合、政策目的で歴史認識を選択、形成していく際に生じる危険に対しどのように歯止めをかけていくかという点につきさらなる検討をしていかななくてはならないだろう。



華やかな女性陣・・・

頼もしい男性陣・・・??



第53回日米学生会議参加者と来場者との交流会

日米学生会議参加者、講演会講師の方、OB・OGの方々、来場者の方々、そして支援して下さった財団や企業の方々と交え、交流会を行った。学生会議参加者以外の方にも日米学生会議というものを知っていただける良い機会になったと同時に、フォーラムでの発表を終えて、参加者も一ヶ月間の総括を行うことができた。



レセプション会場にて



フォーラムを終えてホッとする参加者たち

考察

一ヶ月間の成果をこの限られた時間で表現することはなかなか大変な作業であり、フォーラム前の数日前からは各グループが夜を徹して準備作業に明け暮れた。その甲斐あって、各発表はそれぞれに工夫を凝らした内容の濃いものとなった。一ヶ月間の会議の中で各人が得ることができた成果を外部の人たちに伝えることができたこと。そして、フォーラムの準備を進めていくなかで、日米学生会議での経験を各自が会議を振り返るためのいい機会となったことは、本フォーラムの二つの大きな成果である。

しかし、ビデオ機器が技術的なトラブルで上手く使えなかったことや、自分達の発表を成功させることで精一杯になってしまったことなどが反省点でもある。様々な課題は残ったものの、グローバル化の中の日米関係を探るという目的を達成するために、必死になってこのフォーラムを目指した過程の中で達成された相互理解が私達に残してくれたものは大きいと思う。

フォーラムコーディネーター後記

フォーラムサイトコーディネーター 大井美歩

東京フォーラムでは1ヶ月間の会議の総括として、参加者が得た成果を社会に発信するという趣旨で行われた。

日米学生会議の参加者は、異なるバックグラウンドを持ち、それぞれ強い個性と主張がある。おそらく会議で得られたことも、個人によって異なる。フォーラムとはその違った個性を一つの形にまとめあげて発揮させてこそ、会議の総括となりうる。そのためには、第53回日米学生会議の参加者全員が、高い志気をもって能動的に携わることができる環境が必要であり、それを作ることがコーディネーターの仕事であると感じていた。

皆のテンションをあげるためには、どうしたらいいのか。本会議中に何度も問題として指摘されていた、実行委



員対他の参加者、日本側実行委員対アメリカ側実行委員という構図を壊すこと。そんな構図関係なしに、積極的にとりこみ、企画や仕事を分担をすればいいのではないか。実際のところ、フォーラムのためのミーティングを誰でも参加できるようにすると、興味をもって参加してくれる人間はかなり多かった。なんだ、運営に関わりたいたいという人間は、以外に多いものだ、と。それを感じることができて嬉しかったし、安心した。

フォーラムの直前でいったミーティングのお蔭で、フォーラムに向けて、皆のテンションがいい感じに上がっていくのを感じた。そして、おそらく、皆が自分の発表に向けて能動的に関わり、進んで行くことができた。フォーラム当日は、そういう側面では、とても良かったと思う。それぞれが、発表には工夫がこらしてあったし、発表している人の表情は、本当に生き生きしてた。

一方で、運営の面ではかなり問題が生じていた。人が揃わないために、リハーサルが始められない。フォーラム中に、仕事を放棄して会場から出て行く、通訳ブースで遊ぶ者がいる。時間が伸びる。事前に打ち合わせていなかった機材を使う。誤解が明らかになる。予測していなかったような事態が次々に起こった。でもそれを統括しきれない。結果として、他にしわ寄せがいく。時間が押す。発表が不本意なものになる。

皆、日米学生会議にかける思いも違えば、フォーラムで達成したいことや優先順位、感じている責任感というのも各自によって異なる。だからそういう事態が起こるのは当然のことだ。そして、それをまとめるのが私の役割のはずだった。

また、フォーラム準備の段階では、分科会の方でも問題が生じていた。伝えたい事が伝わらないけれど、それを解決するための時間も、コミュニケーション能力も足りない。思い入れがあったことだけに、納得のいける形で携わっていたい。それでも、自分はフォーラムの運営の準備を優先させなければ、フォーラム自体が崩壊する。自分が二人いれば、とありえないことさえ考えた。

これらは、一見どうにもならないことのようにだが、実際のところ、解決方法は確実にあったはずだ。予期せぬ出来事に対処するのも、会議全体を、自分をコントロールすることもどうにかすれば必ずできたはずである。要するに、自分の欠点そのままフォーラムでのミスとして出てしまっただけだったような気がする。

そして、心から悔しいと思った。私は、普段は良くも悪くも悔しさをあまり感じない性格だが、このときばかりは別だった。

フォーラム後に去年の参加者である友人に、仕事が終わって、どんな気持ちかとするかと聞かれた。私はそのまま晴れない気持ちであることを話した。すると彼女に、それが日米学生会議であり、人生と一緒にのよと言われた。それを聞いて、なぜか妙に納得した。そして思った。結局の話、日米学生会議の実行委員として私がフォーラムを開くことはもうなく、会議内では、取り返せる機会はない。けれど、場面は違っても日常生活でこれらから受けた教訓を生かす機会は必ずある。悔しかったなら、その分頑張らなければならない。それでこそ、この経験を自分の「力」にすることができるのだらうと。

● 東京 DAY (8月19日)

フォーラムを終え、19日は一日中自由行動となった。事前に提案されていた浅草、靖国神社・明治神宮(原宿)、渋谷・新宿に繰り出す人が多かった。翌日の新実行委員選挙に向けて準備を進める参加者もいた。



明治神宮にて

● 新実行委員選挙 (8月20日)

午前中には新実行委員の選挙方法について話し合いがなされ、選挙方法が決定した後、新実行委員の立候補・推薦が行われた。午後からは、各候補者によるスピーチ・質疑応答が行われ、全員が終了した後、投票の結果、第54回日米学生会議の新実行委員16人が決定した。夕食後には、新実行委員で来年の会議に向けての準備が進められた。



実行委員選挙の様子



第54回日米学生会議
実行委員会のメンバーたち



参加者ノート

ECに立候補することを決めたのは前日のこと。でも自分の中でなかなか気持ちが整理できず、前の晩はほとんど眠れなくて空が白み始めるのを眺めていた。一応スピーチの内容も考えたけれど、なぜ立候補するのか、と自問自答する中で寂然としないままにそのときを迎えた。

今でもECスピーチの時はなにか不思議な空気があったような気がしてならない。原稿を読んでいく中で53回の会議の出来事が思い出され、こんなにすばらしい仲間に来て良かったと心から思うと同時に自分のふがいなさに腹が立ち、申し訳なく思い、泣いた。せきをきったように自分でも驚くくらいに涙があふれてきて、原稿の中身はどこかに行っちゃって、感情のままに話している自分がいた。もし自分が客観的にそのときの自分を見ることができたら、きっと情けないやつだと思うだろう。自分でもそう思う。そんな情けないやつをみんな励ましてくれて、その優しさがうれしくてたまらなかった。

実行委員になる条件は、能力があることでも地理的条件でも年齢の条件でもなく、全ての参加者が持つ学生会議を愛する気持ちに加え、日米学生会議の歴史と未来に対する責任を果たしていく情熱だと思う。そうした責任の重さは影響力と比例し、影響力の大きい環境は人間の成長を加速させる。OB・OGをはじめ多くの方の暖かいまなざしに見守られながら学生だけで会議を創っていく機会を与えられたことに感謝し、脈々と流れる情熱の奔流を感じながら次回の会議に向けて走り出す。そのスタートの時に背中を押してくれたのは、たどたどしさを感じながらも僕の気持ちを受け入れてくれた53回会議の全ての参加者だと思っている。

(松岡洋平・京都大学)

● 新実行委員ミーティング (8月21日～23日)

新実行委員は朝からミーティングを行い、第54回日米学生会議の理念やテーマを話し合い、各実行委員の役職等を決定した。これからの連絡方法の決定など、来年の会議まで会うことはできないだけに、決めなくてはならない事項は多いのだ。

● 外務省レセプション (8月21日)

夜からは、外務省でレセプションが開かれ、山室勇臣氏(国際教育振興会理事長)、明石康氏(日本予防外交センター会長)によるスピーチを頂戴した。また、外務省に勤務する多数の方々とは交流でき、参加者にとって貴重な経験となった。



レセプション会場にて

参加者ノート

ーフォーラム前、フォーラム後ー

会議も終盤にさしかかり、参加者の疲労もピークに達していた。事前に思い描いていた会議で活躍する自分の姿と実際に会議で露呈した自分の卑小さとのギャップに、情けない気持ちを感じ始めていたときでもあった。また、会議日程をほぼ終え来年度の実行委員に誰になるのか気になりだした頃だった。そんなとき東京フォーラムがあった。

フォーラム発表の準備では、共同作業でなにかを生み出さなければならない。英語の得意でない日本側参加者の幾人かは、自分の意見を発表内容に反映させることがなかなかできない。他人の作った発表をそっくりそのまま自分の発表しなでればならなくなる。何のための発表なのか、これが共同作業なのか、との疑問も押さえきれない。

フォーラム前日、昼下がりのオリンピックセンターを散歩しながら、「もう実行委員になりたいという気持ちがなくなった。」と呟いた参加者がいた。その人は、フォーラムでの共同作業に疲れきっているようだった。

そんなフォーラムも無事に終了した。

その二日後、来年度の実行委員の選出があった。立候補者のなかに、フォーラム前日の昼下がりに苦し気に気持ちを告白した「その人」がいた。僕には、あえて困難に挑戦しようとするその意気込みがとてつもなく眩しく感じられた。

あえて自分を厳しい状況に身をさらし足掻いてみる。困難のなかで自分の可能性を見いだす。厳しければ厳しいほど燃える。そういったメンタリティの持ち主が自然と集まる場所、それが日米学生会議なのではないか、そう思わせる出来事だった。

(布川俊彦・東京大学)

● クロージングセレモニー（8月22日）



新実行委員は第54回日米学生会議に向けて準備を続行した。その後アメリカ大使館でのレセプションが計画されていたが、台風11号のため、中止となった。日米参加者にとって最後の夜、渋谷にあるクラブ・マルヤマでクロージングセレモニーが開かれ、会議中の写真のスライドショーが行われ、参加者から第53回実行委員達へプレゼントが贈られた。日米両参加者が共に過ごす最後の時間となった。

第53回と第54回実行委員会



● アメリカ側参加者帰国（8月23日）

いよいよ別れの日がやってきた。別れを惜しむ参加者の中には涙ぐむものも多かった。

第53回日米学生会議、参加者にとって長いようで短い、しかし限りなく熱い一ヶ月がこの日静かに幕を閉じた。



別れを惜しむ参加者

サイトコーディネーター後記

東京サイトコーディネーター 三田重恭

ともかく、全員が無事で終わってよかった。京都から沖縄までの日程は非常に過密、（一種の自分とのサバイバルレース？）だったのでその日その日の行事をこなしていた感も否めない。最終サイトである東京では、各人が会議を振り返り、改めて会議の理念や各々当初の目的を見つめなおす機会があったように思う。収穫があったという声の多かった全体リフレクションに加え、東京フォーラム、新実行委員選挙などの諸企画は、会議を振り返る場でもあった。また、個人レベルで参加者間の議論が進み、毎晩遅くから明け方になっても外で、ラウンジで、廊下で、そして宿泊室で静かに、しかし熱く議論が交わされていた。議論の議題や内容は何であれ、一ヶ月の「未知なる体験」を共有した参加者達の胸にはさまざまな複雑な想いが交錯していたのではないだろうか。今だからこそ感じられるこの想いを、いかに己の「力」へと消化していくのか。会議の日程は終了した。しかし、会議が各々に与えた課題は計り知れない。

第4章

本会議報告—分科会の成果

異文化間問題

情報技術

人間の安全保障

ビジネス

マスメディア

通商政策

民族問題



異文化間問題

Intercultural Issues

● 分科会メンバー

宇佐美友加（愛知淑徳大学大学院）

佐々木淳（青山学院大学法学部）

鶴田彬（上智大学法学部）

三田重恭*（慶應義塾大学法学部）

Maria Jimenez* (Campbell University)

Brian Catcher (Tufts University)

Lisa Daily (Eckerd College)

Lourdes Rivera (University of Guam)

Rasheed Townes (Harvard University)

(*は分科会コーディネーターを示す)



● 分科会設置当初の目的

一口に異文化間問題と言っても、何をもって異文化間問題とするかという定義のレベルから考えなければならぬ程、テーマとしては漠然としたものであった。そのため本会議前の準備期間において、日米の参加者が何度となく連絡を取り合い、分科会の具体的な方針を話し合った。その結果、日米双方の歴史認識の違いから見る“文化の違い”に着目することとなり、そのためのディスカッションの起爆剤として、日米間の歴史において際立ってセンシティブである真珠湾攻撃と原爆投下という2つの問題について話し合った上で、異文化間問題について考察することとなった。

● 分科会の流れ

<本会議前の準備活動>

6月18日 桜美林大学副学長 諸星裕氏による勉強会

桜美林大学副学長である諸星裕氏を訪れ、異文化間問題全般に関してのお話を伺った。異文化理解・政治問題・教科書問題・アメリカの教育等、豊富な経験による幅広い内容の濃いお話を聞くことができ、本会議での方向性を見出す貴重な機会となった。

<本会議>

◆ 分科会#1

自己紹介、プレゼンテーションの順序決め、及び今後の分科会の方針決定を行った。プレゼンテーションに関しては、各自が事前に行ったペーパーを沖縄・広島・異文化理解・教科書問題などテーマ別に分類し、各視点から効果的に異文化間問題について考察できるよう順序を決定した。

◆ 分科会#2：プレゼンテーション

〔発表者：Brian Cathcart “*Confronting Injustice : U.S. Military Bases on Okinawa*”

Rasheed Townes “*Political Participation in Okinawa*”〕

沖縄における日米間の歴史をたどり、米軍基地の問題について様々な視点から考察した。沖縄の所得は本土に比べ75%~80%程度で、失業率も本土平均の2倍となっており、基地返還・縮小の流れの先には基地関連収入の減少が予想され、沖縄が抱える経済的問題は深刻である。基地との共存を考えた場合、勿論状況は異なるが良い方向に向かうモデルとしてGuamにおける米軍基地の例が挙げられた。また、社会を構成する“State・Economy・Church (Family)”のバランスを考えた場合、沖縄においてはStateとEconomyの力が極端に強い為、バランスが崩れ沖縄県民の自由が損なわれ人権が軽視されている要因であるとの指摘があった。

◆ 分科会#3：プレゼンテーション

〔発表者：Lourdes Rivera “*Exploring Japan-U.S. Relations in a Globalizing Society*”

Maria Jimenez “*Pearl Harbor and Hiroshima, Cornerstones of Relations Between USA and Japan*”〕

1941年のPearl Harbor奇襲攻撃と、1945年の広島原爆投下という歴史的事実は、アメリカ・日本の両国民にどのようなイメージで捉えられているのかを、文化的背景や教育の違い等色々な視点から考察した。また、戦時中のGuam・日本・アメリカの関係についても触れると共に、MinorityであるからこそGuamが現在でも抱えている選挙権の問題などについても討論した。

◆ 分科会#4：プレゼンテーション

〔発表者：Lisa Daily “*Thoughts on War*”

三田重恭 “*The Root of Intercultural Friction : The Power Balance Between Japan and United States*”〕

戦争という悲惨な過去の事実に向けることは、相互理解への第一歩であり、他国が行ったことを責めるだけではなく理解し受け入れる心を持つことは、現代のグローバル社会にとってはとても重要なことである。しかし日米の関係においては、一筋縄ではいかない問題もあり、同盟の基本である日米安保条約が対等な相互防衛を意味していないことから、日米同盟において日米の立場は相対的に不均衡であることが挙げられた。この日米同盟における日米関係の不均衡は、両国間の様々なレベルにおける異文化間問題を引き起こす要因になり得るのではないかという点が指摘され、討論となった。

◆ 分科会#5：フィールドトリップ（国連大学国際会議「文明間の対話」参加）

異文化理解とは、まずお互いの文化を尊重し合い、相違点を認め合うことによって2つの文化の間に橋を作ることが大切であることを再確認し、そのためにも様々な文化における“価値観の違い”を認識し、グローバルな視点から物事を捉えるスキルを身に付けることが重要であることを認識した。



◆ 分科会#6：中間考察

本会議におけるプレゼンテーションを半分終え、分科会の前半を振り返り抽象的になりがちな“異文化間問題”における議論を、後半どのように発展させ具体的な結論を導くかについて各自で考察した。

◆ 分科会#7：プレゼンテーション

〔発表者：鶴田彬 “How to Face up the Bitter Past”

宇佐美友加 “Concerning Intercultural Communication in a Globalizing Society

: Between Japanese and American Cultures”〕

首相の靖国神社参拝に関する問題について討論をし、歴史的背景を知ることがその国の文化を深く知ることにつながることを実感した。戦後の日本と中国や韓国等の和解についても話し合い、日本が行った謝罪をめぐって熱い討論となった。また、他者との見解の違いを体感するアクティビティを行い (Value Auction / 色の認識に関する相違) 異文化理解にとって何が不可欠であるかを体験した。

◆ 分科会#8：フィールドトリップ (靖国神社見学)

前回の分科会で触れた靖国神社を訪れ、多くの歴史的展示物を実際に目にした後で感想を率直に述べ合い、Nationalism について話し合った。

◆ 分科会#9：プレゼンテーション

〔発表者：佐々木淳 “Hiroshima in the Textbooks”〕

日本の歴史教科書 (中学生用) 7 冊の比較を試み、同じ歴史的事実がどのように表現がされているかを比較した。中でも広島原爆投下については表現の違いが様々であり、興味深い結果が得られた。また日米の教育の問題にも触れ、日本の教育は歴史的事実に関して記憶が中心であることが指摘された。アメリカでも南北では教育が違い、南北戦争に関しても認識の違いがあることが挙げられた。

◆ 分科会#10：

東京フォーラムに向けて、最終的にこの分科会で討論を重ねてきた結果を結論としてまとめた。結局、異文化理解とは国々の壁を取り払い、その間に相互理解という“橋”を掛ける事によって、そこに異なった見解や歴史認識があろうとも、民衆理解へとつながることが分かった。

● フォーラム

最初に、分科会#7で実際に行った異文化理解を目的とするアクティビティを会場全体で行った。そのアクティビティとは、各個人が持っている事柄（例えば愛や平和など）に関するイメージを色で表すものであり、各個人が持つ“見解の違い”を体感するものであった。異文化理解においては、見解の違いがあることをまず認識し、それを相互理解の妨げと考えるのではなく、理解した上でコミュニケーションを図っていかなくてはいけないことを強調した。その後、分科会で行ったプレゼンテーション&ディスカッションを総括する「靖国神社・広島・沖縄・教科書問題」という4つの項目について発表を行い、最後に当初に述べた異文化間理解の重要性をもう一度繰り返し、発表を終えた。

● 分科会を振り返って

まず、私たちの分科会メンバーは総じて日米問題に対する意識が強く、会議全体を通して非常に意欲的であったということを最初に述べておきたい。テーマが大きく抽象的になりがちであることや、メンバーの中には一人も異文化間問題を専攻で学んでいる者がいなかったことなど、いくつかの障害を乗り越える上で、この意識と意欲の高さが大いに役に立った。また、学生だからこそこできるお互いの立場に捕らわれない本音でのディスカッション、いわば腹を割った話し合いができたことも大きな収穫であった。アカデミックな議論を求めながら、妥協による合意に達しなくてはいけないという制約も勿論無く、非常に自由な形で話し合いが進み、議論の過程を重視した議論ができたと確信している。メンバー各自がこの分科会から得たものはそれぞれ異なっているが、この経験から得た新しい視点からの物の見方やそれぞれが深めた見識などは、今後各自が大学そして社会で生きていく上で必ず活かされるものであり、また日米関係のさらなる発展にも反映されるであろう。



情報技術

Information Technology

● 分科会メンバー

岡本紘明* 慶應義塾大学法学部
出浦直子 慶應義塾大学法学部
松岡洋平 京都大学教育学部
Edwin Ng 一橋大学経済学部
糠田美穂 慶應義塾大学法学部
Neil Broadley* Oberlin College/Sophomore
Tina Chen Harvard University/Senior
Ann Moore University of Texas, Austin/Doctorate
Hsinyi Tsang Johns Hopkins University/Doctorate

(*は分科会コーディネーターを示す)



● 分科会設置当初の目的

情報通信技術の飛躍的な発展が社会という総体自体を変えうる可能性を内包しているという認識のもと、日米両国の立場から情報通信技術革命がもたらす諸利益と共にそれによってもたらされる危険性の分析、理解を行い、情報化社会における国家のあり方を踏まえた上で、開かれたネットワークの中で相対的に地位を向上させている個人のあり方を検討する。情報技術によって創造される時空間において、物理的・時間的制約から解放された視点での人間社会の本質の再考が求められている。

各参加者の専門分野から、政治、経済、産業と共に社会福祉、マスメディア、E-コマース、バイオテクノロジーなど様々な分野における影響・変化を分析し議論を通じて、今後の社会のあり方を模索する。

● 分科会の流れ

◆ 分科会#1：議論の方向性

専門分野の異なった各メンバーのペーパーに一本の流れを通す作業。ペーパーのテーマ：Regulation, E-Commerce, IT in the Aging Society, Biotechnology, Digital Divide, Mass Media これら6つのテーマを日米双方の視点から比較し分析した上で、更なる日米の可能性を探求しようという分科会の目標を立てた。

◆ 分科会#2：プレゼンテーション

〔発表者：糠田美穂 “*Information Technology in the Aging World*”〕

加速する高齢化社会の中で情報技術はどのような役割を果たせるのか。高齢者と介護側という両側面における高齢化問題の対策を IT という観点から考察した。そして、IT を高齢者の生活に取り入れやすくする方法も模索した。また、高齢者の生活への IT の導入方法を考えるにあたって、問題が表面化していない米国に先んじて、高齢化が最も進んでいる日本こそが世界をリードするべきであると指摘した。

〔発表者：Ann Moore “*Japan’s Alternative Model of Information Technology Integration*”〕

グローバル化と多国間コミュニケーションを促すべく、各国は様々なアプローチで IT を活用しており、日本の、IT の社会への適用は、欧米諸国のそれと大きく異なることを論じた。IT に浸ることは経済的に強力であり続けることに必要か、文化的価値観は IT の活用はどう影響を与えるか、また、文化的背景によって IT がもたらす利益が制限されるか、などといった議論がなされた。

◆ 分科会#3、#4：フィールドトリップー西陣織工業組合、織成館、株式会社イワタ見学
Learning about Local Tradition and Business with Modern Innovation

ビジネス分科会と合同で実地研修を行った。西陣織業界を訪問させていただき、デザイン工程における情報化・コンピューター化と生地を織る工程での手作業といった伝統と革新の融和を観察することができた。また寝具メーカーであるイワタでは、グローバル化の中での企業の経営哲学重要性についてお話を聞くことができた。



西陣織工業組合にてビジネス分科会のメンバーと



◆ 分科会#6#、#7：プレゼンテーション

〔発表者：松岡洋平 “*Filling the E-Gaps*”〕

主に様々なレベルでの情報格差と教育格差との関連を、アメリカの例を用いながら検証した。人種・地域・収入レベルといった要因のみならず、親の教育格差が情報格差に反映されるという構造の解決策として期待される E-learning。しかし、その E-learning もまた高コストであり、格差構造を是正できないという認識のもと、E-learning の更なる可能性を探った。

〔発表者：岡本紘明 “*Japan’s Strategy for the IT Revolution*”〕

情報技術の発展に主導されるグローバリゼーションにより国家の存在感が希薄化する中で、むしろ情報技術革新の本質を捉えた上での国家戦略の構築が求められている。ネットワークの特質により生じる国家・企業レベルでの新たな格差を打破すべく、既存のシステムを相対化する独自の戦略が日本に求められている。特に米国のプロパテント政策に対抗した、基盤技術のソースを公開し他者と協働することで応用技術をイノベートするオープンな戦略の可能性について議論した。

〔発表者：Edwin Ng “*E-Commerce: Inherent Issues for the Enterprise, the Consumer and*

Japanese Society at Large”〕

主に日本の電子商取引の現状を企業間や企業と消費者という二軸の現状説明から入り、日本の E ビジネス市場の比較的小さい規模（アメリカと比べ）を指摘した。そして日本市場にとってなにが適切な E ビジネスなのか、また民主主義社会における E-commerce は企業から消費者への発信よりもその逆の発信が望ましいのではないかとすることを踏まえたうえで、そういったものに転向させるために必要な要素、たとえば消費者教育、Net Community の促進などについての展望性を最後に論じた。

〔発表者：Hsin-yi Tsang “*The Impact of Biotechnology on Society in the Post-Genomic Era*”〕

IT の発達でゲノム解析を通じた遺伝情報の解読や医薬への応用、個人の日常的な健康管理などに果たす役割は極めて大きい。しかしクローンはもとより、EM 細胞を利用した人工臓器の生成など、倫理的な問題は法的な側面ともあいまって複雑な様相を呈している。遺伝的な障害を理由に保険に加入できなくなるなど、身近なレベルで遺伝的な差別が生じる危険性もはらんでいる。IT とバイオテクノロジーの融合は大きなビジネスの可能性を秘めているが、同時に人間の本質に立ち返る議論が必要だと認識した。

◆ 分科会#8：プレゼンテーション

〔発表者：出浦直子 “*Internet Regulation: Its Necessity, Problems and Suggestions to Promote*

a Global Information Society”〕

主にインターネット上の法規制の必要性、問題点、そして今後の規制のあり方について論じた。匿名性、国際性、多様性といった特徴をもつインターネットでは、コンテンツ等の法規制は必要だが、アメリカの CDA（通信品位保持法）の違憲性からも読み取れるように、政府による法規制は表現の自由への権利を侵害し得る。また、外国のコンテンツに容易にアクセスできるため、国内法のみによる規制は有名無実化してしまうことから、国際的な調整や条約等による規制が必要であるという結論に至った。

〔発表者：Tina Chen “Internet Regulation”〕

インターネット上の規制の是非をめぐる、様々な論争が起きていることを述べた上で、中国とアメリカを例にとり、規制のレベルと方法は、その国におけるインターネットの発展の度合い、及び国家の関心に左右されることを論じた。国家によるインターネット規制の姿勢は、当該国家における表現の自由が保障されている度合いに大きく依存しているが、情報技術発展の中で検閲政策の有効性は失われつつあることを示した。

◆ インターテーブルセッション [IT分科会・マスメディア分科会]

〔発表者：Neil Broadley “Internet and Democracy”〕

既存のメディアの諸形態を分析した上で、インターネットメディアとの比較分析を行った。インターネットの匿名性、少数イデオロギーの集約というインターネットの特質は、社会の少数派に発言の機会を提供すると共に、ネット上の閉鎖的コミュニティの形成が極論の形成を助長し、開かれた対話や議論により成立する民主主義の基盤を危うくするという負の側面についての可能性を考察した。

◆ 分科会#9：フィールドトリップーITコンサルティング企業訪問

株式会社フロントライン・ドット・ジーピー代表取締役 CEO 藤元健太郎氏

ITコンサルティングやログ解析、データベース構築・管理等のASP業務といったナレッジサービスを主体とするベンチャー企業のCEOにお話を伺った。日本発のビジネスモデル構築のための市場戦略やCRMをはじめとするブランドマネジメント、そして消費者と企業を結びつけるエージェントシステムなど、ITとビジネスの接点から広がる可能性と問題点について見識を広げることができた。

具体的には藤元氏より、インターネットに代表される技術革新により、社会の構成要素たる各アクター間また各アクター内のコミュニケーションプロセスもまた変化しており、既存のコミュニケーションから新たなコミュニケーション形態への移行を目の当たりにしているという現状認識をうかがった。そして、全ての取引段階においてコミュニケーションが介在していることから、本質的にe-businessが社会を変える可能性を内在していること、著作権に関する問題など情報技術の発展によりもたらされる負の効果はコミュニケーションの変換に起因するものであるとのお話をうかがった。

参加者から、これまでB2B・B2Cなど取引形態に重点がおかれてきた傾向からこれからのビジネスが成り立つ対象としてのコミュニティの可能性について、情報通信技術におけるインフラやOS等プラットフォームの分野で優位にたつ米国に対してキャッチアップ型に代わる日本企業の戦略の可能性について、また、情報技術革新に伴うデジタルデバイド等負の側面を克服する営みに私企業がどれだけコミットすべきか、といった疑問がなされ、これらに対してお答えをいただき議論を行った。

◆ 分科会#10：東京フォーラムの準備



● 東京フォーラム

各参加者の論文に基づいた報告と共にスキットを織り交ぜた形でのプレゼンテーションを行った。情報技術発展が社会の様々な位相に影響を与えている現状を、分科会メンバーにとどまらずフォーラム参加者全体と共有すべく、分科会で行われた参加者の論文発表とその後の議論をベースに行うこととした。同時に、議論の現実からの乖離を避けるべく、情報技術発展が個人のレベルでどう具体的に影響を与えうるかをスキットで表現した。

前半において、情報技術発展がどのようにコミュニケーションの形態と共にコミュニケーションのコンテクストを変化させ、それらが日米間でどう異なるかを考察した。特にインターネットに関して米国が主導で研究開発を行った歴史的経緯と共に、インターネットが本質的に欧米的コミュニケーション形態に親和的である点などから、日米においてその普及、発展に差異が存在することを示した。また、国家間のデジタルデバイドの進行が危惧される中で、いわゆる「IT革命」以前から機能していた日本企業独自の流通システムなどのように各国文化を背景とした多角的な情報技術利用の可能性についても言及した。

後半においては米国人・日本人を対比させるスキットを交えながらトピック毎に報告を行った。〈マスメディア〉インターネットメディアの情報源の非信頼性、匿名性、極論の形成可能性に対してNGOなど第三者機関の創設や、インターネット空間に公共性を埋め込むような公共的バナー広告が提案された。

〈電子商取引〉より組織化されたオンラインコミュニティの形成により相対的に地位を向上させる消費者が、企業の商品企画過程に影響を与える商取引の可能性を指摘した。

〈情報技術+バイオテクノロジー〉情報技術とバイオテクノロジーの融合は、クローン羊のような画期的な発見・発明をもたらすが、飛躍的に広がる医学的可能性は倫理的・法的・社会的問題を提起する。技術発展と倫理の緊張関係について問題を提起した。

〈高齢化社会〉来るべき高齢化社会において、情報技術の発展が生活の質、人間関係の質の向上に寄与しうる可能性を具体的に例を挙げながら指摘した。

結論として、グローバル化を主導してきた情報技術の発展それ自体が正負両側面の影響をもたらしており、情報技術発展の独り歩きに対してレッセフェールの自由放任に任せるのではなく、相対的に地位を低下させる国家がなおも情報技術が公正に使用・研究・開発されるような土台としての制度やルールの構築という役割を担っているということを提示した。

● 総括

参加者それぞれの専門性から論文発表・議論を行ったことで、多面的に情報技術の発展が社会全般に与えるインパクトを認識、検証することが可能であった。開かれた議論を通して多くのトピックを扱い、他参加者の価値観を受容することでより広い視野を得ることができた。しかし、「IT革命」、「情報化」礼賛の時流の中で果たして冷静にその実体を把握し、主体的に思考し、現状について批判的な視座をもって議論することができたかどうか、反省点もある。

人間の安全保障

Human Security

● 分科会メンバー

織田健太郎* (東京大学教養学部)

喜多洋輔 (三重大学医学部)

柴田綾沙美 (慶應義塾大学経済学部)

中川由紀 (一橋大学法学部)

夫馬賢治 (東京大学教養学部)

David Buckley (Boston College)

Krisa Gardner (Wesleyan University)

Jaime Huelse-Barker* (West Virginia University)

Hua Wang (Duke University)

(*は分科会コーディネーターを指す)



● 分科会設置当初の目的

国際関係の分野では長い間、国家の安全保障に焦点が当てられてきたが、現在のグローバル化する社会においては、国家の枠組みを越えた個人の安全保障に重点を移すことが必要になってきている。人間の安全保障として、人権の著しい侵害、貧困の影響、伝染病の蔓延、自然災害とその影響、性差別、プライバシー問題、科学技術と倫理、地域紛争、政治・経済難民問題など、様々な問題を扱う。経済的に豊かで、技術の進歩した日米両国はこれらの世界問題にどう向き合うべきなのか。こうした問題を中心に、政治・経済・文化・哲学・自然科学などの視点から包括的にアプローチし、議論を進めていくことを目指す。

● 分科会の流れ

◆ 分科会#1

人間の安全保障はきわめて新しく、広範且つ曖昧な概念であるため、その定義を明確にして共通の理解を築くことから分科会をスタートした。まずは類似の意味を持つ「人権」との関係を探り、人間の安全保障とは、複数の人権のレベルのうちでも食糧・水・住居・暴力からの自由など根幹を成す Basic Human Needs のレベルが中心となると合意した。さらに、人間の安全保障があくまでも国家の安全保障との対比から生まれた概念であることから、人間の安全保障の定義自体もまた個人に焦点を当てて考える必要があることを強調した。



◆ 分科会#2：プレゼンテーション

〔発表者：David Buckley〕

「らい予防法」をめぐる歴史的事実、ハンセン病患者に対する社会的差別の実態と解決策を論じた Buckley の発表をもとに、なぜ「らい予防法」が施行され 1997 年まで廃止されることがなかったのかを、①宗教的・哲学的②密室医療制度③教育、の観点から議論した。国家によって Basic Human Needs を剥奪されたハンセン病患者は、法律が撤廃された現在も差別と偏見に苦しんでいる。また、AIDS などの慢性病患者に対して同様の過ちを繰り返さぬよう、人間の安全保障のコンセプトに基づいた医療・福祉・生活・教育が求められていることを強く認識した。

〔発表者：柴田綾沙美 “Human Security in Okinawa”〕

沖縄の米軍基地の存在は沖縄の人々にさまざまな問題をもたらしてきた。住民からは基地撤廃の声が上がって久しいにもかかわらず、性犯罪や環境への被害、騒音公害などいまだに根本的問題解決はなされていない。国家の安全保障上極めて重要な役割を果たす沖縄を、人間の安全保障という観点から考え直すことで問題を浮き彫りにすることができる。基地を誘致しているグアムやハワイに移設するなどして沖縄から段階的に削減するなどの意見も出た。セッション#2 では、国家の安全保障と人間の安全保障が衝突したときの解決の困難さを、メンバー全員が実感した。

◆ 分科会#3：プレゼンテーション

〔発表者：Hua Wang “The Case for Open Borders”〕

中国系移民である Wang は、プレゼンテーションにおいてアメリカの移民政策を論じ、移民受け入れに対して国境を開かれたものにすることを主張した。国家の自己決定権と共同体としての結合を保つことよりも、個人の権利が尊重されるべきであり、open border の利益は closed border よりも大きく上回る。社会的公正、互惠主義的倫理、高利性の観点からも、アメリカの国境を移民に対して開放することが求められる。

〔発表者：夫馬賢治 “Displaced Persons are Confronted by a High Wall of the

Nation State System”〕

難民政策は、人間の安全保障とその対置概念にあると思われる国家の安全保障の関係を見るのに適している。難民は、国際的な保護と援助を必要としているおり、「人道的」な国家の対応を求められる。難民問題は、19 世紀に入ってから国際連盟、国際連合の場で協議され、国際機関によって保護・援助がなされてきた。その機関の活動資金は各国から拠出金という形で任意に集められてきた。特に冷戦期には、東西対立の構図の中で、欧米は社会主義圏から生じた難民の保護に莫大な予算を投入してきた。しかし、冷戦が終わり、不況が続く各国の状況の中で、拠出金の額は減り、また難民の受け入れを大きく制限した結果、難民保護・援助は困難を極めている。人間の安全保障は国家の安全保障より下部の地位にあることを確認し、国益追求を最大目的とする国家が、国家の安全保障を至上とするのは当然の結果である。それ故に、難民保護には、企業献金、NGO の活動といった国家以外の行為主体のプレゼンスが必要不可欠となる。多数の NGO が政治色を排除するために、国家から個人・企業へと資金収集の母体をシフトしてきていることは、新時代の幕開けを彷彿させている。

◆ 分科会#4：プレゼンテーション

〔発表者：中川由紀 “*Women, Gender, and International Politics*”〕

これまでの国際関係の研究、また国際政治そのものによって不可視にされてきた女性を主体および客体に置き、国際政治をジェンダーアプローチによって分析した。貧困の女性化・戦争の性犯罪・グローバルエコノミーでの安価な労働力としての女性など、国益に基づく国家の政策が及ぼしてきた女性の権利侵害は深刻である。その解決の視点として挙げられるのが人間の安全保障である。人間の安全保障は今まで無視されてきた国際社会のジェンダー構造のひずみにもスポットを当て、行き詰まりを見せている貧困や紛争などの問題に新しい局面を切り開く。「慰安婦」問題では、人間の安全保障またジェンダーアプローチの視点から民間団体・NGO等の手による女性国際戦犯法廷を実施することなどが有効であろう。

〔発表者：織田健太郎 “*Globalization, Civil Society and Human Security*”〕

グローバリゼーションは、人・モノ・金の移動を活発化させ様々な利益をもたらしたが、一方では発展途上国の食糧安全保障を危うくし、デジタルデバイドを生じさせ、また特許戦争を激化させるなど、その利益を享受できない人々を多く生み出している。また、アジアの通貨危機に代表されるように、グローバル経済はもはや政府の支配さえも超えている。よって、グローバル経済の負の側面をいかに最小化し、人間の安全保障との共存を実現するかが課題となってくる。その一つの答えとなりうるのが、トビン税である。これは国際的な資本取引に税金をかけ、税収を貧困の根絶に当てるという試みであるが、UNDPの1994年のトビン税導入の提案は大国の反対によって棄却されている。しかし、アジアの通貨危機後、草の根レベルの動きにより再度検討されるにいたっている。鍵を握るのはグローバル市民社会である。対人地雷前面禁止条約に見られるように、ボトムアップの力を働かせることによってグローバリゼーションと人間の安全保障をバランスさせることも可能であろう。

◆ 分科会#5：プレゼンテーション

〔発表者：Krisa Gardner “*The Global Water Crisis*”〕

GardnerはBasic Human Needsの中心とも言える水問題はグローバル社会による対応が急務であると訴えた。現在世界人口の約3分の1が衛生的な水を手に入れることができず、10秒に一人の割合で子供が飲料水の汚濁によって命を落としている。このような中で、多国籍企業による水道局の民営化は事態の悪化に拍車をかけている。グローバル市民は水問題の深刻な状況を理解する必要があり、水の管理と供給に対して活発に関与していくべきである。



〔発表者：喜多洋輔 “*International Health Under Globalization and Politics*”〕

南北問題などの危機がますます拡大している世界を私達は目撃している。そのような現状認識のもと、国際保健の視点から、議論した。トピックは、WTO の Trade Related Aspects of Intellectual Property (TRIPs)と、発表者が1998年に訪れた経済制裁下のイラクである。TRIPsが発効されてから、知識の私有の保護が進み、医薬品の分野では価格の上昇というネガティブな影響があらわれた。そのため、途上国では必須医薬品などへのアクセスが難しくなり、公衆衛生上の悪影響が懸念されている。最近、外交の場でも議論の俎上にのり、改善策が検討されている。イラクでは、経済制裁のもと、最も弱い立場である人々が危機に瀕している。子どもや乳幼児の死亡、栄養不足、医療システムの破綻は深刻である。このように、私達から「見えない」ところで、大量の死が進行している。さまざまなレベル、中でも一人一人の市民が国際的な監視を続けることが必須である。

◆ 分科会#6：プレゼンテーション

〔発表者：Jaime Huelse-Barker〕

飢餓や貧困などの食糧問題は食料の不足ではなく、世界経済システムの民主主義の不在によって引き起こされている。これを是正するためには食糧事情においても人間の安全保障が認識される必要があり、以下の点を改めて問い直さなければならない。

- ・ 政府機関の役割とアカウンタビリティ
- ・ 多国籍企業が大きな力を握るグローバリゼーションの負の側面
- ・ 「自由」の定義と、個人にとって「自由」の持つ意味

食糧問題における人間の安全保障を実現するためには、貿易における公正な取引と資源の re-localization が必要である。

◆ フィールドトリップ：高松宮記念 ハンセン病資料館

Buckley のテーマでもあった日本のハンセン病の歴史を学び、そして現在の療養所の暮らしを知るために東京都東村山市に位置する全生園とハンセン病資料館を訪れた。再現された当時の雑居部屋や、官房の写真などの展示物を通して、ハンセン病患者に対する社会の誤解や偏見を肌で感じた。さらに、ハンセン病資料館の運営委員、多摩全生園入園者自治会長、また東京地裁でのハンセン病国家賠償訴訟の原告の一人でもある平沢保治さんにお話をお伺いすることで、人間の安全保障が国家によって著しく侵害されていたことを痛感した。東京に療養所があることすらそれまで知らなかった我々は、社会が弱者を生むという事実を改めて認識し、東京フォーラムにて人間の安全保障の概念の重要性を訴える必要性を確認した。

● 東京フォーラム

人間の安全保障が新しく広汎なテーマであることを考え、私たちは一つの具体的なトピックについてプレゼンテーションを行うのではなく、フォーラムに訪れた人に人間の安全保障という概念を知り、そしてその重要性や可能性についてメンバーとともに考えてほしいという立場から、ディスカッション中に登場した全てのトピックを扱うことにした。そして親子がインターネットで「人間の安全保障」を検索するという設定のプレゼンテーションを行うことによって、私たちが1ヵ月間このテーマに挑戦した、手探りしながらの取り組みを再現することを試みた。

● 考察

分科会での議論、そしてフォーラムでの発表を通じ、従来の国家の安全保障によって行き詰まりを見せている国際政治秩序に、人間の安全保障が新しい光を提供してくれることを深く理解することができた。しかし、人間の安全保障とはコンセプトにすぎず、それをどのように具体化するかにについては文献などの手がかりも少ないことは、人間の安全保障の限界であると言える。また分科会での議論もそこに充分には辿り着けなかったことは私達の反省点でもある。とは言え、この視点はグローバル社会に生きる「人間」にとってのあるべき姿をあくまでも追求するという点でやはり極めて重要であり、今後もこのコンセプトを思考のフレームワークとしたい。



ビジネス

Business Practices

● 分科会メンバー

藤井康次郎* (東京大学法学部)
石川一郎 (慶応義塾大学総合政策学部)
Ng Yook Men (京都大学経済学部)
坂江裕美 (慶応義塾大学環境情報学部)
Chinazor Ojinnaka* (Howard University)
Jessica Cardenas (Campbell University)
Parima Damrithamanij (Duke University)
Sophia Kan (University of Washington)
Hannah Peterson-McCoy (Howard University)

(*はコーディネーターを示す)



● テーブル設置当初の目的

グローバリゼーションの中でビジネスの形態や様式は大きな変化を遂げようとしている。新たなビジネスの台頭と旧来のビジネスの衰退は、労働環境や経済活動の態様等に変化をもたらし、社会にも大きな影響を与えている。ビジネス分科会では、グローバル化する社会の中でのビジネスのあり方(主に日米)、そしてビジネスと社会が相互にどのように関わりあい、影響を与えているかを分析、評価する。多国籍企業、寡占、M&A(合併、企業買収)、コーポレートガバナンス、知的財産権、IT(情報技術)、バイオ等の側面から、この問題にアプローチしていく。さらに、グローバル化するビジネスの正、負両側面を明らかにしていくとともに、今後のビジネスとそれを取り巻く社会の展望について考えていく。

● 実施研修

ビジネステーブルでは、メンバー間での議論だけでなく実社会におけるビジネスを目で見て、肌で感じる事が重要であると考え、会議期間中に3回の実地研修を行った。以下にその概要を報告する。

◆ 京都フィールドトリップ:「伝統と創造」

場所: 株式会社モン・デザイン、織成館、松翠閣、株式会社イワタ

伝統と同時に豊かな創造性が根付く京都を舞台に一日かけて行われたこの実地研修においては、「伝統」「文化」価値の豊かさ、そしてそれらを創造的に活用するビジネスが現時点でどのように展開されているかを学び、今後の可能性について議論した。

株式会社モン・デザイン社長の財木氏の案内で、伝統的な西陣織に、デザインにデジタルプログラムを活用し、世界的企業から多くの注文を受けネクタイを製造していた話を伺った。また、確かな品質にこだわりつづける中、日々技術革新を志向している西陣織の帯を製造している工場を見学した。こうした経験は、日米双方の参加者にとって驚きをもたらすとともに、大変興味深いものであった。

また、創業以来長い歴史を有する株式会社イワタでは専務取締役の岩田氏に最新の研究、特許を活用し良質な寝具を製造している事実とともに、自分、顧客、原料の供給先の三方を思いやるというビジネス哲学についてもお話を伺うことができた。ビジネス=商いとはなんであるかをもう一度考えさせられるものとなった。毎日新聞社ビジネスサロン担当の水野氏には、情報とデータの違いについてお話を伺った。氏の講演は現在の大量生産、消費社会のあり方についても疑問を投げかける示唆的な内容であった。

◆ 経済産業省フィールドトリップ

2001年1月に行われた省庁再編によって通商産業省は経済産業省へと変わった。経済産業省では、経済のグローバル化に伴い各経済主体が存分に活躍できる場や環境を整備することを第一の目的としている。プリーフィングでは主に時代の変化と省庁再編と共にある経済産業省の役割の変化を学習し、更にそこから特化して経済産業省のIT政策に関するお話を伺った。

◆ ビーコンコミュニケーションズ株式会社フィールドトリップ

ビーコンコミュニケーションズ株式会社は電通、Leo Burnett (米)、D'Arcy (米) によって設立された広告業のジョイントベンチャーである。田中氏と Franzen 氏とともに実際にビーコンコミュニケーションが製作した広告、宣伝などを見ながら、国籍や企業文化の異なる広告会社が協働することによる得られる成果や、商品のマーケティング政策等についてお話を伺った。また、文化や人々の価値観と、広告戦略の関係などについても議論した。

● フォーラム

ビジネスの形態は、営まれる地の伝統や文化、人々の価値観によって影響されながら形成されるものである。しかし、それと同時に、ビジネスはそうした文化などに影響を与え、時にそれらを変容させていく。古くは、国内とその周辺という範囲内で、ビジネスとの文化、価値観による相互作用が行われてきた。しかし、ビジネスの国際化の進展は国境を超えたビジネスを後押しするとともに、世界的な取引規模、速度の拡大をもたらした。その結果、競争力の強いビジネスモデルが、進出した地の文化や、価値観に強いインパクトをもたらすと同時に、そうしたビジネスが進出先の伝統や風俗により変容を被るなど、国境を超えた相互作用が各地にみられるようになった。時には、そうしたビジネスと文化の相互作用の中で深刻な摩擦が生じるという事態もみられる。

ビジネス分科会では、このような視点をグローバル化社会におけるビジネスを考える上で重要なものと捉え、「ビジネスと社会の間の相互作用—ビジネスが社会に与えるインパクトと価値観の変化、社会がビジネスに与える影響—」をフォーラムのテーマとした。フォーラムでは、テーマを図



1のようにイメージ化し、各々の問題意識をそれにシンクロナイズさせることによって1ヶ月間議論してきた内容を体系化することを試みた。そしてテーマを、日米両国の文化から発生してきた両国のビジネスモデルの間に見られる相互作用を中心的な視座とする「日本型コーポレートガバナンスと系列」、ビジネスが人々の価値観、文化に与えるインパクトに注目した「変化しつつある価値観」、ビジネスモデルが社会発展に貢献することのできる可能性について論じた「持続的发展-マイクロクレジット-」、そして、ビジネス活動と人々の価値観、文化の調和を中心的な問題意識とした「ビジネスにおける法の役割」の4つに大別し、分科会活動をまとめた。

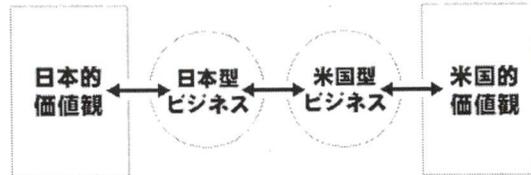


図1 ビジネスインパクトと価値観の関係

※ 日本と米国は一例であり、グローバル化社会では複数の国々が相互にこのような関係にある

◆ 「日本型コーポレートガバナンスと系列」

ー文化から派生するビジネスモデルとビジネスモデル間での相互影響ー

ビジネスにおける最も重要な概念はおそらく企業統治のあり方、つまりコーポレートガバナンスであろう。コーポレートガバナンスを議論するとき、必ず登場するのは『会社は誰のものなのか』という問いである。米国では会社法により、『会社は株主のもの』と規定されている。しかし、日本企業に関しての答えはやや複雑になる。なぜならば、日本企業の主権を握っているのは企業の経営者および従業員、それらを監査する銀行（メインバンク）であるからだ。これは俗に日本型コーポレートガバナンスと呼ばれている。

日本型コーポレートガバナンスは以下の三つの要因により支えられている。第一に、日本の企業には欧米にない終身雇用制度が存在している。そのため、従業員はだれよりも企業の実情を把握し、企業に対して絶大なる忠誠心を抱いているということ。第二に、慣行的に銀行と企業の間密接な関係があったため、多くの日本企業は資金調達の際、一般株主に頼る必要性があまりなかったこと。第三に、系列内の企業との株式の相互持合をしていたことがあげられる。

バブル崩壊後、日本経済は長期的な低迷に陥っている。業績悪化により倒産する企業も増加している。このような状況下からいち早く抜け出すひとつの方法として、日本的経営システム（日本型コーポレートガバナンス、系列、終身雇用など）を廃棄し、米国型経営システムを導入しようという声も多々ある。しかし、文化的背景及び経済環境の違い、日本的経営の強みを考えると、米国型経営システムをそのまま取り入れることは日本企業を再生するための一番の手立てとは考えにくい。むしろ、これからのグローバル化社会における日本企業への課題は、いかに日本型と米国型、もしくはその他の経営システムの良い点を抽出し、最適なシステムを作り出していくかということであると思う。

◆ 「変化しつつある価値観」

ービジネスが人々、文化に与えるインパクトー

経済のグローバル化が進展する社会においては、技術開発、コスト削減を基軸とした競争が世界レベルで激化していく。それにより多くの外国資本の参入が促され、いくつかの国内産業は衰退していった。スターバックスの進出は日本国内の喫茶店の売上に多大な被害を与えたと考えられる。しかし、その一方で彼らが掲げる「Third Place（職場と家庭の中間にあるリラックススペース）」という概念は日本国内に新たな価値観を創出したといえるであろう。

また、古来より続く伝統的国内産業もグローバル化の影響を多々受けており、伝統産業は今生き残りをかけた新たな発展段階にあるも事実である。ここでは京都西陣織、伝統寝具産業見学の経験をもとに、「伝統的国内産業による新たな価値観の創造」という内発的な動きについて述べてみたい。

平安建都の頃より織物が本格的に始まった長い歴史を持つ京都西陣織であるが、彼らもまたグローバル化の波への対抗策を模索中である。西陣ネクタイに関しては、安価な中国製品の輸入により生産は減退、政府に対してセーフガードを要請するまでに事態は悪化している。しかし、西陣には個性的な魅力と活気強さ、そして新しいものを受け入れる柔軟性が感じられた。見学させていただいた西陣織工房では、職人の方が木製の織り機を操る傍ら、その織物情報は脇に設置させたコンピューターによって制御されており、伝統技術と最新技術との融和が感じられた。これは西陣織が中国技術や西欧技術を率先して取り入れてきたという歴史的経緯にも依存するものであるとも考えられ、この新しいものに対する柔軟性が今後問題を解決し、新たな価値観を生み出すのではないかと思う。

また、京都の伝統産業はグローバル化社会への対処法を模索するのみにあらず、グローバル化の一担い手としての姿勢を見せている側面も見受けられた。株式会社イワタは1830年に創業した京都の寝具メーカーである。1960年代には羽毛蒲団の火付け役となり、機能的で人体にやさしい眠りを提供することを理念として日々高品質の寝具開発に力を注いでいる。しかし、高品質の原材料を求めるがゆえに海外に進出していくことは避けられない。彼らの目指す寝具に適したヤクの毛をモンゴルに採取しに行くことは時にモンゴル人の生活体系を崩すことにもなりうる。彼らは「企業の持続的成長と企業倫理の矛盾」という問題に衝突し、その解決策を検討しつづけている。しかし、このような建設的で前進的な考えが企業倫理、そして新たな社会的価値観を生み出してゆくのではないだろうか。

◆ 「持続可能な発展ーマイクロクレジットー」

ービジネスモデルと社会発展ー

グローバル化社会の発展は我々に豊かで便利な生活環境を創造するという正の側面をうかがわせる一方、前述した伝統産業の衰退傾向同様、社会的、経済的弱者を生み出すという負の側面も併せ持っている。ここではひとつのビジネスモデルである「マイクロクレジット」の例を取り上げ、そのような弱者を救済する事を考察すると共に、ビジネスが社会発展へと寄与しうる可能性を探求していきたいと思う。

マイクロクレジットとは、貧しい人々の経済的自立を支援するために、無担保で少額の資金を



貸し付ける制度である。元々はグラミン銀行総裁 Yunus が、バングラディッシュの貧しい女性に現金収入活動の元手を貸したことから始まり、今では 1000 以上の NGO 団体によって行われている。貧困に苦しむ発展途上国の人々にとって一番の苦難は、低収入によって自立するチャンスが与えられていないことである。そこで、そのような貧しい人々に小口融資をすることで彼らにビジネスチャンスを与え、機会が均等になるような社会システムを作り上げることを目的としている。無論資金を貸し付けるほうで収益をあげることも目的となっている。

小口融資によって女性にも均等に機会を与え、女性の社会進出と地位向上をうたう一方で、逆にそれが家事と小ビジネスを両立させなければならない途上国の女性にとって負担になるであるとか、稼いだお金が夫に取られてしまうとといった、矛盾や問題点も多く存在するため、マイクロクレジットというビジネスモデル単独では完全な弱者救済のシステムとなるとはいいがたい。しかし、マイクロクレジットは現在までに確かな成果を生み出してきているのであり、ビジネスモデルが途上国における持続可能な発展を達成していく上で確かな貢献をし得ることのひとつの証明でもある。ビジネス活動を営む中で収益をあげつつ、持続可能な発展を推し進めることのできるようなビジネスモデルをいかにして開発していくかが、21 世紀社会において模索されるべき課題であろう。

◆ 「ビジネスにおける法の役割」

ービジネス活動と文化、価値観との調和を目指してー

今日では、ビジネス活動や市場のグローバル化に伴ってもたらされる負の側面が明らかになりつつある。アジア、ロシア、ブラジル、メキシコなどを襲った金融危機等からもわかるように、世界経済の不確実性、非安定性は世界中の人々にとって大きな脅威になりつつある。先進国と発展途上国の格差はますます広がるようにも見え、多国籍企業の活動はしばしば、環境破壊や、現地の伝統、文化の衰退を招いている。

これらの負の影響に対処するためには、企業が現地の文化や、人々の価値観と共存可能な形で活動していくことが非常に重要である。ここまでの議論の中で、ローカルな伝統や文化の再生と強化、持続可能な発展を志向する企業活動の重要性や具体例を見てきた。次に企業活動を取り巻く環境（通商政策や法）について触れる。これらの環境と企業活動は互いに影響を与え、互いに規定し合う。それゆえビジネス活動によってもたらされる負の影響の緩和、解決を図っていくうえで、こうした環境について考察することは意義深いといえる。

法は、取引のルールや、会社の組織形態などを定めることでビジネスの実践に枠組みを与える。法は、ビジネスを行う中で、遵守すべき一般の規律を明確にすることで、ビジネスにおけるコストを削減し、機能的なビジネスを可能としている重要なインフラであるともいえる。さらには、レッセ・フェールという標語からは矛盾するように聞こえるかもしれないが、自由で公正な市場それ自体が、社会における法の規律付けの産物であるともいえるのである。市場のあり方も、ビジネスのプラクティスも法がそれらに対しどのような規律付けを行うかでそのあり方は大きく異なるものとなる。

利潤追求における効率性の原理により運動するビジネスは、法を媒介として、その効率性の支配が及ばない、人々の文化、価値観、倫理の原理に制約されることになるのである。利潤追求の効率性を制約するこれらの原理は、社会的正義、平等、公正、伝統といったものである。一見すると、

ビジネスの実践にとってこうした制約は重荷であり、鋭く対立するようなものに見えるかもしれない。しかし、こうした制約がビジネスに課されることにより、はじめてビジネスと人々の生活が調和したものとなり、ビジネスは持続可能なものとなる。人々の生活から乖離したビジネスは持続することはない。現在にいたる、労働法、独占禁止法、消費者法、環境法の整備の歴史はまさにこうした観点から捉えられるべきである。簡潔に述べるのならば、ビジネス領域における法は、利潤追求の原理により運動するビジネスのシステムと、人々の文化、価値観、倫理、実生活との間のコミュニケーションを媒介する機能を果たす、といえる。

現在、国際的な法制度の整備や各国法制度のハーモナイゼーションの要請は、国際的取引法、知的財産権の保護、労働法、消費者法、国際的投資に関する法など多岐の分野にわたる。こうした国際的立法を考える上で、上記のような法の社会的意義を見失ってはならない。

◆ 「結論」

企業活動はその社会における価値観に多大な影響を受ける反面、企業経営、営業活動の範囲が拡大する「グローバル化社会」において効率的に利益追求を行うためには、必然的に他の価値観にも従わざるを得ない。企業と社会が持つ価値観に相違が見られるような場合には企業体と社会との間に緊張関係が生まれる。しかし、この緊張関係が対立関係となってしまうと、ビジネス活動は機能不全に陥るのではないかと考えられる。それは、ビジネス活動がよってたつ社会が多様なアクター（投資家・従業員・消費者・地域社会等）を含む現実社会であり、企業が持続可能性を維持しようとするならば、こうした多様なアクターの持続可能性も維持されなければならないからである。それゆえに、企業が自らの利益のみを追求することは最終的には自らの持続可能性をも奪うことになるといえる。企業体と社会双方が強い信頼関係で結ばれ、互いに持続可能性を保つためには、企業活動の利潤追求という要請と社会を構成する多様なアクターの要請とを調和（harmonization）させていくことが必須となるのである。

● 論文タイトル

藤井康次郎 “*Between the Principle of Capitalism and Social Justice -The role of the law in the field of business-*”

石川一郎 “*Enterprise in Society*”

Ng Yook Meng “*The Japanese Corporate Governance*”

坂江裕美 “*American Enterprise’s and the US Government’s Shared Interest in the Japanese ODA*”

Chinazor Ojinnaka “*U.S. and Japan’s 21st Century Business*”

Jessica Cardenas “*The Role of Compatible Values in Business Practice*”

Parima Damrithamanij “*Business Forms in Japan and America: the Difference that Indicates Each Country’s Social Norm*”

Sophia Kan “*Japan’s Use of Foreign Aid-Political Economic Motives in a Global Society-*”

Hannah Peterson-McCoy “*Resolving Over-Saturation of Japan’s Oil industry*”



マスメディア

Mass Media

● 分科会メンバー

入江美美 (九州大学医学部)
中尾真希 (中央大学法学部)
布川俊彦 (東京大学教養学部)
山下淳一* (慶應義塾大学法学部)
Allison Kramer* (Eckerd College)
Amy Jones (University of Kansas)
Jaime Muscar (Washington and Lee University)
Brian Ruh (University of Texas, Austin)
Nana Uemura (Oberlin University)

(*は分科会コーディネーターを指す)



● 分科会設置の目的

我々を取り巻く情報の大部分はメディア媒体を通じてもたらされるものである以上、我々はグローバル社会について考えるにあたって、メディアの役割と影響を無視することはできない。メディアをめぐる問題としては、法的・倫理的問題、メディアの信用性、プロパガンダ、メディアによる議題設定機能、などがある。マスメディア分科会ではこれらの問題を認識し、マスメディアの可能性とそれに伴う責任を、メディア倫理や新形態メディア、社会変革のためのツール、というような視点からマスメディアを考えていく。

● 事前勉強会 (日本側参加者のみ)

2001年6月1日、青山円形劇場にて、BS朝日「田原総一郎の熱論90分スペシャル! LIVE FORUM」の公開討論番組に参加した。討論者は、田原総一郎、田中康夫、佐高信、の諸氏。討論では、巨大メディアの権力志向につき批判的に論考し、メディア理解を深めた。

● 分科会の流れ

◆ 分科会#1

まず、各自が自己紹介をし、マスメディアのどこに興味を持っているかにつき発表した。次に、分科会でのディスカッションの方法につき議論を交わし、各人が自分のペーパーに基づいて自由にプレゼンテーションをしてから、関連するトピックについて自由にディスカッションすることに決した。

◆ 分科会#2：プレゼンテーション

〔発表者：Nana Uemura “*Mass Media: A Powerful Weapon During WW II*”布川俊彦 “*War and the Media*”〕

戦争時には、マスメディアは国民の間に存する愛国心、敵国に対する戦意を掻き立てるためにさまざまに利用される。そこで、我々は、戦争時におけるメディアの役割を実証的に検討する必要があると考えた。Uemuraの論文では、ジョン・ダワーの『人種偏見』をもとに、第二次世界大戦期のアメリカの日本に対するイメージが内包する人種偏見と、それがどのように戦況に従って変遷したか、につき分析が加えられた。布川の論文では、メディア（特に新聞）が戦争時にいかに敵対的感情を助長するか、政府のメディア規制がいかになされるか、さらにメディアとナショナリズムとはいかに結びつくのか、につき太平洋戦争、湾岸戦争を具体例として考察した。

◆ 分科会#3：プレゼンテーション

〔発表者：Jaime Muscar “*Mass Media and Popular Perception*”Brian Ruh “*Mass Media, Gender Roles, and Popular Culture in Japan and the United States*”〕

現在、海外における日本イメージの大部分はアニメ、マンガによって形作られている。そして、これらのアニメ、マンガ等のポップカルチャーもマスメディアによって伝達されている。とすれば、メディアのはらむ問題がポップカルチャーを通して現実化することになるのでは、との問題意識からポップカルチャーを分析の対象とした。Ruhの論文では、日米のマスメディアにおけるジェンダーの役割を、ポップカルチャーを素材に分析した。ポップカルチャーの分析にあたっては、解釈の多様性を担保することが方法論として重要であることが改めて確認された。Muscarの論文は、日米の現実がメディアによってゆがめられている現状を指摘する。その歪みを回避するには、現地を実際に訪れ自分の目で判断することが必要になってくるのではないか、との提案がなされた。

◆ 分科会#4：プレゼンテーション

〔発表者：山下淳一 “*Mass Media Today: Public Sphere and Law*”入江美美 “*Mass Media and Bioethics*”〕

メディアの役割と責任を包括的に考えるために、我々はマスメディアと資本の論理、マスメディアと法制度、生命倫理との関連について議論を深めた。山下の論文では、マスメディアが巨大な資本によって独占され、多様性が失われつつある現状を批判的に概観する。そして、ハーバーマスの「公共性」の概念は一部のブルジョワジーによって達成されたものであり、現在の大衆基盤のマスメディアを批判する概念とはなりえないことを確認する。むしろ、メディアに関する法の整備こそがメディアの多様性確保のために重要であり、メディア内部での編集権の確立、所有の分割、アクセス権、などについての法整備の必要につき議論した。入江の論文では、マスメディアの4つの役割、Watchdog Role, Gatekeeper Role, Open Public Forum, Representative of the Public Opinion, につき検討し、資本の論理に基づく現代のメディア環境にあってはこれらの機能をマスメディアが果たすことは難しいと結論付ける。インターネットを通じたネットワーク社会こそが既存のメディアの機能不全を補完し、新しく公正なメディア環境を構築できるのではないか、との問題提起がなされた。



◆ 分科会#5：プレゼンテーション

〔発表者：Allison Kramer “*Cultural Mindshifts: Reappraising the Packaging of the Past*”

Amy Jones “*The Ramifications of Mass Media on an International Level*”〕

Kramerの論文では、日本の芸術作品が西洋でいかに解釈され、受容されたかを歴史的に追跡する。その過程で、文化的アイデンティティを造形し、解釈するという芸術の役割と、芸術がいかに他の文化に影響を与えるか、を考察する。西洋における日本イメージは「オリエンタリズム」(E.サイード)により一貫してゆがめられてきたがポストモダンの観点が広く認知されてきた今日では、より正確な日本理解が可能になってきているとの現状報告がなされた。Jonesの論文では、資本の論理に拘束されるマスメディアはなにをニュースとして優先的に取り上げるのか、が論じられた。メディアは、エリートに関する出来事、重要国・重要地域での出来事、人々に個人的に関係する出来事、犯罪などのネガティブな出来事、の順番でニュースを選択すると考えた。その結果、メディアによる報道は一過性のものとなり、継続的で問題の背景に迫るような報道がなされなくなるという問題につき議論した。

◆ 分科会#6、#7：プレゼンテーション

〔発表者：中尾真希 “*The Role of Local Newspaper and National Newspaper and the Public*”〕

沖縄サイト中のテーブルディスカッションとして、沖縄の地方新聞と中央の全国新聞との比較を内容とする中尾の論文を取り上げた。中尾の論文では、1995年に沖縄で起こった米兵の少女暴行事件の新聞報道が、地元沖縄紙と全国紙とでいかに違ったかを検証した。そこでは、全国紙の沖縄問題に関する無理解が浮き彫りにされた。

◆ 分科会#8、#9、#10：総括

東京フォーラムに向けて、会議期間中の議論の総括を行った。また、8月17日には、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、マスメディアに造詣の深い、JASC.Inc.の代表である Jack H.Shellenberger氏に講演をしていただいた。

● 東京フォーラム

全体の構成としては、包括的な総論と、個別の二つのケース・スタディー、との二部構成とした。総論では、マスメディアの定義、資本に独占されているメディアの現状、事実解釈の客観性につき論じた。マスメディアの定義としては、大規模に、大多数に、イメージを通じて、一方的になされる情報伝達とした。資本に独占されるメディアの改善に向けては、法律による規制、どの企業がどのメディアを傘下においているかを公衆に明らかにする、などの方策を提案した。一つ目のケース・スタディーとして、日米学生会議を紹介するビデオ映像を作成した。ここでは、意図的にアカデミックではない会議の模様を紹介する内容のビデオを作成し、メディアによる情報操作の危険性を実際に証明した。もう一つのケース・スタディーとして、日米学生会議が沖縄で開催した「Student Forum in Okinawa 2001」に関する新聞報道を分析した。(沖縄タイムズ8月12日の記事、同13日の社

説、琉球新報8月12日の記事)ここでは、我々が実際に沖縄フォーラムで経験した事実とは異なる事実を新聞が報道したことに触れ、新聞が事実からはなれて既成の概念枠組みで事件を処理していることを論じた。結論として、情報源の多様性を確保することの重要性、立法措置による反独占的メディアの構築、を提案した。最後に、日米学生会議の紹介文を非営利団体である「independent media center」に送り、独立した情報源の創出を現実社会において実行・体験したことを報告し、フォーラム発表のまとめとした。

● 考察

メディアを議論する中で常に問題となったのが、メディアからもたらされる情報の信憑性、中立性をいかに確保するかであった。資本の原理に規制される傾向のある巨大メディアからもたらされる情報には一定の偏向があることは否めない。また、事実の解釈、どの事実を報道するか判断には、特定の人間の価値観が混入することも避けられない。では、このようなメディア環境下にあつて、われわれはいかにして偏りのない情報を入手し、現代社会を冷静に解釈することができるのか。そこで持ち出された概念が「メディアリテラシー」であった。メディアリテラシーとは、メディアの提供する情報を正しく読み解き、メディアを使いこなす人々の能力のことである。メディアリテラシーを高めるために重要な役割を果たすのが、教育である。メディア教育につき歴史的蓄積のあるイギリス、アメリカの経験を参照しつつ、日本においてもメディアリテラシーを高める教育を充実させる必要があるのではないか。このような問題意識を参加者同士で共有できたことは、大きな成果だったといえる。



通商政策

Trade Policy and Relations

● 分科会メンバー

伊藤公一朗（京都大学経済学部）

後藤将（東京大学法学部）

千代明弘（国際基督教大学教養学部）

森下麻衣子*（慶應義塾大学法学部）

山口臨太郎（東京大学経済学部）

Joseph Boski (University of Hawaii at Manoa)

Rachel Golden (University of California, Berkley)

Steven Fuchs (State University of New York at Stony Brook)

Dustin Garis* (University of North Carolina at Chapel Hill)

（*は分科会コーディネーターを示す）



● 分科会設置当初の目的

グローバル化の一番の原動力となってきたのは各国の経済活動、貿易であると言っても過言ではない。そして近年の世界貿易における中心的存在を担ってきたのが GATT/WTO 体制である。今日では、物やサービスの貿易のみならず、競争政策、環境問題、知的所有権などさまざまな分野の問題が WTO（世界貿易機関）で扱われようとしている。これらの事項に関する WTO の可能性と限界は今後の世界経済の動きを大きく左右すると言えるであろう。こうした流れの中で、二大経済大国である日米両国の通商政策は、世界の貿易体制に大きな影響力を持つ。当分科会では、発展途上国と先進国との関係、中国や EU の動向も踏まえつつ、WTO を包括的に分析し、今後の日米が取るべき方向性を考える。

● 分科会の流れ

◆ 本会議前の勉強会

7月6日、経済産業省通商政策局米州課の角野然生氏をお迎えし、日米経済関係や対外経済政策の当面の課題についてお話を伺い、討論を行った。まず、米国政府内部の分析、緊急輸入措置（セーフガード）、自由貿易協定などについて知識を確認し、日本の対外経済政策のグローバル化に伴う（国内政策との一貫性を強める方向への）変遷、資源配分と所得再分配とをバランスさせる政策の可能性について話し合った。日米交渉の最前線で活躍される方らしい明快な解説を吸収しつつも、多くのトピック（環境、労働、農業など）についてはより深い分析と議論が必要であることを認識し、本会議の課題を見据えることができた。

◆ 分科会#1：進め方

各メンバーの論文を基に、提起された問題を整理しつつ分科会の方向性を議論した。グローバル化の中で自由貿易のイデオロギーに対抗する動きを WTO の機能という観点から展望する、という共通の問題意識が確認された。そのため、各人の短いプレゼンテーションを最初に行ってから、包括的に問題点を絞り込んでいく方法をとることで合意した。

◆ 分科会#2、#3、#4：プレゼンテーション

〔発表者：Joseph Boski “*Unmasking Free Trade*”〕

国家・市民・資本の三者が連携を深めることは、とりもなおさず都市空間と市民の対話の開放性、そして財やマネーでなく人間を中心に据えたシステムの形成を必要とすることを示し、平行的な世界政府システムを提案した。

〔発表者：伊藤公一朗 “*Trade and Environment*”〕

グローバリゼーションを否定せざるものとして受け入れた上で、各国間の環境政策のギャップやダブルスタンダードを WTO と MEAs（多国間環境協定）の枠組みの中で解消していくべきだと論じた。

〔発表者：Rachel Golden “*The Impact of the WTO’s Intellectual Property Rights on AIDS*”〕

WTO の TRIPS（貿易関連知的所有権）協定が安価な薬剤の開発と分配を妨げ AIDS などの蔓延を悪化させていることを指摘し、協定の見直しだけでなく政府と製薬会社の社会的責任についても言及した。

〔発表者：森下麻衣子 “*Japan and the Future of Free Trade Agreements and the WTO*”〕

自由貿易協定（FTA）と WTO との整合性と日本・シンガポール FTA の可能性を述べた上で、FTA や WTO に対する批判は、所得の再分配が通商政策ではなく国内のマクロ経済政策や福祉政策で達成されるべきであるという観点から正当でない、と指摘した。

〔発表者：Steven Fuchs “*The World Trade Organization: A Horn of Plenty or A Shattering Dream?*”〕

地域間協定やリージョナリズムは多国間の貿易自由化や WTO 原則を前提に進めるべきだとした。またメディアで注目される労働・環境といったイシューよりも、経済的ナショナリズム・リージョナリズムの危険性を過小評価されがちだと警告した。

〔発表者：後藤将 “*China and the Future of Japan and the United States*”〕

自由貿易というイデオロギーに関し、自由とは何か、誰のための自由か、という問題提起をした上で、中国の WTO 加盟の影響とマーケットとしての日米にとっての重要性を論じた。

〔発表者：Dustin Garis “*Micronomics of Japan*”〕

日米貿易を論じる際、関税や補助金などの保護政策ではなく、「和」や系列などの非関税障壁がむしろ重要であり、日本の経済・社会・文化がマイクロレベルで成熟しつつあることがさらなる外国資本の流入を招く、と展望した。

〔発表者：千代明弘 “*The WTO and Developing Countries*”〕

WTO と自由貿易の最優先事項をそれぞれ発展途上国の開発ニーズと、資本ではなく人間と環境を中心に据えた貿易関係にするべきだと論じた。



〔発表者：山口臨太郎 “Rethinking Trade Policy in the Context of ‘Glocalization’”〕

緊急輸入措置に代表される先進国の保護主義の危険性をゲーム理論により明らかにした上で、グローバル化と地方分権がすすむ中で産業構造調整政策へ力点をシフトさせる必要性を説いた。

◆ 分科会#5：問題点の整理

プレゼンテーションを踏まえ、自由貿易の理論、WTO の目的・構造と例外措置、WTO の欠陥、他の主体（政府、企業、NGO など）の役割という4つに問題点を類型化した。

◆ 分科会#6、#7

WTO の欠陥に焦点を当て、労働・環境・健康、産業構造調整、最貧国、国際的な所得格差、コモディティ化といった論点に絞り議論した。その中で、世界貿易体制を考える上で過去・現在・（複数の）未来という時系列的な分析をする方向性が醸成された。

◆ 分科会#8

フォーラムでの発表を歴史→自由貿易理論→問題点→将来の貿易体制のシナリオという時系列で行い、途中にビデオを用いることに決まった。問題点は、各人の論文やプレゼンテーションを包括するべく、自由貿易と環境・労働者の人権・人間の基本的な健康状態の3点に昇順を合わせた。各段階にグループ分けして準備を進めた。

◆ フィールドトリップ：経済産業省通商政策局

米州課の角野然生、伊藤慎介両氏のもとをうかがい、日米経済関係の変遷と日本政府の役割について簡単なプレゼンテーションをしていただいた後、質疑応答形式で議論を行った。特に経済産業省の役割と存在意義について活発な議論が行われた。将来の日米の経済政策をめぐる議論において、分科会として国際貿易体制の将来像を考える上で参考になった。

◆ 分科会#9、#10

将来の国際貿易体制をめぐる三つのシナリオ・提言をどうまとめるかを議論した。

● フォーラム発表

I 過去

1947年以来のGATT/WTO体制の歴史を、現在そして将来の貿易体制をクリアに見極めるために紹介した。

II 現在 ～理論と実際～

自由貿易の概念をWTO設立目的から引用し、自由貿易という理論そのものがやや単純化された経済論理であり、この下で資本の動きが経済厚生にプラスに働くと考えられ、資本の価値が環境・労働・基本的な生活といった価値を押さえつつある、と問題提起した。

Ⅲ 将来

Ⅱを踏まえ、貿易、環境、労働者の人権、人間の健康保全のそれぞれについて議論されている難題点を整理・明示した上で、WTO シアトル会議で起きたデモの様様をビデオで上映し、市民社会の実際の声に耳を傾けた。われわれはこうした問題点に直接の解答を与えることはせず、WTO をめぐる次の三つのシナリオを提示し、来場者と問題意識を共有できるようにした。

- ① WTO は基本的に社会に受け入れられ、環境・労働・健康といった問題点をも包括して扱える機関に拡張される。
- ② WTO の問題点が多大な影響をもつため、環境・労働・健康といった問題点を明白に WTO から切り離し、(様々なレベルの) 国家、企業、市民社会が連携を深めてこうした問題に取り組む体制に移行する。
- ③ WTO は重大な欠陥や弊害を持ち、自由貿易という理念そのものが受け入れがたいと社会に認知された場合、環境・労働・健康に代表される、人間中心の経済活動という新たな概念が中心的イデオロギーとなり、国家・企業・市民社会が WTO に替わってそれらをモニターするアクターとなる。

Ⅳ 結論

日米両国は、戦後自由貿易というイデオロギーと GATT/WTO 体制の下で経済発展を遂げてきた。しかしながら近年グローバリズムに対する声が高まっているように、現行の体制に綻びが生じてきているのも事実である。自由貿易体制の良い点・悪い点を慎重に検討しながら、両国は上に提示された三つの道のどれを選び、新世紀の経済体制を築いていくのかを考えなければならない。

● 総括

今年の通商政策分科会は、当初からグローバル化の中の日米関係という会議全体のテーマや、WTO の包括的分析の中で日米の方向性を探るという分科会の目的を掲げていたこともあり、日米の二国間にとらわれない、途上国を含んだ全世界的視野でプレゼンテーションやディスカッションが進められた。そのため既存の体制でカバーできなくなっている問題点を幅広く議論することができた。

その成果として、われわれは、単純ではあるが多くの含意を得られる三つのモデルを提示した。これらを「提言」という形で無理に押し付けなかったのは、モデルを見れば明らかのように、市民社会に生きるわれわれ一人一人がモデルの可能性を考慮して認識すべき問題だと考えたからである。グローバル化によって個人の存在感と責任が却って強まるということを、この議論で改めて学んだ次第である。

反面、議論のなかで、とくにベースとなる意識や方法論・進行方向をめぐって日米参加者の両者できちんとしたぶつかり合いがあったかは疑問である。型にとらわれず、間違いを恐れず意見を述べるのが結局は相互理解への近道であることを改めて痛感したことを、最後に付け加えておこう。



民族問題

Ethnic Issues

● 分科会メンバー

秋山洋児 (立命館大学国際関係学部)

荒木龍 (一橋大学法学部)

大井美歩* (中央大学経済学部)

古川敏明 (東京大学大学院)

Liv Coleman (Smith College)

Mital Gondha* (University of North Carolina)

Ethan Jennings (University of Washington)

Bernard Murray (Howard University)

Laticco Robinson (George Washington University)

(*はコーディネーターを示す)



● 分科会設置当初の目的

グローバル化の進展により、世界中で様々な面で自由化の動きが加速している。国外への移住、就労目的の労働移動、海外留学など、国境を越えたヒトの移動が盛んになると同時に、それによって生じる社会的歪が各コミュニティで表面化してきている。このような時代において、人々は国籍や民族、人種、さらにはより細かなコミュニティといった自己の存在を規定する概念について、より真剣に考えるようになった。当テーブルでは日米両国において生じているそのような問題、国家が内包するエスニックマイノリティーに関する様々な事象について各参加者独自の視点から議論していく。そのような過程の中で、日本とアメリカ両国間、さらには国際社会における人々のアイデンティティーの揺らぎについて検証し、それに対する国家や社会のあるべき姿を考える。

● 分科会の流れ

当分科会においてその活動の軸となったのは、各人が事前に作成したレポートを元としたディスカッションと、各サイトで行ったアンケート調査の二点である。ディスカッションでは、毎回二人、または三人ずつがそれぞれのペーパーについてのプレゼンテーションを行い、それを元に議論を進めていった。ここでは、ペーパーで設定された問題に関して各参加者が持っている様々な想い、過去の体験について話し、ぶつけ合うということが議論をより身近なものとするという意味で重要な役割を果たした。

アンケート調査は各サイトにおいてディスカッションと同時並行して行われた。質問項目を在日コリアン問題、国際結婚問題、外国人労働者問題の三つに大別し、その結果は年齢別に集計し、東京フォーラムにおいてグラフとして提示した。テーブルから離れての活動が、一般の人々と直接このような問題について対話するという意味で、より活発化した議論の進行に結びついた。

◆アンケート調査

エスニシティーにまつわる社会的問題は表面化しにくい。その為社会の構成員である個人がどのような認識を持っているかを探ることは非常に重要であろう。当分科会では人々が普段民族問題についてどのような認識を持っているのかを直接知る為にこの調査を行った。調査は各サイト(京都、広島、沖縄、東京)で40名ずつ、合計で約160名の男女に対して実施され、その結果は性別、年齢別などに集計された後、東京フォーラムのプレゼンテーション資料として利用した。

在日コリアン問題については、その認識度は各サイト、年齢層でも高く、さらに彼等のアイデンティティーを容認し、尊重する回答が多数みられた。その反面、およそ三分の一にあたる回答者が直接的にも間接的にも在日の知人がいないと答えており、実際問題としての実感が乏しいという事実を表しているといえるだろう。

国際結婚問題では、それ自体は認めるもの、実際に自分や、家族の事となると、保守的に考えてしまうという回答が得られた。ここから分かることは、いまだに国際結婚が日本においては自然に起こり得るものであるとは捉えられてないことである。閉鎖的社会構造を長年維持してきたという歴史的背景を考えると、この調査結果には納得がいくものの、グローバル化時代の到来により、こうした社会性質に変容が迫られているのは明らかである。

最終項目の外国人労働者問題については、多くの人が彼等を不法労働者、肉体労働者であると捉えているという事実が分かった。マスコミによって取り上げられている外国人労働者の一側面が人々へ及ぼしている影響は大きいようである。しかしそれに伴って多くの人が彼等に危機的な想いを抱いているかというところでもなく、日本社会において彼等の果たす役割の大切さが徐々に認識されつつあるようである。

● フォーラム

東京フォーラムにおいては、当初それまで積み重ねてきたディスカッションとアンケート調査の結果を中心にプレゼンテーションを行う予定であった。しかしディスカッションを重ねるうちに、民族問題をテーブルという狭い場所で人事のように論じることに限界を感じるようになった。民族問題は決してどこか別の場所にあるのではない、今自分たちのすぐ側に存在しているのだ、このような認識が参加者の間で共有できた結果、我々は発表の内容を改め、当問題に対する参加者それぞれの想いを聴衆と分かち合うという形式にするに至った。ディスカッションの経緯やアンケート調査結果を補助的に使いながら在日コリアン問題、外国人労働者問題、国際結婚についてのそれぞれの想い、過去の体験を話した。もちろん、今まで分科会で多くの時間を費やしてきた各ペーパーに関するディスカッションの経緯を補助資料とすることに参加者間で抵抗はあったが、結果的に我々の想いを聴衆に伝えることができ、民族問題の切実性をフォーラムの参加者と共有できた。

<はじめに>

- ・ 性別
- ・ 年齢
- ・ 出身地

<在日コリアン問題について>

- ・ 当問題に対する認識
- ・ 帰化問題
- ・ 国立大学入試資格付与

<国際結婚について>

- ・ 結婚する際の民族の重要性

<外国人労働者について>

- ・ 当問題から連想されること
- ・ 外国人労働者の現状
- ・ 外国人労働者に対する意見

<アンケートの概要>



● 考察

我々は自己を規定するアイデンティティーの帰結先として民族、人種など様々な概念を有している。そのどれを選ぶかは個人それぞれに任されており、その多様性がグローバル化社会においては注目され、強調される。しかし、現代社会においてはこの当たり前のような権利が阻害されているのである。当分科会ではそのような誰もが有する当然の自己表現の権利について再認識すると共に、他者を許容し尊重することの大切さ、さらには難しさを学んだ。お互いをさらけ出して主張をぶつけ合うことで、参加者ははじめて自分が大勢の他者の中におけるたった一つの存在にすぎないことに気づき、他者との協力、共生の尊さを悟るに至った。まさにこのことがグローバル化社会における相互理解の始まりであることを我々は確信しており、そういった意味で当分科会において過ごした時間は今後我々が21世紀という世界に飛び出していく上での原動力となることであろう。

第5章

本会議報告—スペシャルトピックの成果

食文化

映画とアニメ

教育制度

ナショナリズム

スポーツと文化

安全保障

反体制思想とサブカルチャー



食文化

活動日：7月31日

Food and Culture

活動場所：京都 立命館大学

STメンバー

大井美歩、出浦直子、石川一郎、
佐々木淳、Edwin Ng、Dustin Garris
Tina Chen、 Nana Uemura、Ethan Jennings

活動内容

事前活動 ブリーフィングの資料作り
7月31日 立命館大学にて食事会



この ST の目的とは文化を象徴する食を通じて、日米双方の文化に対する理解を深めるということであった。日本の古き伝統の象徴である京都でこの分科会が催されることから、我々は、日本伝統的な味を代表するものとして精進料理を食べ、それを切り口にお互いの食文化を紹介しあうことにした。

精進料理は野菜と山菜といった二つのものから、最も鮮度の高い旬の素材を、無駄をすることなく繊細な調理方法で仕上げていく料理である。人数があまりにも多いことや移動の手間がかかるなどのことから、宿泊所の立命館大学のなかで精進料理弁当を出前してもらい、そこで食べることにした。そしてその店のオーナーの方に来てもらい、精進料理の簡単な説明をしていただいた。そして参加者からの質問、例えば料理はどのように準備したかとか、どのぐらいの手間がかかったかとか、食材の名前は英語で何というか等を質問をして、それに答えていただいた。食文化 ST の良いところは、食という人類共通の楽しみを通じて、参加者の皆がリラックスした雰囲気の中、そこで出てくる疑問や意見を率直に言いあえることである。本 ST のメンバーは、食前に精進料理に関するブリーフィングを行い、食事中では、食卓や食材に関する色々な話題を提供したりして、食を通じた相互理解を深めようと心がけた。

感想・コメント

精進料理を初めて味わった日本側参加者も少なくないということで、料理に関しての全体的な評判はとてもよかった。特に、精進料理自体はアメリカ側参加者にとってはとても新鮮であった。また、畳の部屋で座布団に座り、精巧な技巧を凝らした器に盛られた旬の食材を箸で味わう、という日本独特の文化を体験できたことは非常に有意義であった。日本側参加者にとっても、ほとんど口にする機会のない精進料理を食し、その本質を理解しようと試みることはとても貴重な体験であった。

ただし、食べながらお互いの食文化を話し合うはずであった当初の案が思う通りにいかずに、結局は日本の文化を紹介しただけで終わってしまったことは反省点である。日本のみならず、様々な国籍や文化的バックグラウンドを持つ各参加者が、それぞれの食文化について紹介をする機会がなかったことは非常に残念であった。

映画とアニメ

活動日：8月1日

Film and Animation

活動場所：京都 立命館大学

STメンバー

森下麻衣子、荒木龍、糠田美穂、松岡洋平

David Buckley、Mital Gondha、Amy Jones、Jaime Muscar、Lourdes Rivera

活動内容

まずはじめに、STメンバーが中心となり、日本のアニメーション作品（TV作品・OVAなど）を通じ、アニメーションがアートとして一つの表現手段になっていること、またクリエイターが常に最新技術を駆使し、独自の表現方法（デジタル3Dキャラクターと2D背景の融合など）を模索していることなど日本のアニメーションの現状を紹介した。

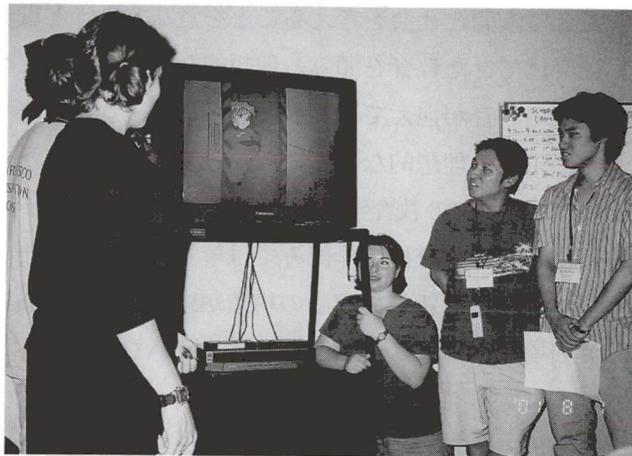
その後、アドリブコンテストを行った。まず全員を5、6人の9チームに分け、1回戦では3チームが一つのアニメ作品（2分程度：「青の6号」「新世紀エヴァンゲリオン」「X」）をミュートで見て、チームでキャラクターのセリフや効果音・音楽を話し合い、実際に映像に合わせる。各組で最も独創的で演技力も高いと投票されたチームが決勝に進み、決勝では日本のドラマ作品（「101回目のプロポーズ」）を題材に同様のアドリブコンテストを行い、優勝者には賞品が贈られた。

最後に黒沢明監督の「夢」という作品を10分程度鑑賞した。アナログな特殊効果（フレアーやクロスフィルター）を用い、独特の映像表現によって自らの内面を描き出す「クロサワ」の世界を垣間見た。

感想・コメント

今回のSTはエンターテインメント性が強く、また日本の作品を扱った。このSTではアドリブコンテストという形式をとったが、日本において声優が一種憧れの職業として認められているのは特筆に値するだろう。アニメに限らず洋画の吹き替えでも、どこかで聞いた声だと思ったら同じ声優だった、なんてことはざらである。アメリカではそもそも吹き替え作品が少ないということもあるが、それ以上に日本では声優の技術が独自に発展し、声優の歌うアニメソングが流行するなど、プロとしての声優が醸成されてきたという日本独特の歴史がある。

グローバル化が進み、ハリウッドに代表されるアメリカ作品が気軽に見られるようになった。洋画に押されて邦画が不振だと言われて久しいが、唯一例外なのがアニメ映画である。こうした特徴からも双方の差異を認識するとともに、自文化・社会に対する理解を深めることが可能ではないだろうか。





教育制度

活動日：8月2日

Education Systems

活動場所：京都 立命館大学

STメンバー

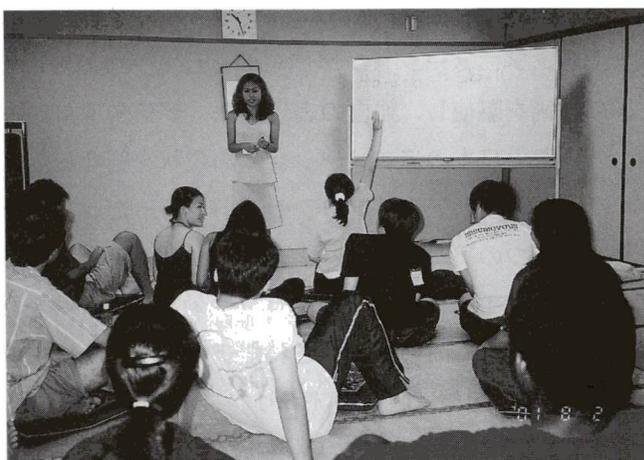
伊藤公一朗、宇佐美友加、中川由紀、藤井康次郎

Ann Moore、Chinazor Ojinnaka、Hua Wang、Krisa Gardner、Parima Damrithamanij

活動内容

教育制度のスペシャルピックでは、まず9人のメンバーが自分達の受けてきた“教育”について話し合い、日米間でどのような違いがあるかを認識した上で、このSTの方向性として参加者全員で教育の在り方について考察し、理想的な教育を追求することにした。

まず参加者を日米混成の4グループに分け、日本・アメリカの学校を自由に表現するスキットを行った。日本の教育に関しては、ラジオ体操・厳しい服装チェック・規律正しい姿が表現され、またアメリカの教育に関しては、自由な校風・教師と生徒との距離の近さ・意見が飛び交う授業風景が表現された。このスキットでは、それぞれの教育の特徴だと思われる点が誇張されてはいたが、双方の教育について認識するとともに良い機会となり、その後に行った“理想的な教育”についてのディスカッションに大いに役立った。生徒・学校・教師の関係、カリキュラム、いじめ、クラブ活動、登校拒否、校則、学校行事、教育システム、家庭教育など、理想的な教育を考える場合には取り組むべき点が多くあるが、参加者がそれぞれ受けてきた教育のバラエティーに溢れる背景の違いから、とても充実したディスカッションができた。



教育制度とは、人が生まれ育っていく過程において必要不可欠なものであり、教育について考えることは人間と社会を考えることを意味するほど重要なトピックである。今回、参加者全員が自ら過去に受けてきた教育を顧み、理想的な教育について熱い討論が出来たことは大変意義があった。実際に現代の教育が抱えている課題は多いが、意見を交わすことによって得た“教育に関する新しい視点”は、未来の理想的な教育に向かって一歩前進したと言っても過言ではないだろう。現代における教育は、これまでの教育学の理論や方法では充分にとらえ得ないまでに大きく構造的な変貌を遂げており、従来の概念や分析の枠組みでは解釈・説明しがたい新しい問題が次々と出現している。教育における視点の転換や新しい理論の構造が求められている今、日米の教育制度を比較し、理想的な教育について討論が出来たことはとても意味深いものであった。

ナショナリズム

活動日：8月4日

Nationalism

活動場所：広島 セジュールフジタ会議場

ST メンバー

後藤将、柴田綾沙美、古川敏明

山口臨太郎、山下淳一、Brian Cathcart

Maria Jimenez、Lattico Robinson、 Brian Ruh

活動内容

事前準備 アンケート実施、集計結果を
もとにハンドアウト作成

8月4日 ハンドアウト配布
Rahna Reiko Rizzuto 氏による
講演・講演者を交えたグルー
プディスカッション



本会議前から、日本側メンバーでスペシャルピックの内容を検討していたが、アンケートを実施し、その後グループディスカッションという流れにすることで一致した。本会議開始後の事前準備として、7月31日、京都で、アメリカ側も交えてスペシャルピックの形式を確認し、日本側が準備しておいたアンケートの内容を再検討した。また8月3日には、広島に移動するバス内でアンケートを実施し、結果を集計したハンドアウトを作成した。こうして8月4日に、「ナショナリズム」の題目で、2000年度 American Book Award Winner である日系米国人四世の作家 Rahna Reiko Rizzuto 氏による講演があり、質疑応答の後、Rizzuto 氏にも参加していただき、講演内容とハンドアウトをもとにグループディスカッションが行われた。

アンケートの回収率は70%程度であったが、いくつか興味深い回答が見受けられた。そのうちのいくつかを紹介しておく。まず、「あなたの国籍は何ですか」という質問に対し、全部で8種の回答が寄せられており、“nationality”は法律的に捉えているだけではないことがわかる。また、「いつ自分の国籍を意識しますか」という質問に対しては、日米間で特に大きな違いは見られなかったが、“national holiday”という選択肢を選んだのが、日本側1名に対し、米国側7名であった。その他には、日本側参加者の側に、広島を原爆や反戦思想と結びつけて考える強い傾向が見られた。

ナショナリズム ST は、広島サイトで最初のイベントであり、「平和への誓い」プログラムの成功の鍵を握る重要な位置を占めていた。“Narrative”（物語）をキーワードに、個人的な体験を交えてナショナリズムや歴史認識について語る Rizzuto 氏の講演スタイルは、学者とはまた趣を異にする作家のそれであり、参加者には非常に好評であった。最終日には平和記念式典に同席されるなど、広島でのイベントを共有することができたのも貴重な体験であった。

ナショナリズム ST を通じて、広島という日米双方にとってセンシティブな場所であったにも関わらず、日米間の学生が率直に自らの考えや意見を交換できたことは非常に有意義であった。



スポーツと文化

活動日：8月12日

Sports and Culture

活動場所：沖縄 北谷町サンセットビーチ

ST メンバー

岡本紘明、中尾真希、Ng Yook Meng、布川俊彦
Allisson Kramer、Jessica Cardenas、Bernard Murray
Hannah Peterson-McCoy、Hsinyi Tsang

活動内容

事前準備

8月12日 サンセットビーチにてスポーツ



肉体も一個の独立した主体であり、理性とは別個の独自の論理を持つ存在である。肉体は肉体自身の論理を思考する。そして、理性を代表する言語を通じた相互理解では、かかる肉体の論理にもとづく人間の感性同士の相互理解を図ることはできない。すなわち、人間の相互理解には、二つの異なる位相、「言語」にもとづく相互理解の位相と「肉体」にもとづく相互理解の位相とがあり、言語のみではトータルな相互理解は達成できないのである。そして、後者の肉体にもとづく相互理解には実際に体を使うスポーツが最適であるといえる。

また、各種のスポーツはその国の文化の影響を受けている。例えば、同じ野球であっても、「アメリカ」の野球と「日本」の野球とはかなり異なる。乱暴に言ってしまうと、個人主義的な文化背景を持つアメリカの国民性と集団主義的な文化背景を持つ日本の国民性との相違が、スポーツに現れているのである。スポーツは、日米双方の文化を理解するための1つの有力な手がかりとなりうるのである。

さらにまた、スポーツは最も簡単で、普遍的なコミュニケーションツールでもある。たとえ言葉が通じない人同士であっても、1つのサッカーボールでパスを交換することでお互いに親愛の情を伝えることができる。国籍の異なる人同士が1つのボールに注意を集中し、勝利を目指してチームメイトとの一体感を共有する。スポーツは、異なる言語を話す人同士の相互理解を促進する最も簡単で、普遍的なツールなのである。

こうして、スペシャルトピック「スポーツと文化」では、日米の参加者同士の相互理解を図るべく日米参加者全員でスポーツをすることにした。競技の中で、言葉では伝えることのできなかつた仲間への信頼感、連帯感を感じることが多々あった。チームメイトの体力、疲労具合を気遣い、励ましあうなど参加者の意外な優しさに触れたりすることもあった。勝負へ執着心の強さ、弱さといった、日常会話からは窺い知ることのできない参加者の性格もわかり、より深い相互理解のきっかけとなった。また、英語の不得手な日本側参加者もいつも以上に積極的に活動に参加でき、いい自己表現の機会となった。スペシャルトピック実施後には、日米参加者間で、お互いの学校教育におけるスポーツのあり方の違いについて情報交換するなど、スポーツの背後にある文化的ギャップにつき認識を深めた。さらには、スポーツの興行的側面に置ける日米間の相違にも関しても有意義な情報交換がなされた。

安全保障

活動日：8月14日

Security Issues

活動場所：東京 国立オリンピック記念青少年センター

STメンバー

秋山洋児、坂江裕美、夫馬賢治、三田重恭

Neil Broadley、 Liv Coleman、 Steven Fuchs、 Sophia Kan、 Rasheed Townes

活動内容

8月14日 STメンバーによるレクチャー、グループディスカッション

安全保障問題は日米関係において欠くことのできないものである。今年の開催地であった広島と沖縄にて目の当たりした、核兵器による傷跡や米軍基地の問題などを踏まえた上で、現在の日米安全保障関係を各参加者が再び捉えなおすことが目的とされた。

一般的に核兵器問題またその他の政治問題が常に実証的でありまた国家中心的なものである。しかし今回は、新たな視点を産み出すという意味で、「市民を中心とした軍事・安全保障問題」というものが念頭におかれた。そのため、このSTの活動は、STメンバーが核兵器問題に焦点を当てて、1.第二次大戦以降の重要な核兵器問題の経緯や、2.それに対する日本及びアメリカにおける市民の反核兵器運動の変遷を簡単にレクチャーすることから始まった。

前者においては、ピキニ環礁でのアメリカの核実験や1963年の部分的核実験禁止条約、核兵器拡散防止条約などに触れ、それとともに冷戦時代の核抑止論と現在までに至る「核の傘」の考え方を紹介した。後者では、まず日本における第五福竜丸事件を契機に膨れ上がった、東京都杉並区の婦人による反核運動や原水爆禁止日本国民会議・原水爆禁止日本協議会の運動、日本の反核文学をあげた。それから、冷戦時代初期に、アメリカで中流階級の婦人が中心として行われた反核運動や、その後、階級を超えて広がることとなった、ソ連との核兵器削減交渉を、政府に迫るものにまで発展したロビー運動などが紹介された。さらに満州事変、日中戦争に始まる旧日本軍の侵略の歴史を振り返った。

最後に参加者全員が6つのグループに分かれてのディスカッションに移った。STメンバーは事前に話の叩き台として、1.核兵器、2.ミサイル防衛、3.歴史教科書、4.憲法9条、5.靖国神社参拝、6.日米安全保障条約、の6つのトピックを用意し、それぞれのグループに分かれて参加する形で、約30分間の議論を交わした。核兵器やミサイル防衛といった問題に対して、共通認識が得られていないことが明らかになった。また、歴史教科書については日本参加者側から中国・韓国と歴史認識における対話を促進することの必要性を説く声もあがり、さらに憲法9条改正についても同様に強い反発の意見も上がった。小泉首相が靖国神社を参拝した問題については、シンガポールからの留学生によって、日本はアジア諸国に対して第二次世界大戦についての謝罪をしておらず、その状況下での首相の同社参拝に反対である、という意見がだされた。ここでは、ディスカッションを活動の中心とし、広島・沖縄で各々が考え、議論したいと思っていたことを実際に行動に移す良い機会となった。



反体制思想とサブカルチャー

活動日：8月16日

Anti-establishment Philosophy

活動場所：東京 国立オリンピック記念青少年総合センター

STメンバー

入江美美、織田健太郎、喜多洋輔、千代明弘、鶴田彬

Jaime Huelse-Barker、 Joseph Boski、 Lisa Daily、 Rachel Golden

活動内容

8月16日 Briefing about ST activity Body (and Garbage) Painting with music (punk, Jazz, etc...)

はじめに、現代の反体制運動の一つ、反グローバリゼーション運動に焦点をあて、反 WTO 活動家たちをとりあげたビデオを使い、プレゼンテーションを行った。

次に、パンク、レゲエ、ラップ、Jazzなどで、音楽や歌詞が反体制的なものを選び、45分で十数曲をBGMとして流しながら、大きな紙に、黄、黒、青、赤などの水性ペンキを使ってやりたい放題、手を使ったり、カラダを使ったり、頭を使ったりしてペイントした。

感想・コメント

第53回日米学生会議の参加者の中には、実際に、シアトルWTO時にデモに参加するために現地に向かった者もいた。従って、ビデオを使い、彼らの実体験に基づき行われたプレゼンテーションによって、他の参加者は最近の反グローバリズム運動の理解を深められたのではないかと思う。

ポディーペインティングでは、参加者に、それぞれ差はあるであろう個人の思想を表現してもらおうと考えた。使う物は体のどこであれ、まったくの自由である。多くは手を使って表現したものの、



中には髪の毛をペンキまみれにするものもいた。大いに盛り上がり、無心で手形を重ねていく人、「Love and Peace」「No More Bomb!」と指で描く人、互いの顔に絵の具でペインティングをする人など等、各人がそれぞれの思いを紙の上に発散させていた。実際には「反体制とは?」などと、概念や活動の意味について議論をする機会はなかったが、各々がその胸の中に新たな視点を加えることが出来たと信じている

第6章

会議を終えて

会議参加者の感想
米国同時多発テロ事件に寄せて



会議参加者の感想

● 第53回日米学生会議「相互理解と『力』の獲得」はあっという間に過ぎ去ってしまった。2000年夏の終わりに実行委員として立候補してからの1年間、多くの仲間達とともに会議を創り上げてきた。自分がそれを目指し走りつづけてきた理念、「相互理解と『力』の獲得」とは何であったのだろうか。

第52回日米学生会議の終盤に大きな衝撃が日米学生会議という社会の中に走った。この衝撃は、分科会での議論をこなしたことに満足してしまい、われわれが大切な何かを忘れてしまっているのではないか、という疑問の投げかけから始まった。我々は世界に人種差別があることを知っている。我々は今地球上の生命が、環境汚染により蝕まれていることを知っている。本会議を通じ、こうした問題につき議論する機会もあった。しかし、今述べたような問題も含め、社会の中に顕在、または潜在している社会問題の解決を進め、世界の向上を図っていくのは次世代社会を構築していく我々以外にはありえない、という気概を我々は果たして持っているのだろうか。

この問いかけは鋭く、自分を含めた多くの参加者を圧倒したかのように思う。複雑な事情が絡み合い、怒り、悲しみ、自責、不信、拒絶が当事者の間を錯綜し、打ちのめした。ある種絶望的な状況の中、新たに発足した第53回日米学生会議実行委員会の精神的支柱となり、会議を創り上げていく指針となったのが「相互理解と『力』の獲得」であった。瀕死の状況下の新実行委員会が、この理念の下にすさまじいエネルギーを生み出してきた。それは1年間衰えることはなかったのではないか。

本会議を創り上げていく上で、自分が主眼をおいてきたのは、「『力』の獲得」である。理念の後半のこれが何を意味するのかは、自分の中で比較的早い段階ではっきりしていた。それは、多様なコミュニティからなる社会に潜在的、顕在的に散在する問題を発見し、認識する力、そしてそれらの問題を改善し、解決していく力を養っていくことである。こうした力へと自分を志向させるきっかけが第52回会議であり、そうした思いが第52回と第53回会議をつないでいたとを感じる。

今、第53回会議を終え、あらためて問い直したいのは「相互理解」である。この擦り切れるほど使われてきたフレーズに、最近まで自分はあまり強い思いを持つことはなかった。なぜならばそれが意味することはあまりにも明白で、当然のことのように思え、決り文句のようなこのフレーズをある種おまけのようなものと無意識に軽視していたからかもしれない。しかし、第52回会議が「『力』の獲得」の意義を自覚する会議であったのならば、第53回会議は「相互理解」の深い意味を自分に教えてくれた会議ではないかと感じている。

世界は不同意であふれている。異なる宗教、信条、政治的主張、歴史認識が溢れ、鋭い断裂が世界に走っている。しかし、人々はこれらの鋭い断裂の中で共存していかななくてはならない。この考えを、頭で理解することができても、全人格的に受け入れ、吸収していくことはきわめて困難なことではあるまいか。第53回会議は、会議の内部でのインターアクトや外部との接触の中で、たびたび自分にこの断裂を感じさせ、自分の世界に対する認識の変化を促してきた。

広島や沖縄での記憶が自分を捕らえてはなすことはない。大理石で作られた広島平和記念公園は沈

黙している。その公園を、炎天下の中一人ふらふらと歩く。さまざまな団体が公園周辺に集まり、声高に活動をしている。音楽が、歌が、座り込みが、メガホンを通した声が、沈黙する大理石の上を上滑りしている。何かがかみ合わない違和感が自分を襲う。第53回日米学生会議の活動も上滑りしているのか？沖縄での議論のはじめにある沖縄参加者が言った。「結局本土の人にとって沖縄の問題は他人事。」沖縄フォーラムでの聴衆の反応。「あなた達には沖縄の人たちの気持ちがまるでわかっていない。」「本質的な議論がなされていない。」われわれの活動のスタンスがわかってもらえなかったことにもどかしさと怒りを感じた。「もっとフリータイムを。」「いっしょに楽しく遊ぶ時間ももっとほしい。」参加者からこのような声を聞くとたびに自分達の企画運営方針を考えさせられた。しかし、そうした意見に素直に賛成できない、何かにこだわる自分を常に感じつつきてきた。「自分達は木ではない。感情を持った人間なんだ。」何に対して彼が怒っているのか。何が彼をここまで追い込んだのか。理解できないとともに打ちのめされた。「もはや一生会うことのない人たちとこれ以上何をすることが必要がある？」目の前で信じられないような発言がなされた。このような発言に対してはなにも言う気が起きなかった。

分科会やさまざまなイベントでの議論から、些細な会話まで、所々に断裂や不同意を感知した。上に断片的に記したのは何らかの断裂を強く意識した瞬間である。しかしながら、こうした断裂を強く感じる一方で、その断裂の克服へ向けた努力、そして克服を感じさせる瞬間を会議中目撃することもできた。コミュニケーションバリアに圧倒されながらも、そこから逃げることなく果敢に挑んでいこうという決意を見た。広島でのイベントの後、新聞社とのインタビューの中で、歴史認識の違いを超えた平和に対する強い想いや、展望を共有することのできる幾人かのアメリカ側参加者がいることを知った。そして、第54回日米学生会議への熱い想いを持った多くの人たち、またこの第53回会議を新たなスタートラインにそれぞれの道で更なる飛躍を決意する人たちがいることがわかった。このような仲間をみて、彼らの一部と語る中で、「相互理解と『力』の獲得」が充填されていくのを感じた。こうした仲間との強い連帯感はどこから生まれてきたのであろう。ただ単純に友情という言葉では説明することのできない連帯感であることは確かである。会議が終われば皆が異なった道を歩み始める。それでもこうした連帯感をもっているからこそ「仲間」といえるのだろう。

断裂した世界の中で、人々が共存していくためのきっかけとは何であろうか。それは「相互理解」へと志向する人間の意志の力なのではないか。相互理解とは決して、友人になることでもなく、ともに楽しい時間を過ごすことだけを意味するものではない。相手との間に越えることのできない断裂を抱えながらも、ともに何かをなし遂げようとする試みでもあるはずである。こうした営みこそが、これから世界へと更なる一步を踏み出していく我々にとって必要なのではないか。今自信を持っていることができる。日米学生会議は特定の政治的主張にコミットする団体になる必要はないし、これからもなるべきではない。互いに異なり、断裂や壁をもった人たちが集まってこそ、相互理解を志向する場として真の意味があるのではないか。

今、自分の中ではじめて「相互理解と『力』の獲得」がおぼろげながらもその全容をみせつつある。ずいぶん長い時間がかかったようにも思えるが、一瞬だったような気もする。確かなことは、会議をめぐる、忘れることのできない瞬間とともに、この理念が新たな自分を創り上げていくということだ。

藤井康次郎



● 戦争のない平和な世界。小さいころからぼんやり考えていた。途上国や戦地で貧困や飢餓に苦しむ何の罪もない無実の子供の写真をみて私は、何故神様が宇宙を作り、地球を作り、人間を作ったのかわからなくなった。何故人は争い、不平等な世界を作るのかと疑問になり、不信感に陥り、自分の無力さを感じていた。しかしいつからか自分が小さな存在である事を認め、その限定された範囲でどれだけ貢献できるか、与えられた貴重な「生」をどれだけ楽しめるかが大切なのだと考えるようになった。平和な世界はどうすれば訪れるのかを自分の足元から考えるようになった。そんな時日米学生会議に出会った。これだっ！と思った。実際、日米学生会議で与えられたものは非常に多かった。一つに、日米学生会議で平和について、戦争について、生きることについて考えることが出来た。特に広島、沖縄では今までにない様々な角度、視点から過去に起こったいわゆる事実とされているものを検証することが出来た。時に強烈な体験や印象には私は動揺した矛盾を感じた。広島での朝鮮被爆者のお話、沖縄のがまに入っの当時のお話は特に印象的だった。その後私は考えた。「それは一体どういうことなのか？何故？自分には何が出来るのか？」と。これから先のことを考えるようになった。簡単には解決できない複雑な問題がたくさん存在し、答えが見つからないもの、自分の中で消化し切れていないものがたくさんある。しかし色々なことを知り、考え始めたことは生涯で私の物事の捉え方、考え方に影響するだろう。貴重な体験が出来た。二つ目として、そして何よりも素晴らしかったのは、日米学生会議での様々な出逢いである。日米学生会議参加者には本当に魅力的で尊敬できる人が多い。向上しようとする意欲、寛大な心、とにかく面白い人、仲間を大切に、同時に他も受け入れる温かい雰囲気。いつも笑っていた。辛いと思った瞬間、そこには笑顔で助けてくれる仲間がいつも側にいた。私は感動し続け、刺激され続けた。その他にも日米学生会議を通して色々なものに出会った。奇想天外な考え、心地よいリズム、唄、「事実」、食べ物、地域。そして私は少し変わったと思う。生きる喜び、幸せをもっと実感するようになった。「花」を歌う沖縄人喜納昌吉さんがいる。「すべての武器を楽器に」とうたって平和に向けて音楽活動諸々をしている。一人の人間という小さな存在が大きな平和に向けて多くの人と、仲間と楽しんで活動している姿にまた勇気付けられた。エネルギーが沸いた。生きていることが本当に楽しい、嬉しいと思った。これから私は夢に向かってこの53回日米学生会議で得た貴重な経験を生かして生きたいと思う。本当に日米学生会議に参加できて良かった。本当にみんなと参加できて楽しかった。みんなありがとう。そして53回日米学生会議を実現するのに支援してくださった方々、講師の方々に本当に感謝したいです。ありがとうございました。54回日米学生会議を作ろうとしているみんな、がんばってね。

中尾真希

● 会議が終わって2週間が経ってもまだ会議を消化しきれていない自分がある。準備活動ではひたすら日米学生会議の理念を問いつづけた印象が強い。なぜ今日米学生会議なのか。自分達は社会に対して何ができるのか… 朝まで議論し続けた日々。1年間の準備活動。それだけに、春合宿に出会った瞬間、運命的なものを感じたのは無理もないのかもしれない。本会議中は一人一人の参加者に助けられ、日々の活動に向かっていった。でもそれは自分が他人を信頼するきっかけを掴んだ証であると思う。その過程で自分にとって大切なもの、かけがえのないものを見出していった。

準備活動、本会議を通じて会議が自分に与えた一番のインパクトは、人がもつ「可能性」の大きさ

である。沖縄フォーラムなどはそれを痛感させられた最たるイベントであった。去年の自分にとって「可能性」とは、言ってみれば、窓から射し込むわずかな光程度のニュアンスしか持たなかった。今では、その「可能性」が以前の何倍にも実現性のある、勇気溢れる言葉に聞こえてしまうのである。最後に、この貴重な経験を得る機会を与えてくれた参加者のみんなに感謝するとともに、日米学生会議をご支援いただいた、全ての関係者に心からお礼を申し上げたい。1年間、本当にありがとうございました。

三田重恭

● 「自由気儘に生きてやろう」と自然に、力まずに思えるようになったことが日米学生会議での最大の収穫だと思う。他人が自分のことをどう見ていようと、そんなことは、「勝手にしやがれ」、だ。本気なのか、冗談なのかわからないすれすれの生き方ってやつを、真剣に求めようと思う。権力とか、名声とかは、どうでもよいのだ。勝つとか負けるとか、そんな次元の話はもうたくさんだ。旅の途上で誰にも見取られずに死のうともそれはそれでいい。自分の欲しいものを欲しがること、これができれば万事において文句はないのだ。

日米学生会議の皆さん、各々胸のすくような愉快的な人生を送りましょう。皆ならできはずだと思う。皆さんとの出会いに感謝、深謝、致します。

布川俊彦

● 日米学生会議は「非日常」の体现である。それぞれが違う世界からやってきて、そして一ヶ月経った後に、またそれぞれの世界へ帰っていく。しかしながら、いかなる出会いも、そのような異なる世界の接触であるのだが、日米学生会議にはさらなる大きな醍醐味がある。日米学生会議は一ヶ月という比較的長期的なスパンの活動であるため、短期的な活動ならば可能となる個々の世界の保持、すなわち「その場限りであると思う我慢、『心の壁』というものを取り払わねばならず、世界の衝突が起る。それが、共通の価値観を築いているといわれる日本人どうしだけではなく、異文化圏に属するアメリカ人と共にするとなるとなさらである。お互い同じ部屋で過ごし、またそれぞれ何らかの思い出があり参加した日米学生会議において、妥協をしたまま一ヶ月間を過ごすということは、非常に酷なのである。その結果、真の相互理解という意味で、日米学生会議が機会として与えてくれたものは、とても有意義なものであった。

自分たちの仲間を自賛する訳ではないが、日米学生会議に参加してくる人たちは非常に「燃えている」人たちであると思うのである。貴重な夏休みの一ヶ月間を日米学生会議という内容もよくわからない活動に参加しようと思った人たちは、尋常ならざる人たちであるだろう。「燃えている」それぞれの個人が集まった結果、日米学生会議は、僕にとって自分の長所・短所を改めて気付かせてくれるものとなった。そして、自分がこれまで属してきた世界の小ささを感じさせた。確かに、今まで大学の枠内を超え、さまざまな活動にコミットしてきたつもりだったが、日米学生会議を遣り遂げた今となってみれば非常に狭く、また「所属していることに意義がある」という雰囲気は横行してしまいがちなものにすぎなかったのだと今思い気付かされる。日米学生会議はコンテンツが非常に重要であったし、それを詰めていくのも自分たちであった。さらに、アメリカ側参加者は物事を主導的かつ強引に押し進めていく傾向があった。その中で、活動に自分の思いをインプットしていくためには、周りに



訴えかけることが求められたし、それを納得させることが必要であった。日米学生会議終了後、新たな活動を始めた今、日米学生会議に鍛え上げられたものに感謝させられる。

本当は自分にとっての日米学生会議の意義をここで振り返りたくはなかった。日米学生会議の経験を早く過去にしなければならぬと思っている。でなければ、きっと日米学生会議というものからいつまでも Take-off できずに、この「夢」の中に居座ってしまうから。日米学生会議は8月23日に終了した。そして、僕らは日常の世界に戻って新たな一步を踏み出した。日米学生会議で得たものが何であったのかは、本当はよくわからない。それがわかるのはおそらく日米学生会議を振り返ったときではなく、新たな状況に身を置き、また新たな活動に参加したとき、おのずから思い起こされるものであろう。だが、もやもやしているが、日米学生会議後自分は大きく変わったと思う。いや、変わろうとしているのかもしれない。アメリカ側参加者が立命館大学に到着したとき感じたあの「恐怖感」、今度いかなるアメリカ人に会うときもあれほどの恐怖感を感じることはもうないであろう。エンパワーメントを続けなければならないと思うこの「切迫感」、大切なものを僕の中に植え付けてくれたと思う。ただ一つ、日米学生会議で良い友を得ることができたと思うと同時に、良いライバル達に巡り会えたと今でも確信できる。10年後、20年後、それぞれがさらに成長した姿を直接的に、間接的に見せあうことをすごく楽しみにしている。そのとき、日米学生会議で自分が何を得たのかを語るができるよう、これからの人生に精進したい。

夫馬賢治

● 人の性格、性質というものが、いったい何時、どの段階で、どのように形成されるのか、人の性格、性質というものが、いったい何時、どの段階で、どのように形成されるのか、私は知らない。けれど、明らかに、それは存在している。生まれてから今に到るまでの24年間、自分の辿ってきた道を振り返ると、何かしら、一定の傾向が見受けられるように思う。一言で言うならば、それは、安全な方へ、楽な方へと向かう傾向であり、結局自分という人間の幅を狭めていくものであった。自分と異質なものと交わり、自分が揺るがされる（これが自分だと断定できるほどの“自分”を持っていたとするならば）のを避けてきたのかもしれない。ともかく、未知なものと出会った時に、それを理解し、整理し受け入れるまでに感じる、あのなんとも言えず、もどかしいような感じ、時には不気味で、時には不快感であったりするかもしれない、そんな自分の心の揺れを、私は好まなかった。日米学生会議に参加した動機を尋ねられる度、私は世間から隔離された医学部という空間を離れて社会勉強をしたかったから、と答えていた。けれど、この機会に正面から取り組みたかったのは、本当は、そんな表面的な学問的なことよりも、自分がいつのまにか何重にも堅固に張り巡らせてしまった自分の周りの壁、そこから抜け出したかった、そういった個人レベルの問題だったのかもしれない。

日米学生会議の中で過ごした、この夏の一ヶ月間、私は、平凡な日常を送っている時の何倍も、自分の感情が揺れ動くのをみた。それは、決して心地いいものばかりではなかったが、新たなものが生まれる前の胎動にも似て、変化を予感させるものであった。ただ、ここでいう変化は、自分が異質なものと同化していくという意味ではない。異質なものは、理解はしても、やはり自分とは異質であると認識させられることも多かった。だが、異質さに戸惑うことなく、その異質であるという事実から、逆に自己のアイデンティティを形成していく強さを私は学んだのではないだろうか。

入江美美

● 大学1年を終え、2年を迎えようとしていたとき、自分の将来への道がどうしても切り開けず、ひたすら悩んでいた時期があった。そんなとき、何かきっかけをつかもうと、自分の将来に向けて何かヒントを得ようと、考えたのが日米学生会議への応募だった。しかし、不安だった。様々な人が集まってくる集団の中で1ヶ月間もうまくやっていける自信がなかった。でも、それでも何かを得たかった。日米学生会議への参加は、ある意味、自分への挑戦でもあった。

そして半年後、会議が終わった今、参加してよかったと心の底から思っている。会議で得たものは、今その全てを消化しきれているとは思わないが、たくさんある。第一に挙げられるのは、ときには衝突を起こしながらも、どんなことについても真剣に話し合え、互いに励ましあえる友達を得られたことである。本当の意味での友情とは、いつも互いを誉め合い、優しいことを言うのでは必ずしもなく、いかに自分の思っていることを相手に素直に、率直に伝えられるか、だということを学んだ。会議を通して知り合い、行動を共にした友達は、会議が終わった今でも心の支えになっている。

第2に得たものは、今までそれほど関心がなかった社会の問題について深く考える機会を与えられ、自分の中で問題意識が高まったということである。それは、大学でただ単に講義を聞き、ノートを取る作業をして過ごすだけでは絶対に身につかないことであり、様々な社会問題を直に扱う学生会議ならではの成果だったと思う。確かに、学生会議は所詮学生によるものだし、学生が社会に対して発信することで社会を変えられるとは思わない。しかし、参加者や人々の問題意識を高めることができたなら、それは大きな成果だったといえると思う。

そして、私が今回の日米学生会議で得た最大のもの。それは、何よりも、自分が日米学生会議に応募した当初の目的を達成できたこと、すなわち自分の将来に向けて前進するための土台を得たことである。人は他者と接することで自己が見えてくるというのが、会議ではまさにこの繰り返しだった。様々なバックグラウンドを持つ人達と接し、様々な活動を経ることによって、自分の今まで気付かなかった新たな面に気づき、また自分についてより理解できるようになった。それと同時に、自分に足りないもの、これから努力して獲得していかななくてはならないものにもたくさん気付かされた。今回の会議では、これからの自分、将来の自分にとって、この上なく貴重で、重要な意味を含む経験をしたと確信している。

出浦直子

● “Mutual Understanding and Empowerment” 「相互理解、そして『力』の獲得」。それが第53回日米学生会議の理念であり、会議参加者が挑戦すべき理想だった。会議が終わった今だから言えるが、実際私は、会議に参加するどころか選考試験に応募することさえためらっていた。元来、引っ込み思案な私は、人とのコミュニケーションが得意ではない。自分の殻の中、もしくは極めて仲のよい友人や家族といった自分の良く知る環境の中で暮らし、活動する方を好む。だから、コミュニケーション能力に優れた人、自分を異文化の中に進んで置き、そこでの接触を楽しめる人のことを心底うらやましく思う。こんな私に歴史ある「日米学生会議」の日本側代表の一員として参加する資格があるか？自分の中での答えは「NO」だった。しかし、私は応募用紙を送付した。なぜか。

会議への参加は私にとって「自分への挑戦」に他ならなかった。「挑戦」とは文字通り、「戦いを挑むこと」である。例えば、ボクシングでのチャンピオンベルトへの挑戦。自分の上には立っているチャ



ンピオンを倒し、その栄光を手に入れるため、挑戦者は日々汗と血と涙を渾然一体にして流しながら黙々と辛く長い練習に耐える。だからこそ、苦行の末に手に入れたベルトは格別の意味を持つのだろう。私はこの夏、自分自身に戦いを挑んだ。正確に言えば、応募用紙を送付した時点で自分へと果たし状を送ったことになるのだろう。期限のない試練。勝敗のない戦い。逃げ場もない。比喩的に表すならば、自分の放ったジャブはそのまま自分の顔面へとヒットし、とどめのアッパーカットも同様に自分の脳髓を揺らす。傍からみれば自虐的とも思える光景が繰り返される。以上の事実を知りながら、私はあえてそれを望み、進んで自らをリングへと上げた。自分がどこまでやれるかを確かめるために。打ちのめされることを期待しながら。

更なる脱線を許して欲しい。誰しも「死に直面した人間ほど、生の素晴らしさを痛感する」ということを一度は耳にしたことがあるはず。言い換えるならば、日常の生活から、非日常の事態へと引きずり込まれた人間はその立場上、「日常」という概念の意味を改めて問い直さざるを得なくなるということであろう。死を恐れ、知らないでおこうとすればするほど、眼前にある生に対しても盲目になっていくのではないだろうか。私はそう感じている。このようなわかりにくい例を用いて私が何を言いたいのかというと、つまり自分という存在の真の姿を知るためにはその影の部分に対しても注目をし、そこから積極的に生きるための何かを学び取っていくことが必要ではないかということ。自分が好きなところ、チャームポイントばかりに気をとられ、そこを伸ばそうとするだけでは、真の成長は成し遂げられない。それだけではなく、自分が普段気づいてもいないような弱い部分を引きずり出しては白日の下に曝し、その事実の前に立って「さてどうしようか」と考えることも同じくらい重要なのではないだろうか。ほとんどの人はそのような経験を一度はしていると思うので理解できると思うが、この作業ほど辛いものはない。まさに、自分で自分を攻撃しているようなものだ。しかし、その作業の後のなんともいえない達成感も同様に誰しもが体験済みのはずである。

私は2000年の夏、幸運にも上記のような自分と向き合う機会に何度も巡り合うことができた。それは、自己との対話を通してだけでなく、他者との交流をも通じてである。自分とは違う何かを持つ人との交流、それは時に安らぎをもたらし、時に強烈な不快感をもたらす。そのような「異文化」との接触の中で私は自分の長所や短所を再確認し、自分が全く知らなかった面にも気づくことができた。無数の痛みとともに。成長の階段を一段上ったのか、降りたのかは今の私にはまだ定かでないが、自分の殻の限界が広がったことは確かだ。

応募用紙を送付した時、私は自分の中になんらかの変化が起こることを期待した。その期待は実現し、さらに「素晴らしい人や風景や時間との出会い」というおまけまでも付いてきた。ひょっとすると少しは語学力もアップしたのかもしれない。しかし、私が第53回日米学生会議を何よりも貴重に思うのは、「異質なものととの出会い」を楽しむ余裕を自分の中に植え付けることが出来たからである。それは“Mutual Understanding”「相互理解」という極めて難解な課題へ自分を向かわせる勇気と、それに付随する様々な『力』の獲得“Empowerment”を可能にした。

最後になったが、生涯に一度味わえるかどうかの素晴らしい夏休みを私たち参加者にプレゼントしてくれた第53回日米学生会議実行委員会、またかけがえのないたくさんの方の事を共有させてくれた参加者のみんなに感謝と敬意の気持ちを表したい。本当にありがとう。

この会議に参加できた誇りを胸に、私はこれからも前を向いて生きていく。

千代明弘

● 第53回日米学生会議は日本国内で開催された。具体的に時系列で追っていくと京都、広島、沖縄、東京という順序でまわっていくことになった。

京都では、主に分科会としての活動が軸となり、ビジネス分科会に属する私は京都の伝統産業である西陣織やふとん産業にフィールドトリップに赴いた。そこでは、グローバル化が進展する世界でいかに伝統産業が生き残りをかけてゆかかということを考え、議論していった。

広島では、毎年8月6日に開催される平和式典に出席すると共に、被爆者の方の体験談を伺う機会や米国側参加者と「過去の戦争」に対しての意見交換を行う機会が与えられ非常に考え深く、意味深いものであった。

沖縄では、沖縄フォーラム参加者である学生を新たに迎え、フォーラムに向けて「沖縄基地問題」を題材に沖縄の未来についての提案を重ねていった。また、「ひめゆりの塔」や「ガマ」を訪れたり、お話を伺うことで沖縄戦の激しさ、痛ましさを心から痛感した。その他、嘉手納米軍基地内におけるホームステイなど、日本国に住む日本人であっても意外と深く考えたり、体験したことのないことを体験でき、とても貴重であったと思う。

そして東京ではそれらを総括し、東京フォーラムで発表するためにそれぞれのグループにおいて更に議論を煮詰めていった。

今回の日米学生会議の理念は「グローバル社会における日米双方の可能性の探求」である。一見、「グローバル社会」というのは世界、つまり日本の外に出てみなければ肌で感じられないように思われる。しかし、日本国内が生産、創造するものも「グローバル社会」を構成するひとつの要素であり、そこから見るグローバル社会がまさにリアリティを帯びたグローバリズムであると思う。第53回日米学生会議は数々の貴重な機会を通してそのような新たな視点を与えてくれた。また、しかしここで忘れてはいけないのが、そのような大切な視点を与えてくれた学生会議自体も各々の学生という単体要素で構成されたものであり、私達の成果、創造物であるということだろう。

石川一郎

● 実行委員としてこの会議に参加すること。それは誰がなんと言おうとまったく印象の違うものに違いない。自分が動かなければ会議が動かない、会議がめちゃくちゃになってしまう。いつもそんなプレッシャーに襲われながら一年間過ごしてきた。もちろんそんなマイナスなものだけではないが…1年前の会議の終わりに大混乱がおき、実行委員会は破綻寸前の銀行のような状態からはじまった。

実行委員人数は、ホスト国の日本開催にかかわらず1人減って7人。誰も何もわからない状態だった。過去の報告書をあさって読み、まず何からやろうとため息をついていた日々が目につかぶように思い出される。僕の仕事は沖縄サイトコーディネーターと選考だった。といっても、7人の実行委員会。仕事はみんなでシェアしながら広報、財務、選考、出版…とやってきたわけだ。毎週土曜は四谷でミーティング。決して快適な環境ではなかったし、休みの土曜日にもかかわらず学校に行く時間よりも早く起きなければならないという矛盾に悩まされながらも、何度も遅刻をし、仲間の白眼視を受けたものだったが、それでも今思えばすごく楽しかった。



何かにもまっすぐにコミットするという事はなかなかありそうでない。昔は狂ったように剣道に明け暮れていた日もあったけど、まだ未熟だったせいとか何の疑問にもぶつからずがんばっていたような気がする。しかし、実行委員としての1年間は常に僕に対し深い疑問を投げかけた。僕という人間は浮気性らしく、ひとつの事を始めてもこっちへフラフラあっちへフラフラといった感じでなかなか集中できない。そのくせやりたいことだけは多いものだからたちが悪い。

どうにかこうにか進学できた学科の勉強は絶対おろそかにしたくない。それでも沖縄サイトというはるか離れた場所で何のコンネクションもない状態から始まった仕事は、否が応でも私生活に進入してきた。つるんでいた友達からは週末のお誘いをあまりに頻繁にきるものだからあまり誘われなくなり、好きだった読書の時間も仕事か睡眠の時間に変身した。多くの友達は、「何でそんなまじめ腐ったことにそんな時間かけてんの？」みたいな感じで僕を見ていたのだろう。しょっちゅうブルブル言う携帯電話のせいで、太もも痺れ症という新たな病気ができそうだった。

にもかかわらず、生活は充実していた。もちろん切り捨てたものは本当に多い。それでも得たものはそれ以上に多かった。それが何かは良くわからない、というより例を挙げていても「何だ、そんなものか。」と思われるだろうから挙げないが、これだけは筆舌に尽くせない「何か大切なもの」なのである。

でもやっぱり一番良かったのは、実行委員の仲間と苦難と喜びを共有できたことだ。ほんとに僕は実行委員のみんなが大好きだ。僕は偽善は嫌いだけど、これは本当のこと。キャラぞろいの面子で毎回ミーティングは「アラシ」。ミーティングは、朝から夕方まで、時には徹夜でやったものだ。

なにかへまをやってもきっとみんなが助けてくれる、と信じて思い切っているいろいろできた。中でも一番は、Student Forum in Okinawa 2001だ。何か今までに無いでっかいことをやりたい。自分たちに対し、社会に対し、新しい力を送り込むような企画を立てよう。そんな感じで思いついた企画である。この企画だけに関して、思えばずいぶんと本会議に至るまではいろんなことがあった。ひよんなきっかけからベンチャービジネスの人々に沖縄に連れて行ってもらい爆発的にコネが広がったり、いさかきがあったり、実行委員の中でも意見が対立したり、沖縄にすばらしい友達ができたり、那覇のホテルで講演をさせられたこともあったりしてほんといい経験だった。

2月から始まった選考もこれまた大変だった。他の実行委員も就活やらテストでてんてこ舞いのなか、その他の仕事と平行して一番つらいシーズンだったかもしれない。基準を決めるにも何日つぶしたとか。でも、その甲斐あって、すばらしいみんなに出会うことができた。「実行委員」としてご挨拶したどっきどっきの春合宿を終えると本会議まではジェットコースター。

学校の勉強はだんだんハードになり、一方沖縄サイトは混迷の様相を呈し、もう何がなんだかわからない。そんなときに本当にいろんな人に助けてもらった。実行委員のみんなは忙しいのにもかかわらず手伝いを申し出てくれたし、沖縄サイトスタッフのみんながいろいろアイデアをくれて盛り上げてくれた。

何度も言うようだが、つらかったけど充実していた。見えないいろいろな人の手助けにも支えられていたお陰で、素直に楽しかった。会議が近づくにつれて忙しさと不安が高まり、気が狂いそうになったこともあったが、みんなの忙しさを考えたり、手伝ってくれている人のことを考えると、そんな

ことを案じている自分の小ささを嫌悪してしまう。

日米学生会議で深く結びつく人間関係は、「人から学ぶこと」「人に写る自分の像を見て自己改善を図ること」を教えてくれる。人を知れば知るほど、自分に無いものを持っていることがわかり、自分の自身を打ち崩す。失敗をすればするほど、自分にかけていたものが見えてくる。自分が困れば困るほど、人のやさしさが見えてくる。日米学生会議での一年間はそのすべての体現そのものだった。

本会議が始まり、アメリカ側参加者が到着する。京都と広島はひたすら自分のサイトの準備に追われる。いっぱいいっぱいになればなるほど周りが見えなくなって、中途半端なことをしてしまう。日米学生会議は本当にいろいろなものを僕に与えてくれたが、ただひとつ「満足」という言葉を与えることは無かった。もっとできたはずだ。最高のものはもっと先にある。そう思って必死でがんばった。たとえ何かが成功しても、それが成功だったと「満足」してしまったらそこから得られるものは半減である。何もペッシミスティックな意味ではない。日米学生会議は間違いなく僕にとっては成功なのである。ただ、「満足」ではないのだ。

沖縄サイトコーディネーションはあまりに深い教訓と味のある思い出を残してくれた。自分の限界を教え、自分の自信を見事に打ち崩してくれた。それと同時にたくさんの人たちの協力と思いやりにあずかった。なによりも、最高の沖縄係のみんなとボランティアで協力してくれた日米学生会議参加者とがんばった準備とサイト運営は最高の宝物である。1人でできないこともみんなであれば何とかなる。当たり前なことだが、実を持って体験した自分にとっては宝物なのだ。それは決して人に見せるためのものではない、心の中の秘宝なのである。

ふとしたアイデアから沖縄学生フォーラムが形になっていくプロセスのすべてをはじめから終わりまで見た人間は世の中に僕1人しかいない。いろいろな人々の時間を犠牲にし、いろいろな人々を困難に巻き込んでしまった。あのフォーラムがどれだけの人たちにどれだけのインパクトを与えたのか、それはわからない。ただ、ひとつ確かなことは、みんなの力であのフォーラムが成功したということ。たくさんの人が「参加してよかった」「フォーラムを開催してくれて良かった」と言ってくれたことが何よりの証拠である。あれだけの大規模で、しかも「本土-アメリカ-沖縄」というまったく新しいコンセプトの国際会議が、言葉の困難にもかかわらず、「学生の手によって」行われたということが何を意味するのか、もう一度みんなに考えてほしいと思う。

みんなが動きを起こさないから、自分も動きを起こさない。そんな社会の中で、こうしたひとつの動きが社会を刺激し、そこから大きな反響を得ることができる。それは小さな動きであったかもしれない。しかしそれはひとつの波であった。それぞれが波の粒子として、他の物体に対し動きを与える主体となれたのだ。

沖縄での経験が僕の心の中に結晶のように残る。それは決してきれいなものではない。苦勞と喜び、汗と涙、悔しさと充実感の混合物である。もう少し僕のキャパがでかかったら、きっともっとすばらしい沖縄サイトができただろう。満足に終わりはない。でもあれが自分にできうる精一杯だったのかもしれない。そんな僕にもかかわらず助けてくれた、いやそんな情けない自分だからこそ助けてくれたのかもしれないが、いずれにせよ沖縄サイトを手伝ってくれたみんなには格別の感謝をささげたいと思う。



テーブルやスペシャルトピックでもいろいろなことを学んだ。多くは人格や人間関係から学んだ。学んでばかりで逆にあまり自分が役に立てなかった気もする。そういう意味では本当に悔しい。日本語ではえらそうに意見を言える自分が、英語になるとやたら慎重に当たり前のことしか言えなくなるのが歯がゆいのだ。そんな歯がゆさにもかかわらず、数名のアメリカ側参加者とは本当の意味で仲良くなれた。去年もさることながら、異文化・異言語の人間とともに暮らすということは、時として難しく、楽しいことでもある。僕がうれしかったのは数名のアメリカ側参加者とは表面的に終わらない話ができたことである。自分も少しは進歩したものだと思ったが、コミュニケーションをうまく取れない場面も多く、そういうときは英語圏に生まれなかったことを本気で恨めしく思うのであった。

「力」の獲得とは、決して「力」がこちらに向かってくるということではない。もがき苦しんでもぎ取るものである。これが僕の意見だ。逃げていては何も得られない。自分が上にたつたつもりでいても何も得られない。何かをかけている自分に愕然とする、そしてそれを渴望し、掴み取る。そうしたプロセスそのものがこの会議ではなかったらどうか。

実は僕はこの会議のテーマがすごく好きだ。「力」というカッコつきの言葉はたしか「理念合宿」なる地獄のような合宿でみんなでひねり出したものだった。「力」とは個人で定義するもの、ということである。会議で何を得たか、なんて正直答えられるようなものではない。当然である。「英語力」など一言で答えられたとしたら、「それだけ？」と聞き返されるのが落ちである。

僕もこの会議から、本当にいろいろなものを得た。多くを学び、掴み取ったつもりである。でもそれが何かはまだわからない。わかるのは掴み取ったときの感情とそのプロセスの思い出のみである。得たものを文字にあらわすとしたらやっぱり「力」なのである。つまり、「語りえぬ何か」なのである。だからこれについては沈黙することにする。自分の心の中で熟成され、しだいに自分のものとなってゆくのを待つのみである。

僕の日米学生会議生活の一年間はこうして終わった。いろいろ失ったものはあるけど、ほんとうに日米学生会議をやっていた、しかも2回も参加できて良かったと思う。失ったものは得たものに比べてあまりにも小さかった。いや得たものが大きすぎたというのが適当だろう。だが、日米学生会議は終わってしまった。まるで嵐が過ぎ去ったような気持ちだ。終わったあと、何が起こったのか一瞬わからなくなった。ほとんど毎日のように会っていた実行委員の仲間ともこれからミーティングをする機会が無くなる。毎日一緒に生活していたアメリカ側参加者が、日本側参加者までもがどこかに消えてしまって、また再び全員が集まることは無いかもしれないのだ。

そうおもうと、まるでひとつの壮大な物語が終わってしまったかのような錯覚に襲われる。心に残るフィルムは、上映が終わったあとも感傷がのこり、先が知りたくなくてつい意味の無いロールを眺めて余韻に浸ってしまうものだ。ただ、これがひとつ映画と違う点は、自分がそれを演じたということである。しかもがむしゃらに精一杯。整理をつけようとしたってできこないのである。それはさまざまなエッセンスの混沌であり、忘却以外に整理する手段は無い。

映画は思い出となり、次第に忘却されるかもしれない。しかし、自分の「演じた」事実は即自分のものになり人格の一部に蓄積されるではないか。だとするならば僕は決して忘却されることの無い壮大な物語を手に入れたことになる。

だが実際のところ余韻に浸りつつも、もう1人の自分はもう先へ進もうとしている。去年の実行委員が感想文の中で言っていた言葉を借りるならば、「もうおなかいっぱい」なのである。一年間、意志の弱い自分にしては、あまり妥協せずに良くやったんじゃないかと思う。改善の点はあってもこれが精一杯だったとしたら仕方の無いことである。これからの自分に期待したいところだ。それよりも予期していたよりもあまりにも多くのものを得すぎて消化不良を起こしそうである。

だから前に進まねばならない。すこし寂しいことだが第53回日米学生会議はもう終わってしまったのである。ただ、それは物語として個々人に吸収され受け継がれていくものであって正式には終わりではない。これからが獲得した「力」を活かしていくスタートなのであり、日米学生会議の意味はここから体现されてゆくのである。

長い文章になってしまった。ここまで読んでくれた奇特な方は少ないと思われるが、よんでいただけたことに感謝している。そして最後に53回日米学生会議を応援してくれた皆さんや日米学生会議参加者のみんなに心からお礼を言いたい。本当にありがとう。

織田健太郎

● はじめから脱線するが、僕が日米学生会議の実行委員をしようとおもったとき、2年生ながらヨットサークルの幹部であった。そして、このヨットサークルに入っていると実行委員はできない。そして事実、サークルのほうは自分にとって非常に重要なものであり、またそこにおいても素晴らしい仲間がいる。しかし、なぜヨットの仲間迷惑をかけ、辞めることにしてまで実行委員をやろうと思ったのか、さらにはなぜ実行委員を続けることができたのであろうか。

それは、自分が第52回会議を通して感じたことが決定的であった。自分が見えていたとおもっていたものが、実は見えていなかったり、理解していなかったり、所詮他人事でおわっていたということである。つまり、それまでは自分が持つ基準に満足していた。いや、満足しているということにも気づかないでいる自分の存在があった。第52回会議は、僕に対して「挑戦状」を突きつけた。なにが「常識的で」、なにが「良いか」という基準。それを考え直すこと、「自分」で考え直すということが自分にとっては非常に重要なこととなった。この機会を得たということが、去年の会議を通した自分にとっての「『力』の獲得である」。そして、この問いかけを継続していくことが、第53回会議をつくっていくうえでの、そしてそれ以降の自分の「『力』の獲得」の過程である。この問いかけは永遠に終わることはない。自分は、決して現状に満足しない。満足しないから、落ち着かない。しかし、落ち着いてしまったら、それで「自分」はゲームオーバーであろう。あとは機械と変わらない。

僕は、一ヶ月の会議開催のために一年間、学校に行っては事務所に行って、別の場所に行ってはまた学校に戻ってという生活を、毎週土曜日はミーティング、そしてときとしては泊りがけの合宿などをひたすら続けたのである。他の実行委員は「大変だ」とか「早く終わらせたい」ということをよく口にしてはいたが、僕にとっては、議論に参加しているにしろ、していないにしろ、その空間がなんとも心地よかった。夜の九時に事務所を出て、それでも次の朝にはまたミーティングがあったりする。確かに行き詰まりもするし、決裂もする。しかし、向かっているところは似ているのだという確信があった。この同じところ（それは決して会議を形として成功させるということだけでなく、自分たちの掲げる理念において成功させるという意味である）に向かっているという確信こそが、その心地よ



さだったのかもしれない。この心地よさがまさにさっきあげた「満足」感であるという反論があるかもしれないが、この心地よさは共通のゴールを持った仲間がいるという心地よさなのであろう。決して、目的を失ったわけではない。実行委員会の皆のバイタリティーと活力。楽しく騒ぐことができ、かつ尊敬できる仲間たち。こんないい仲間に出会えたことは、最高である。

今年の夏は毎日がめまぐるしく過ぎていった。過ぎていったというより、走り抜けていったというほうが正しいであろう。一日一日が早いといえば早く、長いといえば長い。一か月、四か所。毎日非常に充実していて忙しかったということであろうか。

実行委員として今回の会議に参加し、食欲に何でも吸収しようとした。京都、広島、沖縄、東京各地で自分なりに得たものがあつた。実感としては、会議中も忙しすぎて正直なところ「これを得た」とか「楽しめた」と一言で言いくれぬ。参加者間の交流を深めたかつたし、会議内容を消化したいという気持ちもある。満足にできなかったことが多かったのは、自分としては残念だ。しかし、そんな中でも、実行委員という立場から見ると他の参加者が去年自分が参加者として感じてくれればよいという気持ちもあつた。一参加者のスタンスからしても、決して悲観視するほどのものではない。

自分にとって、広島の「平和への誓い」一連プログラムは特に充実していた。さまざまな講演者のお話、参加者間でのディスカッションをとおして、「平和」というもの、その貴重さを体感させられた。56年前に自分がいるまさにその場所に原爆が落とされたということについて考えると、自分がそこに立っていることが不思議であつた。「戦争」と「平和」というものについて、そして過去のことをいかに現在において想起するか、記憶するかということに考えさせられた。広島滞在最終日の夜の灯籠流しは、一連プログラムのあと、非常に感慨深いものがあつた。川に流れていく灯籠を眺めながら、今日ある平和に感謝し、戦争がもたらす悲劇を常に認識し、決して繰り返してはならないという誓いを心に刻んだ。

沖縄における、フォーラムもまた自分にとって大きなものになるはずであつた。しかし、実体としては運営で手一杯になり、もっとコンテンツに集中したかつたという気持ちも多分にある。とはいえ、それまで沖縄というところに大した関心もなく、問題意識ももっていなかつた自分にとっては貴重な体験になつた。平和学習で入つたガマは特に記憶に残るものであつた。ガマに入り懐中電灯を一気に消したときには、あまりにも暗すぎて何の実感もわなくなつてしまつた。そのときのガイドをしてくださったかたの日本語を英語に通訳する過程であまりの生々しさにつまってしまうことも幾度とあつた。ガマにおいて非常なる体験をしたが、それで何が理解できたともおもわぬ。ただ、過去と向き合うというのは、アイデンティティなどという話とはまた違う次元で大変な作業であるなということを確認した。また沖縄でさまざまな人の力によってこのイベントがおこなわれたことによって、さまざまな反応があつたが、その反応を引き出せただけでも、何かの前進にはなるのかなとも思う。

会議がおわつて、1、2日たつとあわただしさがへり、疲れていることに気付いた。どうしようもない脱力感があつた。会議で何をしたのか、何を持ち帰つたのか分からなかつた。それでもやはり変わらないものはありつづけた。

日米学生会議の目的は「相互理解と『力』の獲得」、この理念にあると確信したから第53回会議を創つていこうと決めたのは、冒頭で述べたとおりである。自分自身にとってのチャレンジであり、自

分にとってはそれを通じて社会を変えるために何かしたいという気持ちがあった。第52回会議で自分が得たものはかけがえのないものであったと同時に消化しきれないものであった。自分にとって一年間の会議の企画・運営は今年の会議を消化するプロセスと新しい会議を創っていくというプロセスの同時進行であった。それゆえに、第53回会議の内容は第52回会議と全く違うものであるのだが、そこに連続性がある。第53回会議を終え、私にとっての日米学生会議は終わる。しかし、私はこの52、そして53回会議を通して、得たもの、見つけたもの、自分への課題、社会への個人としての責任、そういったものを自分で持ち続け、どのようなフィールドでどのようにかは分からないが、社会の向上のために貢献していきたい。そのおもいは強く残る。そして、願わくは他の参加者もこのような気持ちないし、各自で感じるものがあったことである。

山下淳一

● …思えば1ヶ月前、本会議のスタート地点であった京都に向かう私の心は真っ白で、まるでどこに辿り着くか分からない“どこでもドア”を開ける心境であった。実際に、今年の夏辿り着いた場所は、日本であって日本でない日米学生会議参加者だけが知っている「不思議な空間」であった。一緒にいたみんなも不思議なパワーの持ち主ばかりで、毎日次々と出てくる新たな発見に、好奇心旺盛な私としては寝る時間が惜しいと思える程楽しく貴重な夏だった。普段は何でもない普通の光景も、みんなが持っている“個性という道具”で全然違って見えてきたりして、本当にこの夏は日米学生会議という名の“ドラえもん”に会ったという表現がぴったりかもしれない。

帰りの新幹線で1人になった時、周りにみんながいないのがとても不自然で、みんなのざわめきがとても恋しくなった。行きは軽かったカバンも2倍となり、真っ白だった私の心もカラフルに染まって、たくさんの思い出でいっぱいになっていた。本当にこの1ヶ月の間に私の中で“何か”が変わったようだ。ウトウトしていたらすぐに名古屋に到着し、目の前にはいつもの見慣れた街並みがあった。心が現実にすんなり戻れず、すべては夢だったのかな？とふと思った。

…現実の世界に戻るにはまだまだ時間がかかりそうだ。でもこの熱い気持ちはずっととっておきたい、そう思っている。この夏出会った人々のお陰で、日本の各地は勿論のこと、アメリカもとても近く感じられるようになった。この会議で学んだことを少しずつ消化・吸収しながら、“It is a small world after all”であるとしみじみ感じている今日この頃。第53回日米学生会議の理念であった「相互理解、そして「力」の獲得」は私の中でまだまだ進行形であり、今後も追い求めていきたいテーマである。最後に、2001夏の思い出を共有した仲間達へ。たくさんの思い出と温かい気持ちをありがとう。みんなに出会えたことが日米学生会議に参加した最も大きな収穫でした。

宇佐美友加

● あっという間の一ヶ月でした。笑いと涙が入りまじったあの別れの時がまだ記憶に鮮明です。また会おうね！という言葉もありますが、本当にやってよかったなあ！という胸に確固たる何かを感じてその充実感を一つの新たな力にしようといういささかの希望もあったのではないのでしょうか。少なくとも僕にはその両方がありました。そして将来、皆と会うにしろ会わないにしろ、その一ヶ月で育ててきた数々の友情はきっと自分を成長させ、他人を成長させることができた僕は信じています。今振り返ってみれば、僕たちは何をしたかは細かいことまではっきり覚えていませんが、ただ覚えて



いるのは皆の笑顔、それに笑ってしまうかもしれないけど皆の食べっぷりでした。京都の精進料理、広島島の広島焼き、沖縄のスイカ、東京の居酒屋食い等々…。ひょっとしたら日米学生会議は食べることで始まって食べることで終わったと言えるかもしれません。そして僕に日米学生会議で学んだことは何だと言わせなければならぬなら、“食べ続けること”と答えるでしょう。日米学生会議を通じて僕は食べ続けることの大切さを再び思い知らされました。まず分科会とスペシャルトピックは知識を“食べ続けること”を教えてくださいました。新たな知識だけでなく新しい観点、ときには正反対の議論をいやでもどんどん食い入れ、そして自らのものと戦わせて消化していくことこそ本当の知になるものです。中途半端な食べ方、ろくでもない消化の仕方などはかえっていろんな偏見を作ってしまうのです。だから僕は食べ続けなくてはと思いました。日米学生会議中にアメリカ側参加者、日本側参加者、沖縄の学生、皆と一緒に過ごした濃密な時間の中で、お互いのユーモア、恋愛観、人生観と触れ合いそれらがじわじわと自分のなかで広がっていて、いつの間にか自分もそれに多少染まってしまったようでした。まさに個人が交わる空間に足し算的な結果より更に上回る何かが生まれてきたような気がしました。それも僕はもりもり“食べていきました”。53回の日米学生会議は幕を閉じたが、我々は常に“食べること”、そして“消化すること”を忘れずに生きていきたいという気持ちさえあれば、日米学生会議の主旨：真の相互理解というものがきっと実現できると信じています。 **Edwin Ng**

● 「相互理解と力の獲得」を理念に掲げた第53回日米学生会議が終わった。

両国の参加者が真に日米の学生を代表する集団であったかどうかはさておき、とにかくわれわれは相互理解の一步を踏み出すことができた。個人レベルでも、集団レベルでも、当初お互いに貼り付けあっていたレッテルを、一ヶ月の議論や発表、イベントやインフォーマルな付き合いの中で、より正しい「理解」に換えていく事ができた。また、自然のうちに自らに限界を作って押さえ込んできた自分に気づき、それを取り払う力を獲得した（私にとってこの一ヶ月における「力」とは、こういう定義だった）。私は、もっとマクロ的な、会議全体として相互理解や力を獲得していく状況をぼんやりと想像していたが、実際は個人個人のミクロ的集積としての理念の達成がそこにはあった。こうしたグラスルーツの交流こそが、日米学生会議の本質のひとつである。広島サイトで、歴史教科書問題のこじれで日韓の学生交流がにわかに断絶しているという問題がグループディスカッションの中で触れられたが、逆にそういった時こそボトムアップの相互理解が必要とされるのだ。

では何を理解したのか。日米の社会、歴史的背景、文化、価値観といった総体的な側面から、両国の学生気質の違いまで、さまざまだ。「違い」と書いたが、実は違いよりもよほど共通点の方が多かったことに、驚いた。アメリカ側参加者は、静かな人でも発言の機会があれば、堂々と自分の意見を述べる。（私は、自分の態度を反省するとともに、日本社会で議論をする機会がいかに少ないかを再確認させられた。特に、妥協や物別れでない議論だ）その点を除けばほとんど違いは無いといっても良かった。「人類みな兄弟」的な喜びに浸りつつも、同時に、会議のテーマであったグローバル化がもたらした無味乾燥な画一化ととれぬことも無かった。ここで私の頭の中では、日米会議と銘打ちながらも、日米の2カ国にとどまらず、常に視点を広く持つことが結局日米を捉えるのに近道なのだという、幾分飛躍した教訓へと、結びついた。私が属した通商政策分科会でも、日米二国間貿易ではなく、途上

国や環境・福祉といった新しいコンセプトを基にグローバルな議論ができた。

会議全体を社会と対置させた時、社会からのインプットは会議から社会へのアウトプットをはるかに凌駕した。これは、われわれが「会議」という言葉からうけるイメージとは逆で、まるで教えるよりも教わっていることの方が多し教師のようでもある。しかし、インプットを資本投資になぞらえれば、われわれ一人一人が国際社会に対して投資の成果をだすべく貢献していかなければならない。日米学生会議は、教育投資そのものなのである。

例をあげよう。沖縄サイトで話し合われた米軍基地問題に関して、それまでの各参加者の興味・関心の度合いや立場はばらついていて、負担に対して悲痛な叫びをあげる地元住民、将来は基地で働きたいと思う学生、沖縄での生活を楽しみ日米安保に取り組みつづける米軍関係者など、全く立場の異なった人々とじかに接することで、かなりの学生が混乱した。「自分の中で考えがまとまっていない」という状態は、会議期間中は許された。しかし、いまや日米学生会議は終わり、単に「難しい問題だ」という認識を超えて、自分なりのアプローチを社会に提示していかなければならない。

「日米学生会議後」は、始まったばかりだ。

山口臨太郎

● 日米学生会議には以前より参加したいと思っていたが、ここ数年、応募の機を逸していたが、やっとこの夏参加することができた。

自分のミスのため、大学の再試を受けなければならず、残念ながら沖縄サイトには参加することができなかった。しかし、そのおかげか、みんなの気遣いを実感することも出来た。

会議の知的な満足度も高く、国籍に関係なく友情も深めることができた。最後、クロージングセレモニーでは、めったに感情を表には出さない自分が不覚にも泣いてしまった。

不完全燃焼の思いから、来年アメリカ開催の実行委員選挙に立候補した。53回の日米双方の実行委員のみんなが自分にとってはとても大きく見えたから、自分もやりたいと思ったからだ。

多くの国際交流企画に参加してきたが、学生により企画運営がなされる日米学生会議の伝統はとても誇るべきものだと思う 21 世紀に続く伝統を築くためにも、がんばっていききたい。

みなさん、暑い夏をありがとう！

喜多洋輔

● 53 回会議に応募したときから本会議直前まで、理念・テーマを始めとして実施要綱にある日米学生会議の概要は、自分にとってどこか「他人事」だった。準備段階においては、実行委員の会議に対する並々なぬ思い入れを十分汲み取ることができず、感動を共有できていなかった。自分は依然として「日常」に生き、学生会議は「非日常」に過ぎなかった。しかし、非常に濃密な本会議の日程においてピークともいえる沖縄と東京でのフォーラムを終えてみると、自分の中にある新たな「日常」の存在に気づくことになった。一ヶ月に及ぶ共同生活の経験はもはや「他人事」ではあり得ず、新たに 53 回会議参加者としてのアイデンティティーが形成されているのを感じることができた。

参加者はそれぞれが気概を持ってこの会議に臨んでいた。特に、本会議の締めくくりである東京フォーラムの準備課程において、前回会議に端を発するわだかまりが、二人の分科会コーディネーターを通じて再び表面化したことに、そのことが象徴されていた。二人の思い入れについての分科会内の



議論は、フォーラムのプレゼンテーションにさりげない形で盛り込まれたが、会議全体の課題を分科会の課題として、さらには社会的な問題を個人的なレベルまで引き下げ、実際的な問題として向かい合うことができたのは大変に意味のあることであったと確信している。

毎年、多くの学生が様々な思いを胸に、準備段階を経てその夏限りの会議を作り上げる。今回も実行委員が用意した下地に、参加者の様々な創意工夫の糸が織り込まれて、53回会議という一枚の生地が織り上げられた。しかしながら、これまでの会議と比較してみた場合、53回としてどれだけの独自性が見られるのであろうか。勿論、こうした問題意識が出てくるのは、日米学生会議として認識し得るスタイルが確立されていることの証明でもある。戦前から始まった老舗の学生会議だからこそ、参加者各人が会議の存続意義を厳しく問い直していく姿勢を忘れてはならないだろう。 **古川敏明**

● Basically, it was really nice to join the 53rd Japan-America Student Conference. But since it's not really productive to say "good", let me point out four things.

The first thing is about Okinawa, and Tokyo as the next site. I think almost all the Japanese delegates had a really good time in Okinawa, which was non-daily, open to people outside of Japan-America Student Conference and one project itself. But subsequently, there were two undesirable feelings. One is that I didn't like to go back to Tokyo, which seemed to me that everything was going to come back to daily-life. I was worried about my motivation, decreasing and decreasing, even though I was aware that this site was the last one. The other is that the relationship between the Japanese delegates and the American delegates was not as good as in Hiroshima because we spent more time to talk to the Okinawa delegates who didn't really speak English. But we, at least I for one, wanted to talk to the Okinawa people rather than American delegates for we still had time with American delegates after the Okinawa Forum.

Second, as for the Tokyo Forum, I'm not really sure whether we were able to do what we wanted to do, because it was basically for ourselves, not to 'KANGEN' what we gained to the outside society that had supported us. This is partly because we didn't understand the concept and aim of Tokyo Forum, partly because we didn't want to, partly because we couldn't. As far as I guess from what the forum coordinator said about last year's way, it might be better to do some sort of forum a while after Japan-America Student Conference is over.

Third, as for the language barrier, the argument that Japan-America Student Conference recruit only those who can speak English so that all the delegates can enjoy the conference is pretty reasonable. But if we think we should recruit different kinds of people even though some don't speak English, we should plan some events which all can enjoy together like rafting in Arashiyama which I personally wanted to do, group practices of some skit and sports games.

I think these are what more or less everybody felt during Japan-America Student Conference. If I add something different to these three, I think four weeks are too long. It's true that we did 53rd Japan-America Student Conference because we had four weeks, but at the same time, I cannot help thinking I could have done some more things if Japan-America Student Conference had been shorter. How come there's no doubt about

having a period of four weeks? Sometimes I was so tired that I didn't want to talk to people, and I was telling myself that I could have squeezed my energy if this conference were to be over next week.

Lastly, I appreciate all those who made their efforts to create this conference. Thank you

後藤将

● 会議前、会議中、私はひとつの質問を自問していた。それは「私は日米学生会議に何を求めているのか」ということである。今振り返ってみると会議前に私が求めていたもの、それは「他のどこでも得ることのできない、何か特別な経験・出来事・知識」であったのではないかと思う。しかし、会議中に私が追い求めていたものはもっと精神的で内向的なものであった。多分、それは簡単に表すと「自分自身の成長」であった。

春合宿があった5月から、怒涛のように押し寄せる出来事の中で、私はたくさんの出会いやさまざまな出来事の中に埋もれて、ただ日々を過ごしてしまいそうになる自分に焦りを感じていた。自分自身の知識の浅さや至らなさを痛感しつつ、こんなすばらしい人たちに囲まれてなんて幸せなのだろうと思った。だからこそ、この限りなく濃密な、そして短い期間の中で、何かを得ようと必死だった。日米学生会議中、たくさんの人と出会い、触れ合い、さまざまな経験をし、そしてその中でさまざまなことを感じた。それらは私が今まで持っていたものとはまったく違う種類の感情であり教訓であった。私にとって、この日米学生会議の活動をした3ヶ月間は、3ヶ月間だけで終わりなのではない。今、さらに違うことを感じる自分もいるし、その時に気づいていなかったことに急に気づく自分もいる。そしてそれは続くのだろう、これからもずっと。

最終的に私は日米学生会議から何を得たといえるのだろうか。追い求めていた自己成長は達成できたのだろうか。わからない。しかし、私は日米学生会議への参加が私にとって意義深いものだったと断言できる。それは、私がこの夏を通じて一生の仲間と人生の原動力を得ることができたからだ。うぬぼれず、とらわれず、そしてこの経験を自分の血肉としつつこれから歩いていきたいと思う。

柴田綾沙美

● 日米学生会議に参加して二つのかけがえのないモノを得ることが出来た。それは「出会い」と「器」である。62人の仲間と出会い、一ヶ月を共に過ごした。それはまさに62個の個性との出会いであり、62通りの人生との出会いであった。それぞれが様々な想いを胸に多様な視点をもって挑んだ一ヶ月、否応なしに私の世界は広がった。未知なる世界、無限の可能性、ここで得た「出会い」は私にとって溜れることのない源泉のように、いつまでもその輝きを絶やすことなく懇々と湧き出し続けるであろう。

参加者のうち、一ヶ月の期間で多くを学び、すっかり満足できた人が何人いるだろうか。少なくとも私はそうではない。会議中、私が得ることができたのはたった二つだ。そのもう一つが「器」である。大きな、大きなバケツである。大きいくせに中は空っぽなので、私はこれから一生懸命それを満たすよう努力しなければならない。日米学生会議に参加して自分の中で何か具体的にレベルアップできたものがあるとは思えない。自分でも参加前と終了後で、何が変わったのかさえ分からない。しかし、自分を成長させる為に必要な容器は持ち帰ることができた。これから出会うであろう素敵な知識、経験、その他様々なものを溢すことなく溜めておける「器」、今後の人生において全ての基礎となるものを私



は手に入れることができたのである。

日米学生会議は私の中ではまだ終わってはいない。この一ヶ月の会議で得ることができた「出会い」と「器」が意味しているように、すべてはきっかけに過ぎず、ここから始まっていくのである。ここで得た出会いを大切に、器をいっぱいにするよう努力していくことは私に課せられた義務なのである。最後に私にこのような経験をする機会を与え、様々な面から支えてくれた家族や仲間、また日米学生会議関係者、その支援をしてくださった後援者の皆様に感謝したい。

秋山洋児

● 最初に言いたい。53 回の日米学生会議に参加できて本当に良かった。…日米学生会議に参加して、自分のどこが変わったかと質問を受けるけれど、自分を見つめることができたこと、このことが何よりも大きな意味を持っているように思う。違いを認識し、時には受け入れ、時には反発し、また時には同じ景色を見つめ、歌い、踊った。

一つ一つの出来事を思い出すともう懐かしく感じてしまうけれど、何を感じ、何を思ったかということは、うまく言葉であらわすことができなくても、そこにいたみんなの瞳とともにずっと心に刻まれています。

…なかなかふりかえってみるとまとまらないことも多いけど、それだけ自分にとって多くのことがあって、大きな影響があったということだと思います。明日になればまた違った気持ちになるかもしれません。ただ、日を経るごとにみんなへの感謝の念が強くなっていくように感じるのはきっと僕だけじゃないと思います。その気持ちは変わりません。

京都、広島、沖縄、東京。きっとこれからは訪れるたびにいろいろ思い出して、みんなに会いたくなる気がします。日米学生会議が終わって京都に帰って来たとき、一ヶ月ぶりでちょっと懐かしかったのと同時に、一緒にいたみんながいないことに寂しさを感じたのは少し意外でした。自分の中でそれだけ大きなものにいつの間にかなっていたのだなと。ただ、みんなと別れて一人になって、そこから始まるのだという気もします。なぜかという、日米学生会議は一人一人の心の中でいつまでも続いていくものだと思はれているからです。

“The most important thing is, keep smiling.”

この言葉を胸に、明日と、そして自分自身と向き合っていきたい。

松岡洋平

● 先日、本会議中に撮った写真を現像し、アルバムに収めました。日米学生会議も私の思い出の一部になったかのような感じでした。しかし、日米学生会議は決して思い出になることはないように思います。ここで見たこと、感じたこと、学んだことはすべて私の現在の中に存在しており、確実に私を作り上げているからです。分科会でのアカデミックな議論、各サイトのプログラム、参加者同士の交流と衝突、全員で一つのものを作り上げるプロセスとプロダクト。日米学生会議で達成できたことも、できなかった悔しさも全部今の私、そしてこれからの私のエネルギーと力になっているのを会議が終了してしばらくたった今日、ひしひしと感じています。日米学生会議はまさに lifetime experience でした。日米学生会議を通して最初のステップを踏み出した階段を今後上っていきたいと思います。

中川由紀

● 僕らはそれぞれ他者から分断され、まるで砂のようになっている。自己の領域に引きこもり現実を達観しながら社会に生きている。それでも、崩壊するコミュニティーを補完する互助的なつながりの構築が必要だとか、自らの信念を維持し多元的な価値を認めながら社会変革を担うことが必要だとか、そんなことは既に「知っている」。個人の非力さは悲しいほど自覚している、しかし、だからといって砂のようになった他者と一体どこから対話を始めればいいのか…。会議前に抱いていたそんな自分の弱さが頭をもたげるとき、今ではそれを振り払うことができる。

強烈な経験であった去年の会議を終えて発足した実行委員会が、未だ会議の成果を消化しきれない中で、なんとか言葉で表現したのが日米学生会議の理念としての「相互理解と『力』の獲得」である。それは何とも陳腐に聞こえる理念であるかもしれない。テレビという小さな箱の中で繰り返られる政治的・経済的「論争」「討論」を通じて社会問題へのコミットを擬似的に体験することができる中で、「相互理解」も「力の獲得」も、ともすれば虚しく響く。

しかし、そんな状況において「相互理解と『力』の獲得」という理念の下に企画した会議に、他者と共有する問題について意見をぶつけ合い議論し、共同で解決を模索することを希求する学生が集まった。これまで押さえ込まれていた活力が自らを解放し、他者との対話を求めて互いを触発し合い、共感・批判・信頼・拒絶を含めた各参加者同士の議論がさらに有機的につながり合った問題群を顕在化させ、会議前に誰が捉えていたよりも大きなスケールで社会が—それ自身が内包する諸問題と共に—姿をより立体的に表す事を可能にした。

既存の学問を含めた分析枠組みが既に有効性を失い、複雑に絡み合った問題群に対して唯一絶対的な解決策が存在しないという今日状況。広島や沖縄で我々が目の当たりにしたように、いかに多くの問題が不可視化されてきたか、どれだけの問題が日米両国、そして日米間に横たわっているか。それぞれ個別の文化的・歴史的背景や信念体系を持つ者が、異質な価値観や視点と幸せな衝突を起こすことは、各自にとってこれまで自己完結していた自分の領域の価値観や問題意識の矛盾を自覚することになり、そして、開かれた思考をもって他者を対等な存在として受容することが、それまでの自己の生き方を相対化させ、自分自身の中の異質性を見出し、自分の枠を乗り越える契機となること。その中で、自己の独善でもなく他者への迎合でもない、妥協点・解決策の模索の営為がいかに困難を伴い、気の遠くなるような営みであると同時にいかに画期的なことか。

会議での活動を通して、我々が社会に対して必ずしも諸問題に対する究極的な解決策の提示するまでには至らなかったかもしれない。しかし、これら「相互理解と『力』の獲得」の結晶は、各自の胸の奥にしっかりとしまわれている。

…それでも、会議を終えて突然投げ出された草原は荒涼としていて、これからの道程を想いながら僕は一人で立っている。手にした地図はあまりに不完全で、持てる荷物はあまりに小さい。けれど、多少の不安を抱えながら静かな自信を持って一步を踏み出すことができるのは、これから歩む道の先々に仲間がいるという確信が『力』を与えてくれるから。

日米学生会議の経験は夢でも非現実でもない。



要するにどうすればいいか、といふ問は、／折角たどつた思索の道を初にかへす。／要するに
どうでもいいのか。／否、否、無限大に否。／待つがいい、さうして第一の力を以て、／そん
な間に急ぐお前の弱さを滅ぼすがいい。／予約された結果を思ふのは卑しい。／正しい原因に
生きる事、／そのみが淨い。／お前の心を更にゆすぶり返す為には、／もう一度頭を高くあ
げて、／この寝静まつた暗い駒込台の真上に光る／あの大きな、まつかな星を見るがいい。(高
村光太郎「火星が出てゐる」)

真っ赤な星を見上げているのは僕一人ではないはずだ。

岡本紘明

● 自分はこの会議から何を得たのか、会議が終わった後ずっと考えている。正直に言って、それは
なかなか見えてこない。得たものがないというわけでは決してないと思う。それは大きすぎて見えな
いのだろうか。

思うに、これから自分が社会に出て活躍するための基礎を学んだ気がする。それは、短期的に見れ
ば、これからの大学生活や就職活動に、長期的には自分の仕事やビジネスに、さらにはおそらく自分
の人生の基礎に直接的に有効な事をいろいろ学んだ。それはコミュニケーションやリーダーシップの
取り方であるし、社会におけるマナー、その中でもとりわけビジネスマナーと言われるものや、プラ
ンニングやコーディネート等の難しさであった。また、この日米学生会議を通して新たな人間
関係が築けたことも、得たものの一つである。

自分で今現在得たものがイマイチ見えてこないのは、これらが基礎であり、土台であるからかもし
れない。これから先、この土台の上に自分で何かを作っていくのである。そして、今言えるのは、日
米学生会議に参加したことによって、完璧ではないにせよ、その上にどんな建物を造っても、絶対に
壊れない土台ができつつあるということだ。これを思い、信じ、そしてこれに対し自信を持つことが
できるという事実が、一番大きな事かも知れない。

佐々木淳

● 第53回会議を考えるにあたって、私は、第52回会議を振り返らずして考えることはできない。
昨年の会議は、私のそれまでの21年間の中で最も大きな転換点となった。第52回日米学生会議は自
分について、そして何より社会に存在する一個人としての自分に対して大きな疑問を投げかけた。そ
して、第52回会議を消化していく過程の中で自分にとっての第53回会議が形作られていった。第52
回会議と第53回会議は、私の中でつながっているのだ。

第52回日米学生会議のテーマは“Developing New Approaches to Promote Social Change”だった。そ
してそんな第52回会議の最後に起きた出来事。それは、人種差別や偏見に対する主張だったが、それ
を行った人たちの主張した内容もしくはその手法には今でも納得のいかない部分がある。しかしそこ
から私は多くのことを考えさせられ、多くのことを持ち帰った。

まずは、自分が、社会における問題、または、自分の中の欠点や問題に対し、きちんと向き合っ
ていたつもりになっていたに過ぎなかったことに気付かされた。そしてきちんと向き合うことすらな
かった自分なのだから、それらにきちんと取り組んでいるはずもなかった。社会における不正を目の当

たりにしてもそれに対して立ち向かう自分はいなかった。「自分のことで精一杯」「ここで何かしても自分が損をするだけで何も変わらない」「理想ばかり語らないで現実的にならないと」そんな気持ちを一その頃はそれを認めることからすら逃げていたが—私は持っていた。しかし、そんな自分は社会の構成員として社会に向き合っていないばかりか、「不正」と感じた自分自身の心に何よりも向き合っていなかったのだ。こうしたことに気づかされたショックは大きかった。

第52回会議が終わってすぐの自分は、新たな視点を様々な人に提供され、自分の認識がいかに限られていたかという事実にはたすら圧倒されていた。また、一つの絶対的正義を提示されたことに大きな疑問を覚えた私には、何が正しくて何が間違っているのかについて、まったくわからなくなっていた。あの頃の私は、何についても「意見」を持つことができなかった。

社会においても何が間違っていて、何が正しいかなんてわかるはずもなかった。人種差別や偏見、貧富の格差等、どこかしら間違っていると感ずることで自分の限られた知識と認識を持ってして、一つの考え、意見など到底持つことはできないと感じていた。自分の知らないことが大半を占める世の中の様々なことに対し、それらを直接経験していない私が何らかの意見を持つこと自体無理な気がしていた。

ただそのような状態でも、行動を起こすことの必要性は感じていた。だからこそ何事にも意見すら持てない自分がもどかしかった。それでも、私には、自分が信じられることはあった。それはまず、新たな視点（—というと陳腐に聞こえるけれども、それまでの自分のあり方、疑問を投げかけることもなかった根底にある考え方を揺るがすほど、衝撃的なもので、初めて経験したことだった—）を得ることによって自分の中の可能性が確実に広がったかを感じていた。そして社会における問題への取り組みの重要性を改めて理解することによって、そこに社会を変える力が生まれたということを確認していた。

そんな私の思いを注ぎ込む器が第53回会議だった。第53回日米学生会議を創るということ—他の学生に新しい視点を得る機会を提供し、社会における問題への取り組みの重要性を一人でも多くの人に感じてもらうこと—それは、第52回会議で気づかされたことを実践していくことだった。様々な「力」を日米学生会議に関わる人々が獲得し、社会を変えることのできるような「力」を一つでも多く社会に喚起すること。第53回会議に取り組むプロセスは、私にとって自分なりの社会への働きかけだった。社会を変えるために自分ができることだった。直接、社会におけるなんらかの問題に働きかけるわけではないが、自分の意識の変化が大きなものであったという確信は、そのような経験を、そして思いを一人でも多くの学生に持ってもらうこと、それこそが社会を変える一つの大きな原動力になりうると確信させたのだ。働きかける対象があったことによって、私はある意味救われたのだと思う。

私にとって、第53回会議は、こうした意味で自己実現の場だったのだ。

もちろん、第53回会議を企画・運営したところで、世界平和がもたらされるわけではないし、差別と偏見がなくなるわけでもない。それは、最初からわかっていた。実際、広島で核兵器について議論を交わし、沖縄で基地問題について考えた私たちが問題への具体的かつ有効な解決策を打ち出せたかという、そんなことはないだろう。しかし、だからといってあきらめて、何もしなかったならば、



何も始まらなかった。そんなことは、自分に対する言い訳でしかなかっただろう。自分をごまかしているのに過ぎないのだろう。それは、問題から逃げているに過ぎなかっただろう。「現実的」だとか「頭の良い生き方」なんていうもっともらしい言葉を掲げて社会に、そして自分に、向き合っていなかったただけだろう。日米学生会議は、さまざまなことに向き合うこと、一見容易に見えて、実は途方もなく難しいことではあるが、これを実現できる可能性を持つ場としてその意義がある。第53回会議が終わった今も、自分の考えは、間違っていなかったと思う。

第53回会議は、私にとって自分との戦いの場でもあった。

実施要綱の原稿一つとっても、OB会での挨拶一つとっても、ミーティングでの自分の言動をとっても何一つ納得のいくことはなかった。それは、本会議が始まってからも変わることなかった。何かに取り組むたび、なぜ自分にはこれしかできないのだろうと思った。もう頑張ることのできないくらい頑張っても、納得できず、自分の限界に直面するたび、その事実打ちひしがれ、苦しんだ。けれども、自分の限界と日々直面する中で、今までには越えられなかった壁を少しずつ取り払うことができたのだとも思う。

そして、最後に、第53回会議は、私にとって今までにない「力」の源だった。

これは、1年の活動を通じて感じてきたことだけれども、私は恵まれていたと思う。それは、第53回会議の企画・運営に全面的に携わる機会をもらったという以上に、第53回の実行委員会でこの会議の企画・運営に関われたということだ。これほど個性の異なる7名が、「相互理解と『力』の獲得」という一つの理念を心から共有し、それに向かって力を合わせられたこと。もちろん、お互いを完璧に理解しているわけではないし、1年間仕事をしてきた中で摩擦なんてかわいらしい言葉では言い表せないような衝突もあった。とはいえ、これだけ肉体的にも精神的にも重労働である実行委員会の仕事を、その大半を楽しんでこなすことができたのは、実行委員に負うところが大きい。確かに、けっして効率のよい実行委員会ではなかったし、笑えるほど全員が子供なところもあった。けれども、このメンバーであったからこそ、あれだけのエネルギーが自分たちの中に生まれたのだとも思う。お互いをinspireすることができたからこそ、モチベーションをかなりのレベルに保って仕事をできたのだと思うし、1年間の相当分の活動を納得いく形で—おそらく全員が—行うことができたのだとも思う。お互いの力を引き出せるような関係であったからこそ、私は、最後まで自分と戦い続けることができたのだと思う。

自己実現の場としての日米学生会議。戦いの場としての日米学生会議。そして「力」の源としての日米学生会議。私にとっての日米学生会議が「力」の源たりえたのも、自己実現の場たりえたのも、そして私の中で最後まで戦うことができたのも、全て実行委員のおかげだ。そんな仲間にめぐり合えたのを心から嬉しく思う。そして、この会議を共に創り上げることができたのも私の一生の誇りだ。この1年間の想いにこれからも恥じることはないこれからを歩んでいきたい。

森下麻衣子

● 「自分」の過去、現在、未来に真正面から向き合った1ヶ月。
自分のアイデンティティ形成、人種差別、言語能力による差別、劣等感、米国的価値観への疑問、自らの学問に対する姿勢への疑問、通訳という挑戦、将来への不安・・・

私の人生の中で感じてきた「想い」全てが一度に襲ってきた。
そして「時間」とはいかに人間が創り出した概念であるものか実感し、混乱し、苦しんだ。

本音でぶつかる事のできる人たちが手の届くところにいてくれたから、
今まで自分の中の「想い」に目を瞑っていた事に気が付いた。
そして自分がこれらに対して素直になる勇気を持てたから、
真剣に、嘘をつくことなく向き合えた。

今、確実に多くを手にした自分がある。確実に掴んだ強い何かがある。
それは前へ進んでいく原動力、勇気、希望といったものではないか。
そして必ずそうであって欲しいと願っている。

坂江裕美

● 去年の私は、日米学生会議という組織に食らいついていくのが、やっとだった。その反面、言い方は悪いが、「自分のことさえ考えていればいい」という気持ちはあった。52回の参加者の中では、私はおそらく妹のような存在であり、必死にもがいている私をやさしく見守ってくれている人たちの存在を、常に感じることができた。

しかし、今年は実行委員という、立場で会議に参加した。少なくとも同じ態度で臨むわけにはいかない。引っ張っていく立場ではある。かといって参加者と同じ目線は失いたくない。実行委員というフォーマットがあるわけでもないから、各自が思ったとおりに行動するしかないが、そもそも実行委員として私はどうあるべきか。また、私は今年の会議をどのようなものにしたいのか。漠然とした理想が頭の中に描き、それに向かって準備を進めていた。

しかし、いざ本会議が始まると、予想外の事態も起きる。基本的な理念や運営支障なければ問題はないはずだし、そこがまた面白いところでもある。皆で創り上げていく会議であれば、むしろそういった事態をよろこぶべきである。けれど、自分が1年間温めてきたという自負もある。そのような時に、それを状況に合わせて勇気を持って修正していくことができるか。また、譲れない部分があった時には、どうやって自分の思いを伝え、守り通すことができるか。実行委員とはそもそも何なのか。本会議中は常にそのこととの葛藤だった。

第53回日米学生会議の実行委員を終えて、私はどのように成長したのか。おそらく周りの人間からすれば、際立った違いが見えるわけではない。しかし、1年前よりはほんの少し強く自信を持てるようになっていた。去年は、絶対にできないと思っていたことが、気がついたらできていた。1年間、実行委員の仕事を全力でやってくることができた。睡眠時間が多い私が1ヶ月間もの間、あんなにも



短い睡眠時間で過ごせた。

それができたのは、日米学生会議という、大好きな組織にすることができ、自分のやりたいことを思いっきりうちこめる場所があったからだ。そしてそこで、大切な、生涯の友人となるような人間にであえた。彼らと一緒に実行委員、分科会、サイトイベントができたこと。大切な時間を共有できたこと。そのことを思い出すと、多少のことがあっても、どんなに疲れていても、あと少しがんばろうと思える。これごときでくじけてはいけないのだと思える。

第53回日米学生会議は終わり、私にとってのもはや会議は思い出の中にしかない。かといって、思い出に浸るなどということもしない。そんなことしても楽しかった時が戻ってくるわけではないし、後悔したことを会議の中で取り返す機会もないからだ。ここは、ひとつの通過点にしか過ぎず、立ち止まっているわけにはいかない。すべての思い出を「力」に変換して、前に進むこと。今はひたすらそれを思う。

大井美歩

● 「日米学生会議」という堅い名称から、7月末から8月末までの1月の共同生活はアカデミックなものになると想像していた。会議が終了した今、一息ついて振り返ってみるとアカデミックな側面は充実していたものの、最大の成果は会議中の人間関係にあったように思える。

具体案を出さなければならないが、意見が食い違う人が何人もいる。何かを提案しても批判されてしまうので、考え抜いてから発言しなければならない。英語だからなおさらだ。しかし、考え過ぎて発言ができないと、他人の意見を元に議論が進んでしまう。このようなグループワークで必ず直面する課題を計10回のテーブルセッションや1回のスペシャルピック、又は機関紙発行のような課外活動のように会議のオフィシャルな場で何度もこなすことになる。その過程で、人間関係が濃密になっていく。考えが対立する人、共感できる人、尊敬できる人。それぞれの個人的立場が確立されていく。

プライベートな時間においても人間関係は続くが、会議のオフィシャルな場で求められているようなアカデミックな側面よりも本人の人格が重視されることになる。年齢、性別、国籍を超えて友人や親友や恋人が生まれる。

会議中の人間関係から学ぶことが多かったのは、オフィシャルな場の人間関係とプライベートな場の人間関係のバランスを取るよう心がけていたからだと思う。人間関係の難しさは日米という枠を超えて存在していた。毎回意見が対立する人と深夜に酒の入った会話を共にすることへの抵抗感。逆に、尊敬している人と一緒に街に繰り出すことへの緊張と期待。このようにオフィシャルな人間関係とプライベートな人間関係が混在している環境は学生会議の特徴であると思う。職場においての人間関係はオフィシャルな側面を拭い切れないところがある。プライベートな人間関係では、趣味や趣向からなかなか政治経済の話に発展しないものである。また、このように双方の人間関係が混在している環境は日米の学生が集まったことによって多様化し、時には豊かに、時にはより複雑になった。このような貴重な機会を体験できたことが「成果」であったと思う。

荒木龍

● 日米学生会議が終わって早数週間が過ぎた。この感想文を書くに当たって、なにかこの会議を一言で簡潔に表現できる方法はないだろうかと考えてきたが、数週間を経ても「これだ!」と思えるも

のはなかなかない。だが色々と考えているうちに気づいたのは、参加者それぞれにとって会議の持つ意味というものが大きく異なっている、ということだ。それぞれに感じたもの、得たものが明らかに違うようなのだ。そこから「日米学生会議は形にとらわれない会議である」という考えを導き出してみた。

一例を挙げると、「会議」とつくからには、何らかの合意に達することを目指したり、共同声明を作ったりするのでないか、と思わせる。しかし日米学生会議は会議という名を冠しておきながら、最初から合意に至ることや声明を作ることなどを目的としておらず、そのような形で会議を運営しない。個人がとられるいかなる制約も、会議として要求されるべき道筋といったものは、ほぼないといっている。それがために一つの会議でありながら、参加者それぞれが最後にたどり着く場所はまちまちであり、会議の意味を聞いてまわれば、それぞれ少しずつ違う答えが返ってくるはずである。

この会議は例えるなら食べ放題のバイキング料理だといえる。料理、すなわち物事を学ぶ場や話し合いの場は会議が用意してくれているが、どの料理を皿に取るのはそれぞれの個人の自由である。いや、料理を会議が用意してくれるというのは適切な言い方ではないかもしれない。食べるだけでなく、料理を作る場さえも参加者に提供されている。自分で作り自分で食べるという選択肢も可能だ。まさに Do it yourself という考えが体现されていた。

さて、最後に私個人にとって日米学生会議は何であったのかを述べたい。私にとってこの会議は自分を試し、磨く場であった。一ヶ月に渡りアメリカの学生と討論ができる、また個人としては会う機会がない人達に会うことができ、普段行けないような場にも行けるという素晴らしい機会と、それに好きな角度からアプローチできるという完全な自由が与えられていた。ここからどれだけいい経験を掴み取り、今後の人生に結びつけるのか、という点で私は試され、経験を重ねる過程で磨かれた。会議が終わりさまざまな物を得て帰って来た今、これをどう活かすかということでは再び試されている。この会議は私の人生を変えた。そしてこれからも私の人生に影響を与えつづける存在となると思っている。私にこのような場を与えてくれた日米学生会議、みんなのために尽くしてくれた実行委員のみんなと、高い意識を持ち常に刺激を与えつづけてくれた参加者のみんな、そしてこの会議を可能にしてくれた協力者ならびに後援者の皆様方に、心から感謝したい。

鶴田彬

● 第53回 JASC 面接試験当日の朝、試験会場に向かうことをためらう自分がそこにいた。「どうせ自分なんか受かるはずがない」という一抹の不安と、「今日は、もうちょっと寝たい」という欲望にかられていた私は、布団の中から動こうとしなかった。しかし、ふとその時、「ここで挑戦せずに諦めてどうするんだ」という気持ちが沸き起こり、立命館大学へ向かった・・・

そして、会議を終えてみて。心の底から、あの時ためらいを捨てて挑戦して本当に良かったと思う。

一ヶ月を終えてみて最も痛烈に感じたのは「自らの未熟さ」である。日頃の大学生活でも、できるだけ変人（注：“変革の人”という意味ではありません）と付き合いようと努力してきたが、今回の会議に集まった参加者の個性は全く圧倒的なものであった。知識の面でも、物事に対する考え方においても、そして何より人間的な面において「自分はまだまだなんだな」というのを感じさせられた。この体験を大学2年の夏にすることができた自分は大変幸せであったと思う。



また、様々なディスカッションの中で最も心に残ったのは「戦争認識」に関することである。特に、広島、沖縄においては、日常とは違った気持ちで戦争と平和を考えることができた。

広島においては、「スミソニアン博物館での原爆展中止を批判する一方で、在日朝鮮人被爆者の慰霊碑を平和公園に入れることに長年抵抗を示してきた、日本人の姿」を知り、「戦争というのは必ず被害と加害の両極面を持つのだ」ということ、及び、「平和主義とナショナリズムの矛盾」のようなものを感じることができた。

沖縄においては、Student Forum の後に私達発表者に対して浴びせられた沖縄県民の方の怒りとも言える声に衝撃を受けた。「基地の存在を前提として議論を進めないでほしい」「ずっと犠牲的立場であり続けている沖縄の苦しみを理解してほしい」。平和主義を唱えながらも最も生々しい部分は沖縄に押し付けている、日本のあり方についてしっかり考える必要性を痛切に感じた。

怒涛のごとく様々な人と交流し、議論し、遊んだ夏だった。文句なしで楽しかった。泡盛最高だった。自分がさらに成長した未来の日に、この夏を懐かしく思い返せたらと心から願う。

伊藤公一朗

米国同時多発テロ事件に寄せて

2001年9月11日におきた米国同時多発テロを受け、9月23日に江東区有明の東京ビッグサイトにおいて「米国テロ被害者追悼・お見舞いの会」が日米協会及び日本国政府の共催でとりおこなわれた。会の趣旨は「犠牲となられたすべての方々に哀悼の意を表するとともに、未だ行方不明の方々全員の無事救出を心から願い、併せて家族等関係者に心よりのお見舞いを申し上げるために開催するもの(首相官邸ホームページ抜粋)」であった。

テロが発生したのは、第53回日米学生会議が閉会してからわずか2週間ほどの頃で参加者は会議の興奮覚めやまぬ状態であったが、テロ発生とともに参加者のメーリングリスト上では安否を気遣うメールが飛び交った。

理念に「相互理解」を掲げ、一ヶ月をかけ、分科会では、「民族問題」や「異文化間問題」、スペシャルピックでは、「安全保障」、そしてサイトイベントでは「歴史認識」、「戦争責任」などを議論してきた参加者にとって感じ、思い、考えさせられるところは多かったに違いない。

そうした中、第53回日米学生会議日本側実行委員長森下麻衣子は主催者からの依頼により、小泉首相、ベーカー駐日米国大使に引き続き、学生を代表して5分間のスピーチを行なった。

「米国テロ被害者追悼・お見舞いの会」における第53回日米学生会議日本側実行委員長のスピーチ
(なお、内容については、実行委員長個人の見解であり、必ずしも参加者全員の意見を代表するものではない)

9月11日、テレビで流された、あの信じられないような映像を通じて私は、今回の同時多発テロ事件について知りました。あの誰もが驚愕した映像を思い出すたび、強い憤りがこみ上げてきます。そしてこの行為のもたらした、数え切れないほどの悲しみ。その一つ一つの重さを推し量るにつけては、ただ言葉を失うばかりです。今回の忌まわしいテロ事件における犠牲者の方々、並びにご遺族の方々に対し哀悼の意を表するとともに、一人でも多くの行方不明者の方々のご無事を願っています。

今、私たちの多くは、このような悲劇を二度と繰り返してはならない、今回のテロに対して断固として立ち向かわなければならないという決意を感じていると思います。しかし、それと同時に、今回のテロ事件の首謀者、そして協力者を一層しただけでは、まだ問題の本質は残されるのではないかという疑問、そしてこの問題の本質は根深く、複雑であるという漠然とした認識も、持ち合わせているのではないのでしょうか。

今回の問題の本質にあるものは、「複数の信念」の対立だと私は、感じています。仮に世界に「一つの真実」が存在したとしても、その実態を明らかにすることは、大変困難で、現実には相容れることのない「複数の真実」、「複数の信念」が浮かび上がってくるのです。

とはいえ、私は、今回のテロ行為、もしくはテロ行為を行った者に対し、なんらかの正当性を認め、



もしくは容認しているわけでは、けっしてありません。実際、今回のテロ行為は、仮にいかなる信念の達成のためであったにせよ、手段として到底容認されうるものではなく、いかなる正当化の余地も残されない、極めて卑劣な行為でありました。

しかし、こうしたテロ行為が生まれてしまった背景には、「複数の信念」の対立が、歴史の中で、様々な形によって深められ、もしくは歪曲されてきた事実があると感じているのです。

さきほど私は、相容れない「複数の信念」をなくすことはできないといたしました。しかし、こうして対立する、異なる信念がどのような形で存在するかを決めるのは私たちです。「異なる信念」が平和的に共存することは、可能です。従って、そのような方向に向けて私たちが働きかけていくこともまた可能なはずで、確かに、「複数の信念」の平和的共存といえば、一夜にして築かれるものではなく、継続的、かつ多大な努力を必要とします。しかし、この話をけっして理想論として片付けたくはないのです。私たちの一人一人が始めの一步、それがいかに小さなものであるにしても、を歩みだすことによってのみ、平和な未来を構築することができるのではないのでしょうか。

私たちは今、今回のテロ行為そのものに対処することを必要とされています。テロリストたちには、厳正な裁きを下すことが必要で、テロの及ぼした経済的波及効果にも対応しなければなりません。また、今後は、国家という枠組みに限定されない安全保障のあり方を再考することも求められているでしょう。しかし、それだけではなく、同時に私たちは、今回のようなテロ行為が生まれてしまった背景にあるもの、「複数の信念」の対立という問題の解決に継続的に個人として、また政策を通じて取り組むことが求められているのだと思います。また、今回のテロ行為に対する対処そのものが、異なる信念の対立を深めたり助長したりするものであったりしてはけっしてならないのです。そのような意味で、今回のテロ行為に対しては、問題の本質を見据えた、冷静かつ慎重で、適切な対処が成されることが極めて重要なのです。この惨事が二度と繰り返されないためにも、平和な未来を望む私たち一人一人が、相互理解を通じた「複数の信念」の共存に対し取り組むべく決意を新たに、日々の行動に反映させていくことを強く望みます。私たち個人の力に限界はあります。しかし多くの個人の力によってのみ社会は動かされ、未来は構築されていくものなのです。

I extend my deepest sympathies to the victims and families of the recent terrorist attacks in the United States. I, along with many of us in the world, share the grief and anger caused by this inhumane and inexcusable atrocity. Along with our determination in bringing justice upon the terrorists, I urge that we be determined to face the complexity of problems which lead to these terrorist attacks, and in the process that we remain aware of our most important goal of attaining a peaceful world. Thank you.

*The 53rd Japan- America Student Conference,
Japanese Executive Committee Chair
Maiko Morishita*

(September 23, 2001 "Ceremony for All Victims of Terrorist Attacks in the U.S.," Tokyo)

第7章

第54回日米学生会議

第54回日米学生会議の概要



第 54 回日米学生会議の概要

● 開催期間

2002 年 7 月 27 日～2002 年 8 月 21 日

● 理念

相互理解、「力」の獲得、そして前進

“Mutual Understanding, Empowerment and Progress”

1951 年 9 月 8 日のサンフランシスコ講和条約締結から半世紀、日米関係は紆余曲折を経て現在の関係に至っている。先の太平洋戦争における激しい衝突にもかかわらず、両国は戦後、史上稀に見る強いパートナーシップを構築し、日米関係は現在、国際関係における最重要事項の一つとみなされるまでになった。ただ、日米関係の発展段階において中心的な役割を果たしてきた国家レベルのアクターに加え、市民レベルでの交流も重要な役割を果たしてきたことは見逃せない。

一ヵ月に渡る共同生活を通じ、両国学生はそれぞれの持つ多様な価値観を共有する。その過程でときには衝突を経験しながらも互いを認め、尊重し合うことによって、相互理解を模索していく。そこでの経験の中から今までの人間関係や価値観、および自己とそれを取り巻く社会との関係を見つめ直す。さらに、会議を通じて獲得した「力」を、自己完結で満足するのではなく、我々の生きている社会へと発信させていく。それらの段階を経て、我々は過去を踏まえて現在を生き、未来に向けて前進することができるのではないだろうか。それが日米学生会議を貫く理念であり、今回の第 54 回会議で我々が挑戦すべき目標でもある。

● テーマ

「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」

“Redefining the Role of Japan and the U.S. in Contemporary Social Issues”

世界は、グローバル化の波の中で 21 世紀を迎えた。通信技術の発達や経済の自由化などにより、既成の社会的・文化的な枠組みや価値観が疑問視されるとともに、国際社会は新たなパラダイムに転換しつつある。異なる概念・価値観の混在が新しい問題を引き起こし、同時に旧来の社会問題を一層複雑化するという構造の中で、個人や国家も新時代における自らの役割を再定義しなければならない。従来国際社会の中で確立されてきた日米関係についても存在意義を問い直す議論がなされるべきであろう。

第54回日米学生会議は「現代の社会問題における日米の役割を問い直す」をテーマとして掲げる。このテーマのもとに、通商政策、政治システム、先端技術と倫理、社会的不平等、宗教とアイデンティティ、多文化社会における教育、創造的表現から探る歴史認識、環境問題、以上8つの分科会を設置する。会議ではこのような分科会の活動を中心に各開催地でのプログラムや講演を通じて、現代の社会問題に対し日米両国の学生がさまざまな視点からアプローチし議論を深めることで、新たな国際社会において日米の果たすべき役割を探っていく。第54回日米学生会議は、このようなテーマのもとで開催され、参加者が問題意識の深化を図ることのできる場である。互いに自己を主張しぶつかりあうというこの会議での経験が、新世紀における日米関係の役割を問い直していく上で大きな力になると考える。

● 開催地

➤ Washington D.C.

ワシントン D.C.は、アメリカの200年の歴史と政治が交錯する空間であり、またアメリカという国をさまざまな角度から感じとることができる数少ない都市の一つでもある。加えて2001年9月11日には、人々の記憶に残る都市の一つにもなった。ここに立って、一体我々はアメリカの何を見ることができるのだろうか。アメリカの政治、文化および歴史、さらには新しい時代の到来について、我々はこのサイトで多くのことを学ぶことになるだろう。また、日米両国の参加者の初顔合わせ場所となるワシントン D.C.では、本会議中において深い議論をするに必要不可欠な、相互の価値観や歴史観の理解、信頼関係と友情の形成を可能にするべく、学術的な活動にとどまらない行事も行う。

➤ Oberlin

オハイオ州は五大湖のひとつ、エリー湖に面しているアメリカ東北部の州である。シンシナティやクリーブランドなど、オハイオ州には特徴ある工業都市が数多くあるが、一方で豊かな自然も擁している。第二の開催地であるオハイオ州では、アメリカで最初にアフリカンアメリカンと女性に門戸を開放した大学として有名な Oberlin 大学の恵まれた施設のもとで、会議のひとつの柱である分科会活動を中心に行う。アメリカの歴史と自然に触れるよい機会となるであろう。

➤ Berkeley

ゴールドラッシュを契機とする移民と開拓の歴史がカリフォルニアの歴史である。多くの移民を抱え、様々な文化が融合と創造を繰り返すさまは多民族国家アメリカの縮図とも言える。中でもバークレーを含むベイエリアは70年代ベトナム反戦やヒッピー文化などの中心地となり、以降伝統的に「ニューエイジムーブメント」の気風を備えており、その先鋭的スタイル・行動はアメリカのみならず国際社会にも多大な影響を与えている。会議第三の開催地であるバークレーでは9校ある University of California のなかでも最も歴史のある Berkeley 校に滞在する。世界の研究をリードするアメリカ、そして文化の混在するアメリカに触れることの出来る環境の中で議論を深めていきたい。



◆ **Guam**

日本から空路でわずか3時間半、西太平洋上に浮かぶグアム島は、ハワイと並ぶ南洋のリゾート地である。米国準州という現在の状況に至るまでには、スペイン、米国、日本、そして再び米国による統治という歴史があり、日本軍占領期には大宮島と命名され、1944年7月の激戦を経て、米国統治下に復帰している。現在、グアムの経済を支えるのは、観光業や建築業、そして軍事上の要衝地における米軍の存在である。この地におけるメインイベントは、一カ月の成果を社会に向けて発信していくことになるフォーラムに他ならないが、多様な民族の痕跡が残る、グアムの食文化や音楽にも親しみつつ、日米両国の参加者が互いの友情を確認する場としたい。

● **本会議内容**

重要な要素である分科会、スペシャルトピックを中心として構成される。分科会では、テーブルに分かれたメンバーが会議の理念、テーマを意識しながら各問題について議論をしていく。さらに、これらの活動は各サイトにおけるフィールドトリップによって、より密度の濃いものとなる。スペシャルトピックでは、分科会とは異なり、メンバー間の相互理解を目的としてゲーム、芸能など多様な活動を行っていく。

◆ **分科会**

1.Trade Policy	通商政策
2.Political System	政治システム
3.Advanced Technology and Ethics	先端技術と倫理
4.Social Inequality	社会的不平等
5.Religion and Identity	宗教とアイデンティティ
6.Education in a Multicultural Society	多文化社会における教育
7.Social Perspectives through Creative Expressions	創造的表現から探る歴史認識
8.Environmental Issues	環境問題

◆ **スペシャルトピック**

1.食と健康	Food and Health
2.パフォーマンスアート	Performance Arts
3.アウトドアスポーツ	Sports and Outdoor Recreation
4.民俗工芸	Cultural Art
5.リズム&音楽	Cultural Rhythms
6.映画とアニメ	Film and Animation

第8章

第53回日米学生会議に ご協力下さった方々

協力者

賛助者・団体・企業



第 53 回日米学生会議 協力者

● 第 53 回日米学生会議主催・後援

主催： 財団法人 国際教育振興会

後援： 外務省、文部科学省、米国大使館、(財) 国際ビジネスコミュニケーション協会、
日米文化センター

● 会議開催協力 (敬称略・順不同)

第 53 回日米学生会議全般

財団法人 国際教育振興会

理事長
理事・事務局長
総務広報部部長
総務広報部

山室勇臣
鈴木堯
稲田脩
太田ゆかり
玉城美穂子

国際教育振興会賛助会

事務局長
事務局

伊部正信
飛永亜希子

JASC Inc.

理事長
専務理事

Jack Shellenberger
Grechen Donaldson

外務省

大臣官房文化交流部 人物交流課長
大臣官房文化交流部 人物交流課

高岡望
三宅妙子

文部科学省

大臣官房国際課 総務係長

永田勝

米国大使館

広報・文化交流部 文化プログラム室

松元美紀子

財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

専務理事・事務局長

GHRD 推進室室長

GHRD 推進室主任

松崎浩
鶴岡公幸
田代美智子

日米文化センター

日本代表

伊部正信

日米学生会議 OB 会

会長

幹事長

山室勇臣
中瀬正一

社団法人 日米協会

専務理事

久野明子

京王観光 株式会社

東京中央支店 課長補佐

大平浩一

株式会社 実業公報社

常務取締役

古屋繁

事前活動

—全般—

世界平和研究所理事長
 東京三菱銀行相談役
 三菱商事株式会社会長
 株式会社 インターナショナルサイエンティフィック代表取締役社長
 株式会社 インターナショナルサイエンティフィック特別顧問
 沖縄快樂時光実業株式会社専務取締役
 三井物産 株式会社
 株式会社 読売新聞社
 InfoArrow Co.,Ltd
 ベストライフ・オンライン ディレクター
 株式会社 千修
 日本電気株式会社 広報部社会貢献室

大河原良雄
 行天豊雄
 榎原稔
 白井龍夫
 山元雅信
 稲田清英
 海老原憲
 中井一平
 清水宣晶
 小宮洋
 横井靖典

—講演会・勉強会関係—

日本予防外交センター会長
 経済産業省
 慶應義塾大学教授
 国際日本文化研究センター教授
 内閣官房行政改革推進調整室
 衆議院議員
 防衛大学校教授
 慶應義塾大学総合政策学部教授
 慶應大学法学部教授
 桜美林大学副学長
 中央大学常任理事
 中央大学駿河台記念館 事務長

明石康
 角野然生
 金子勝
 川勝平太
 斎藤健
 塩崎恭久
 新治毅
 竹中平蔵
 田村次朗
 諸星裕
 三宅邦彦
 関口伸夫

本会議活動

—京都サイト—

立命館大学
 総長
 教学部教務課
 学生部

 国際関係学部
 国際関係学部教授
 京都大学法学研究科助教授
 (財)大学コンソーシアム京都
 京都外国語大学教授
 慶應義塾大学助教授/慶應義塾アートセンター所員
 アーティスト
 目黒区美術館学芸員
 法然院貫主
 株式会社 モン・デザイン
 悲田院
 大心院
 ガイドボランティア
 阿じろ

長田豊臣
 山本修司
 松井かおり
 若井勉
 河上正昌
 安藤次男
 中西寛
 坪田昌也
 大石秀夫
 熊倉敬聡
 小山田徹
 降旗千賀子
 梶田真章
 財木孝太



ー広島サイトー

広島コンベンションビューロー
 広島修道大学教授
 通訳
 平和のためのヒロシマ通訳者グループ通訳
 セジュールフジタ
 在日朝鮮人被爆者
 広島市市民局国際平和推進部
 広島コンベンションビューロー
 広島工業大学広島校舎
 広島市前市長
 広島市市民局国際平和推進部
 山口県柳井市在住
 広島平和文化センター
 テキサス大学名誉教授
 作家
 ガイドボランティア（広島学院高校5名）

秋田和宏
 岡本三夫
 大兼保子
 小倉桂子
 島本佳代子
 朱碩
 津村浩
 中島省三
 長峰道江
 平岡敬
 船岡徹
 村中啓一
 若林健祐
 T. C. Cartwright
 Rahna Reiko Rizzuto
 今岡祐輝
 大谷洋平
 小金丸茂博
 向山知尚
 宮川乃洋

ー沖縄サイトー

NPO 法人国際親善・交流サポートセンター理事長
 事務局長
 沖縄県知事
 沖縄県
 文化環境部 国際交流課
 教育庁 文化課
 教育庁 生涯学習振興課
 沖縄コンベンションセンター
 沖縄コンベンションビューロー
 株式会社 沖縄タイムス社
 論説副委員長
 沖縄県西原町教育委員会学校教育課指導主事
 沖縄県立芸術大学
 学生部学生課
 教授兼学生部長
 工芸学部講師
 ボランティア学生の方々
 沖縄県立高校英語研究会
 沖縄県立名護青年の家
 沖縄語学センター
 沖縄公論社
 沖縄国際大学
 沖縄大学
 法経学部教授
 沖縄国連研究会会長
 沖縄平和ネットワーク
 嘉手納基地

宮平進
 園鉄彦
 稲嶺惠一
 比嘉悦子
 松尾保美
 長元朝浩
 外間哲弘
 大城眞幸
 仲宗根恒
 仲本賢
 大城浩
 島袋美智子
 山口芳弘
 仲村芳信
 下地玄栄
 瑞慶覧 他四名
 普久原尚子

シアトル大学東アジア校校長
政治ジャーナリスト
同時通訳ボランティア
同時通訳ボランティア
プセナテラスビーチリゾート社長
在沖縄米国総領事館

在沖縄米国総領事館総領事
在沖縄米国総領事館領事・総務部長兼領事部長
在沖縄米国総領事館 広報・文化担当補佐官
メリーランド大学 基地内非常勤講師
陸上自衛隊那覇駐屯地
株式会社 琉球新報社
論説委員長
基地担当記者
琉球大学
医学部名誉教授
教育学部教授
法文学部教授
りゅうぎん国際化振興財団
KBC 学園校長
沖縄学生フォーラム「Student Forum in Okinawa 2001」に協力して下さった方々

—東京サイト—

外務省
米国大使館
国立オリンピック記念青少年総合センター
ホテルサンルート
経済産業省

東京大学法学部教授
東京大学法学部教授
株式会社フロントライン・ドット・ジェーピー代表取締役 CEO
事業企画推進室広報

株式会社 モン・デザイン
株式会社 イワタ
株式会社 毎日新聞社 総合企画本部企画委員 ビジネスサロン担当
株式会社 BEACON Communication

Kayoko Colston
Sheri Webb
上地昇
田村玲子
鶴田知佳子
村田久美子
国場幸一郎

Timothy Betts
George T. Novinger
高安藤
石川博三

高嶺朝一
松本

鈴木信
真栄城守定
赤嶺健治

稲垣純一

角野然生
伊藤慎介
北岡伸一
藤原帰一
藤元健太郎
宮寄律子
財木孝太
岩田有史
水野勝弘
Jim Sranzen
Teddy Tanaka

その他全般

天野順一	木ノ上高章	松井泰三
飯久保廣嗣	竹本秀人	宮本昭八
岩崎洋一郎	田端利夫	山田勝
海老原憲	辻喜久子	
大高翼	降旗健人	

第52回日米学生会議実行委員会／参加者一同

第51回日米学生会議実行委員会



第53回日米学生会議 賛助者・団体・企業 (敬称略)

財団法人 石橋財団	社団法人 日米協会
社団法人 大阪日米協会	財団法人 日商岩井国際交流財団
財団法人 鹿島平和研究所	社団法人 日本歯科医師会
社団法人 神戸日米協会	財団法人 平和中島財団
財団法人 国際教育財団	財団法人 広島国際文化財団
特殊法人 国際交流基金日米センター	財団法人 三菱銀行国際財団
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	財団法人 吉田茂国際基金
社団法人 東京倶楽部	財団法人 りゅうぎん国際化振興財団
財団法人 東京国際交流財団	

味の素 株式会社
 株式会社 イトーヨーカ堂
 オムロン 株式会社
 株式会社 オリエンタルランド
 キッコーマン 株式会社
 興和不動産 株式会社
 シダックス 株式会社
 新日本製鐵 株式会社
 住友信託銀行 株式会社
 住友不動産 株式会社
 積水ハウス 株式会社
 セコム 株式会社
 ソニー 株式会社
 株式会社 第一勧業銀行
 大成建設 株式会社
 株式会社 竹中工務店
 堤清二
 東京海上火災保険 株式会社
 株式会社 東京三菱銀行
 東京電力 株式会社
 トヨタ自動車 株式会社
 日本アイ・ビー・エム 株式会社
 株式会社 日本興業銀行

日本生命保険 相互会社
 日本たばこ産業 株式会社
 野村證券 株式会社
 ぴあ 株式会社
 株式会社 日立製作所
 株式会社 富士銀行
 富士ゼロックス 株式会社
 富士通 株式会社
 株式会社 ポピンズコーポレーション
 本田技研工業 株式会社
 松下電器産業 株式会社
 株式会社 三井住友銀行
 三井不動産 株式会社
 三井物産 株式会社
 三菱地所 株式会社
 三菱重工業 株式会社
 三菱商事 株式会社
 三菱信託銀行 株式会社
 宮沢喜一
 明治生命保険 相互会社
 安田生命保険 相互会社
 YKK 株式会社

エッソ石油 有限会社
 光洋サーモシステム 株式会社
 塩野義製薬 株式会社
 株式会社 住友スリーエム
 住友商事 株式会社
 住友電気工業 株式会社

株式会社 大和銀行
 ダウケミカル日本 株式会社
 武田薬品工業 株式会社
 デュポン 株式会社
 株式会社 電通
 凸版印刷 株式会社

日清食品 株式会社
日本イーライリリー 株式会社
藤沢薬品工業 株式会社
日立マクセル 株式会社

三菱レイヨン 株式会社
山崎製パン 株式会社
理研ビタミン 株式会社

安里周吾
中村義哉

宮本昭八
山崎秀之

編集後記

本会議が終わって3ヶ月近くが経ち、第53回日米学生会議の成果をまとめた報告書がようやく出来上がりました。

この報告書の目的には、次の3点が挙げられます。まず、第53回日米学生会議の成果を会議に御賛助、御協力いただいた多くの皆様方に感謝の意味を込めてご報告する術として。次に、まだ日米学生会議について知らない人たちに日米学生会議を知っていただくための手段として。そして最後に、第53回会議参加者並びに会議に何らかの形で携わった人達が会議終了後もこの夏に注がれた情熱を思い出すための—今後各々が人生を歩んでいく上での「力」の源として。

会議の中で起こった、数々の衝突・新たな発見・感動・友情などをつたない文書や写真で伝えることは大変困難です。今夏の日米学生会議で得られた多くのものは、けっして言葉で伝えることのできないようなものばかりです。これ一冊で日米学生会議を理解してくださいと言っても、読み手の方には酷とも言えるでしょう。しかし、出来るだけ生の声を載せようとこの報告書の執筆には日本側参加者全員を初め、「Student Forum in Okinawa 2001」参加者の声など可能な限り多くの人が携われるよう、努力いたしました。本報告書は質、量ともに充実したものになっていると考えます。

最後になりましたが、報告書発行にあたりご協力いただいた原稿執筆者、実行委員、報告書委員など全ての関係者の方々、そして何より第53回会議開催にあたり、多くの御支援、御指導をいただいた皆様に改めて深く御礼申し上げます。

報告書編集委員一同

2001年11月16日



第53回日米学生会議日本側実行委員会

第 53 回日米学生会議 日本側報告書

2001 年 11 月 30 日発行

編集：・第 53 回日米学生会議日本側実行委員会

岡本紘明・大井美歩・織田健太郎・藤井康次郎

三田重恭・森下麻衣子・山下淳一

・参加者報告書編集委員会

佐々木淳・出浦直子・中川由紀・布川俊彦・山口臨太郎

編集責任者：大井美歩・三田重恭・森下麻衣子

発行：（財）国際教育振興会内 日米学生会議事務局

〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷 1-21

Tel/Fax 03-3359-0563

印刷：（株）実業公報社

Japan-America Student Conference
Since 1934

■主 催■

 財団法人 国際教育振興会

■企画運営■

第 53 回日米学生会議実行委員会
